海の人夫

島村抱月譯

海の夫人

イプセン作
島村抱月譯

海の夫人

イブセン作

島村抱月譯

齋藤文庫藏書

海の夫人

イプセン傑作集

海の夫人

島村抱月譯

早稲田大學出版部發行

海の夫人エリーダ（松井須磨子）

イブセン傑作集

海の夫人

島村抱月譯

早稲田大學出版部發行

海の夫人エリーダ（松井須磨子）

緒言

『海の夫人』は千八百八十八年十一月、イブセンが六十歳の時の作で、『人形の家』を出してから九年目にあたる。

『海の夫人』の原名は、直譯すれば、むしろ『海からの夫人』または『海からの女』である。けれども今では『海の夫人』の方が廣く耳なれてもゐるし、稱呼としても簡潔である。且つ「の」も「から」も日本語は言ふに及ばず、洋語でも相通ずることが出來る。現に "Fruen fra Havet" はすぐに "Havfrue" であり "The Lady from the Sea" は "Sea-lady" 又は "Sea-wife" であるのだから『海の夫人』で差支ないわけである。

ノルウェー語で『海の夫人』といへば、其の同じ言葉がすぐ「人魚」といふ意

味になつて「人魚」といふ言葉のうしろには、昔々海を見棄てゝ哀れな最後を遂げた海の女性の傳說が連想せられるのであるが、そんな複雜な意味は到底譯語には現はれない。

此の劇はイブセンの作中で最も多方面なものゝ一つで、第一には彼れが後期の社會劇中唯一の喜劇である。第二には彼れが晩年の作に見はれた象徵的神秘的またはロマンチックな色彩を最も早く最も多く帶有した作である。第三には作中の思想として夫の『人形の家』『幽靈』等の續篇とも見られる程に婦人問題、結婚問題、戀愛問題が骨子となつてゐる。第四にはイブセンの他の作に多く見られない自然界の空氣が舞臺の上に導かれてゐて、五幕のうち四幕まですべて戶外の場面になつてゐる。第五にはその自然界でも北の海といふ一種特別のものを選んで、その中に自由とか神秘とかいふものを寓しやうとしてゐる。

第六には喜劇として雷に結末がめでたく終つてゐるのみでなく、全篇に滑稽を點出して舞臺面を沈鬱に過ぎないやうにしてある。第七には、繼母と繼娘との仲などの微妙な人情を描く點で殆ど人情小說のやうな味を持つてゐる。

たゞ此の作全體の組立については、稱讚するものと批難するものと、兩方の見かたがある。例へばゴッス氏(Edmund Gosse's "Northern Studies")リー夫人(Mrs. J. B. Lee's "The Ibsen Secret")等の如く、全篇を詩として美しい光輝あるものとして推稱するものと、アーチャー氏(W. Archer's "The Play Making")マクフォール氏(H. Macfall's "Ibsen")等の如く、舞臺に登す劇として力の弱い所があると批難するものと、いづれも當つた批評である。

西洋で此の劇を舞臺に登した結果もまた二樣であるらしい。イギリスは前後二回とも餘り好成績でなかつたが、ドイツ及び作者の本國で

は、非常の喝采を得て、彼れが作中最も人氣のある劇の一つになつたとゴッス氏が記してゐる(E. Gosse's "Ibsen")。

此の劇が初めて舞臺に上つたのは、千八百八十九年二月十二日クリスチアニアに於いてゞあつてイブセンのいふ所に從へば、非常の稱讃を博したといふ。ドイツでは同年三月四日ベルリンに於いてゞあるが、その時のイブセンみづからの註文が友人のホッフォリー(Julius Hoffory)教授に送つた手紙に見えてゐる。其の一節に、「番組の中へ一海員とか他國の船員とか一舵手とか書くのは不同意です。十年前エリーダが其の男に逢つた時は二等運轉士だつたが、七年後には普通の水夫長として雇はれて、段々目だゝないものになり、今は回航船の一乘客として現はれて來たのです。船手ではありません。何處を宛ともなく旅行するものゝ服裝で、たゞの旅客の服裝でもありません。何んな人だか何

といふ名だか、少しも分からない。此の茫漠とした所が卽ち私の此の場合に特に選んだ特色です。アンノー氏(監督)が此の點に注意して稽古をして呉れないと、此の劇の本當の感じが失はれる恐れがあるので す」と書いてある。つゞいてワイマーで演ぜられたのには滿足したと見えて、別の手紙に、其の時の他國人は最上の出來だつたと書いて、「春の高い、痩せた、鷹のやうな顏、突きさすやうな眼、素ばらしい深い沈んだ聲」であつたと說明してゐる("Ibsen's Speeches and New Letters")。

イギリスでは千八百九十一年五月十一日エーヴリング博士(Dr. Aveling)の監督の下に初めてロンドンのテリー座で演ぜられたが、五日だけしか續かなかつたといふ。アーチャー氏は演出法が拙であつたと評してゐる。千九百二年五月に舞臺協會が同じくロンドンのロヤルチー座でやつた時は、初めて『人形の家』のノラに成功した有名な女優ゼネット、エ

チャーチ(Janet Achurch)がエリーダに扮し、ローレンス、アーヴィング(Laurence Irving)が他國人に扮し、ノーマン、マッキンネル(Norman Mckinnel)といふのがヴングルに扮してゐる。

我が國では『藝術座』が、大正三年一月十七日から十五日間東京有樂座でチェホフの『熊』と共に此の劇を演じた。其の役割は

エリーダ……松井須磨子
ヴングル……中井哲
他國人……澤田正二郎
アルンホルム……宮島文雄
リングストランド……田中介二／田邊若男
バレステッド……倉橋仙太郎／波多讓

ボレッタ……波野雪子
ヒルダ……川路歌子

『海の夫人』の腹案は早くからイブセンにあつたものと見え、その初稿は千八百八十年に端を發してゐる。それから千八百八十六年の夏にはノルウェーのモルデといふ海濱の小町にゐて海に親しみ、翌年の夏はデンマルクのジュットランドのセービーといふ海濱町にゐて、フレデリックスハーヴンといふ港に好んで散歩などし、其の邊で同じく海や船や漁夫やに親しんだ。此のあひだに『海の夫人』の具體的な材料が調つたのである。イブセンはアーチャー氏への手紙か何かの中に「今度は一つおどけたもの(Tomfoolery)を書いて見る」と言つてゐる。ゴッス氏の記するところによると「アーチャー氏は此のころイブセンをセービーに訪問したが自分は一二年後フレデリックスハーヴンでイブセンに關する逸話を

聞いた。彼れはいつも兩手を後ろに組み、フロックコートの釦をしつかりとかけ、何時間となくフレデリックスハーヴンの海岸を獨りで大股にテクリ〳〵とあるいて、その恐るべき瞑想に耽つてゐた」といふ。それから二年たつて『海の夫人』が出來たのである。

此の書の飜譯は、イギリス文ではエーヴリング夫人(Mrs. E. Marx Aveling)のもの、クララ、ベル(Clara Bell)のもの、ジー、アール、カーペンター氏(G. R. Carpenter)のもの及びエフ、イー、アーチャー夫人(Mrs. F. E. Archer)のものゝ四種が同じ千八百八十九年から千八百九十年にかけて出た。此の最後の譯がアーチャー氏監修の『イブセン散文劇集』に出てゐるものである。私の譯は、是れを基にして、エム、フォン、ボルヒ氏(M. von Borch)の獨譯を參照した。

大正三年二月

抱月生識

海の夫人

(Fruen fra Havet=The Lady from the Sea.)

人物

醫師ヴングル（地方の醫師）〔Vangel〕
夫人エリーダ（ヴングルの妻）〔Ellida〕
ボレッタ（ヴングルの先妻の娘）〔Boletta〕
ヒルダ（同前）〔Hilda〕
アルンホルム（教師）〔Arnholm〕
リングストランド〔Lyngstrand〕
バレステッド〔Ballested〕
他國人
町の若い人、旅客、避暑客等

場所

北ノルウェーの峽灣に濱した小さい町

時

夏

第一幕

左、大きな外廊（ヴェランダ）の附いたヴングルの家、前及周圍は庭、外廊の近くに一本の旗竿が立つてゐる。右手、庭に四阿（あづまや）があつて、テーブルと何脚かの椅子が具へてある。後（うしろ）は生垣で小さい木戸がついてゐる。生垣の後から一筋の路が海濱に通じ、路の兩側に並木が立つて居る。其の間から峽灣（フヨールド）の景色が見え、また遙かの向ふには高い山脈や山巓が見える。温かに輝きわたる朗（ほがら）かな夏の朝である。

バレステッド、中年、古びた天鵞絨の短衣（ジャケット）を着、鍔の廣い美術家帽を冠つて、旗竿の傍に立ち、旗綱を案排してゐる。旗は地上に落ちてゐる。少し離れて、畫布を張つた畫架が据えてある。其のそばの疊床几の上には幾本かの刷毛調色板、繪具箱。

ボレッタ、庭に面した室の、明いたまゝの戸口から外廊に出て來る。持つて來た大きな瓶に花の生けてあるのをテーブルの上に置く。

ボレッタ　何うして？　バレステッドさん、――うまく上つて？

バレステッド　えゝ、えゝ、あなた、雜作はありません――何ですか、今日は、お客樣なんですか？

ボレッタ　さうなの、アルンホルムさんが今朝見える筈ですよ、昨夜お着きになつたのですから。

バレステッド　アルンホルム？　待つて下さい――アルンホルムといふと、あの先生の事ですか、そら、何年か前にこちらであなたの家庭教師をしてゐらつしやつた？

ボレッタ　さうですよ、あの方ですよ。

バレステッド　あ、さうですか。また此の土地へ入らつしやつたんですね？

ボレッタ　それで旗を上げやうといふの。

バレステッド　なるほど、さういふ譯ですか。

ボレッタはまた室内にはいる。と、すぐリングストランドが路を通つて右手から現はれ、畫架や畫具を見つけ、興味を覺えて立ち止まる。粗末ではあるがさつぱりした身なりで、弱々しいきやしやな體つきをした若者である。

リングストランド（生垣の外で）お早う。

バレステッド（ふり返つて）や、お早う。（旗を上げる）さうら！――どん〳〵上つて行く！（綱を結びつけ、忙しげに畫をかきはじめる）お早うさん。失禮ですが何方でしたか、まだ――

リングストランド　君は畫家でゐらつしやるのでせう？

バレステッド　さうですとも。畫家でなくてどうするものですか。

リングストランド　あゝ、さうでせう――一寸這入つてもいゝでせうか？

バレステッド　此の畫が見たいのかね？

リングストランド　えゝ、是非拜見したいのです。

パレステッド　まだ〳〵、物になつちやゐないんです。併し、まあお這入んなさい――構はず、這入つていらつしやい。

リングストランド　どうも有難う（庭の入口からはいる。）

パレステッド（畫を書き乍ら）今描いてるのは、向ふの峽灣です、島と島の間の。

リングストランド　さうのやうですね。

パレステッド　併しまだ人物を入れないのです。町中探したつてモデルになるやうな者がないんだからね。

リングストランド　あゝ、人物が入るんですか？

パレステッド　さうです。此の前景の岩の所へ。人物と言つても、半分死にかゝつた人魚を置きたいと思ふんです。

リングストランド　何うして死にかゝつたのをです？

パレステッド　沖から紛れ込んで來て、歸ることが出來ないで、こゝの鹽からい水につかつたまゝ一寸々々死んで行くといふのです。

リングストランド　あ、さういふのですか？

パレステッド　僕にその意匠を授けて呉れたのは、この家の夫人なのです。

リングストランド　出來あがつたら、何といふ題になるのでせう？

パレステッド　さうさね僕は『人魚の最後』といふ題にしやうと思つてゐます。

リングストランド　それはいゝ――屹度好い作になるでせう。

パレステッド（相手を見て）君も此の方をやるんだね？

リングストランド　畫をですか？

バレステッド　畫をさ。

リングストランド　いゝえ、僕は、畫はかきませんが、彫刻家にならうと思つてるんです。ハンス、リングストランドと言ふ者です。

バレステッド　彫刻家になるんですか君は？　好いね、彫刻も立派な、いきな藝術だ。――僕は一二度君を町で見かけたやうに思ふがもう長く此の土地に滯在しておいでですか？

リングストランド　いえ、まだ二週間にしかなりませんが夏中ずつと居て見たいと思ひます。

バレステッド　海水浴の樂しい氣分を味ふといふ譯だね、えゝ？

リングストランド　僕のは、も少し氣力を回復したいためですよ。

バレステッド　身體虛弱といふのかね？

リングストランド　えゝ、少しばかり其の方ですが、でも心配するほどぢや

ないんです。たゞ少し呼吸が苦しいだけですから。

バレステッド　なあんだ――それつぱかしの事か！　だが、やつぱり良い醫者には診て貰ひ給へよ。

リングストランド　僕も、折があつたら、一度ヴングル先生に診て戴かうと思つてゐます。

バレステッド　あゝ、さうなさい。（左の方を見て）又汽船がはいつて來る。お客で一ぱいだ。實に驚くね、この四五年、旅行の盛んになつた事つたら。

リングストランド　さうですね、隨分と交通が盛んなやうですね。

バレステッド　それから避暑客で町は一杯だ。僕は時々心配するんだが、かう出這入りが烈しくつちや此の結構な町の特色が無くなつてしまやしないか。

リングストランド　君は、此の土地のお方ですか？

バレステッド　いや、さうぢやない。併し僕はもう此の土地にアックラ——アックリマタイズしてゐるんです。同化してゐるんです。時と習慣の力で引き付けられちやつたのです。

リングストランド　ぢや、長くこちらに住んでゐらつしやるのですか？

バレステッド　さうさ、十七八年になりませう。僕はもとシイヴエ一座の演劇團に加はつて來たのですよ。それが君、儲からないで、御難と來たから、とう〳〵散り〳〵ばら〳〵さ。

リングストランド　でも君だけは留まつたといふ譯ですか。

バレステッド　僕は留まつたさ。僕はさう困りあしないんです。重に背景の方をやつてゐたんだからね。

（ボレッタ搖椅子を携へて出で來り、外廊に置く。）

ボレッタ（室の方へ話しかける）ヒルダや——そつちに繡のしてある足臺があつたらお父さんの分に持つて來てお上げな。

リングストランド（外廊の方へ行き腰をかがめ辭儀をして）お嬢さん。お早う御座います。

ボレッタ（欄の所で）あ、あなたでしたかリングストランドさん？お早う御座います。ちよつと御免下さいな——私ちよつと——（家の中へ這入る）

バレステッド　君は此の家を御存じかね？

リングストランド　知つてるといふ程でもないのですが、令嬢たちに他の家で一二度逢つた事がありますし。それから、奥さんとも此の前見晴しで音樂のあつた時お近づきになつて、遊びに來るように言つて下すつたのです。

バレステッド　それだ君。――此の家と懇意にして置かなくちやうそだよ。

リングストランド　ですから、一度おたづねしやうと思つてゐたのです――たゞ一種の訪問でいゝのですからね。何か好い口實がありさへすれば――

バレステッド　馬鹿な、口實なんか――（左方を見る）――大變々々！（道具を片付ける）汽船がもう埠頭へ横付けになりやあがつた。僕はすぐホテルへ行かなくちや。新しく着いたお客が僕を探してるだらうから。ねえ君、僕はこれで斬髪屋もやるんたからね。

リングストランド　君は中々器用だと見えますね。

バレステッド　そこがアック――クリマタイズする必要なのだ、郷に入つては郷に從へで、こんな狹い土地だと、何んな職業にでも同化しな

くつちやあいけません。若し君に、頭の物が――香油だの何だのと――お入り用の時は、舞踏教師バレステッドへおたづねなさい、すぐ間にあひます。

リングストランド　舞踏教師ですか？

バレステッド　または音樂會會長とお尋ねなすつても分かる。今晩あの見晴で、音樂會をやります。左樣なら、左樣なら。

（道具を纏め、庭木戸を通つて左方に去る。ヒルダ足臺を持つて出て來る。ボレッタ更に花を持つて來る。リングストランド庭にゐてヒルダに一禮する）

ヒルダ　（欄干によりかゝり禮を返さないで）姉さんに聞きましたよ、あなたが今日だしぬけに入らつしつたつて。

リングストランド　えゝ、お許しも受けないでお庭へ這入つて來ました。

ヒルダ　朝の御散歩？

リングストランド　えい、いゝえ、――今日はあんまり散歩しなかつたのです。

ヒルダ　ぢや、海水浴？

リングストランド　えゝ、ちよつと浸つて見ました。おつ母さんもあそこにいらつしやいましたよ。丁度浴舍へお這入りの所でした。

ヒルダ　誰がですつて？

リングストランド　あなたのおつ母さんが。

ヒルダ　おや、さう。（搖椅子の前に足臺を置く。）

ボレッタ　（話を他へそらさうとするやうに。）あなた、峽灣の方に父の船らしいものを御覽なさらなくて？

リングストランド　えゝ、たしか、帆船が一艘這入つて來るのを見ました。

ボレッタ　それが屹度お父さんよ。お父さんはね、彼方の島へ患者を診にいらしつたのですよ。

（卓子の邊りの物を片付ける。）

リングストランド　（外廊の最下の階段に立つてゐて）おや、綺麗な花ですねえ？

ボレッタ　えゝ、綺麗でせう？

リングストランド　實に美しいですね。何かお祝い事でもあるんぢやないかと思はれますね。

ヒルダ　それがあるのよ。

リングストランド　さう想ひました。お父さんの御誕生日ですか？

ボレッタ　（ヒルダを警しめるやうに）ふむ――ふむ！

ヒルダ　（それに構はず）いゝえ、お母さんの。

リングストランド　あゝ、さうですか――おつ母さんのですか？

ボレッタ　（低いたしなめるやうな調子で）まあ、ヒルダ――！

ヒルダ　（前と同じ調子で）構はなくてよ！（リングストランドに）あなた、もうお

晝飯なのよ、お歸りでせう？

リングストランド　（階段を降り乍ら）　さうですね、何か喰らなくちやなりませんが。

ヒルダ　屹度何ですわね、ホテルではおいしいものが召しあがられるのでせう？

リングストランド　僕は今ホテルにはゐません。金がかゝつていけませんから。

ヒルダ　ぢや今は、何處にゐらつしやるの？

リングストランド　イェンゼンさんの所に間借をしてゐます。

ヒルダ　イェンゼンさんといふと？

リングストランド　あの、産婆のです。

ヒルダ　御免なさいよ、リングストランドさん、だつて、私忙しいんですよ

リングストランド　あゝ、僕、失禮な事を申したのぢやありますまいか？

ヒルダ　何をです？

リングストランド　今申した事がです。

ヒルダ　（頭から爪先迄ぢろ〳〵と見て）私、ちつともあなたの仰しやる事が分からないわ。

リングストランド　いや、なに。何です、今日はこれでお暇します。さようなら、皆さん。

ポレッタ　（階段の所に進み出て）左樣なら、左樣なら、今日はほんとに失禮でしたわね――でも此のつぎお差支がなくて、――お氣の向いたとき――いらつしつて下さいな、そしたら父もお目にかゝれませうし――ほかのものもね。

リングストランド　どうも有難う。是非さうさせていたゞきます。

（彼は禮をして庭口から去る。外の路を左に出た時又外廊の方に禮をする）

ヒルダ（聲を低めて）　アヂュー、モッシュー！　イェンゼン婆さんに宜しく。

ポレッタ（腕を捉へて靜に）ヒルダ――！　お前、仕樣のない子だね！　氣ちがひだよ。　聞こえるぢやないか！

ヒルダ　プー――それが何うしたといふの？

ポレッタ（右手を見やって）お父さんがいらつしやる。

（醫師ヴングル旅行服に手鞄を持ち、右手の路から來る。）

ヴングル　さあ、歸つたよ、お前たち！（庭口から入る。）

ポレッタ（庭に出迎へて）　おゝ、うれしい、歸つて來て下すつて。

ヒルダ（矢張り降りて行って）お父さん、それで今日の御用はすつかり？

ヴングル　まだ〳〵、も少し經つと、外科室の方へ行つて來なくつちやー

―あ、さう〳〵――アルンホルムさんは着いたか、お前たち知らないかい。

ポレッタ　昨夜お着きになりました。ホテルへ聞きにやつたのですよ。

ヴングル　ぢやまだ會ひはしないんだね？

ポレッタ　えゝ、だけど、屹度今日お午前にいらつしやるでせうよ。

ヴングル　あゝ、さうだらうな。

ヒルダ（父を引つぱって）お父さんてば、そら、よく御覽なさいな。

ヴングル（外廊の方を見て）ほう、なるほどな――まるでお祭りだね。

ポレッタ　ねえ、綺麗に出來たでせう？

ヴングル　あゝ、全く綺麗に出來た――あれは――家にはお前達だけかい？

ヒルダ　さうなの。あれはね――

ボレッタ（急いでそれを遮り）　おつ母さんは海水浴にいらつしやいました。

ヴングル（物優しくボレッタを見て頭に手を置き。そしてためらふ樣に言ふ。）ねえ、お前達は――かうして終日飾つておく積りかい。それから旗も上げたまゝで？

ヒルダ　だつてきまつてるぢやありませんか、お父さん！

ヴングル　ふむ――そりやさうだがね、併し――

ボレッタ（頷いて微笑し乍ら）ですけど、みんなアルンホルムさんが見えるからぢやありせんか。あんな舊友の方が始めてお父さんに會ひにいらつしやるのですもの――

ヒルダ（笑ひ乍ら父を搖ぶつて）ね、お父さん――あの方、姉さんの家庭教師だつたのぢやありませんか？

ヴングル（半ば笑つて）お前たちはいたづらつ子だね、――まあ〳〵――何といつた所で、亡くなつた人を紀念するのは自然の人情だ。併しそれはそうでも――さ、ヒルダ（手鞄を渡し）これを外科室に持つて行つて呉れ――だが、やつぱり、どうも――私は今日のやうな事をして欲しくないね――斯ういふやり口がいけないのだよ。毎年斯うして――まあ〳〵、仕方はない、外に方法もないだらうからね。

ヒルダ（庭口から左手へ手鞄を持つて行かうとして立ち止まり、振り向いて指し）あの方を御覽なさい、こつちへ來ます。屹度アルンホルムさんなのよ。

ボレッタ（同じ方を見て）あの方だつて？（笑ふ）よかつたね、あんな好い年をした人がアルンホルムさんだなんて！

ヴングル　まあ、お待ち、たしかに彼れに違ひない！さうだ、屹度さうだ！

ボレッタ（凝と見て、愕いて）さうです、さうなのですよ――！

（アルンホルム瀟洒たるモーニングドレス朝出服。金縁の眼鏡で輕い杖を持ち左手の路から現はれる。稍過勞した風がある。庭にゐる人々を見て親しさうに禮をし庭口から入る。）

ヴングル　（出迎へて）やあ、アルンホルムさん、よくお出で下すつた、君の古巣へよく歸つて來て下すつた！

アルンホルム　ありがたう、ありがたう、どうもありがたう（握手して、共に庭園を横切る。）やあ、お子さん達もいらつしやるね！（手を差し出し顏を見る。）お二人とも殆んど見おぼへがありません。

ヴングル　さうでせうとも、其の筈です。

アルンホルム　あゝ、さう――ボッレッタさんだけは多分――さうです、ボレッタさんだけは知つてゐる譯です。

ヴングル　それも覺束ないでせう？　さうさね、君が最後にあれにお會ひ

なすつてから、もう八九年たちます。あゝ、あの頃から見ると、大分世の中が變りましたよ。

アルンホルム　（四邊を見廻し）さうでもないぢやありませんか。庭木が幾らか大きくなつて、それから彼處に四阿が新築された位のものです――

ヴングル　いや、外見だけは恐らく――

アルンホルム　（微笑して）それから無論お家には、二人のお嬢さんがあの通り大きくなつてゐらつしやるし。

ヴングル　それは、一人だけは全く大人びても來ましたがね。

ヒルダ　（少し聲高に）ほら、お父さんが、あんな事を言つてるよ！

ヴングル　まあ、どうです廊下でおかけなすつては。あちらの方が此處よりは涼しいでせう。さあいらつしやい。

アルンホルム　ありがたう。

（二人は階段を上る。ヴングルはアルンホルムに搖椅子をすゝめる。）

ヴングル　さあそちらへ。まあ緩と樂にゐて下さい旅行でお勞れのやうだ。

アルンホルム　おゝ、何でもありません。かうしてまた此方へ參りますと――

ボレッタ（ヴングルに）曹達水と單舍でも少しばかり其の部屋へ持つて參りませうか？外は今に暑くなりますから。

ヴングル　あゝ、さうして呉れ。曹達水と單舍とそれからコニャック酒も少しある方がよからう。

ボレッタ　コニャック酒もですか？

ヴングル　ほんの少しで宜い。その方を望む方があるかも知れんから。

ボレッタ　宜御座んす。ヒルダ、お前は手鞄を外科室へ持つて行つておヽ呉れな。

（ボレッタ室の中に入り、戸を閉める。ヒルダは鞄を取り上げ庭を通り左手家の後ろに消える。）

アルンホルム（ボレッタを見送つてゐたが）いゝお娘さんだ――二人ともいゝお娘さんになりましたね！

ヴングル（腰を下し）ねえ、さうでせう？

アルンホルム　ボレッタさんには全く愕きました――ヒルダさんもさうだが――たゞあなた御自身は――どうですか、是れから先ずつと此處にお住ゐのお積りですか？

ヴングル　えゝ、えゝ、さうなる他は無いでせう。私は此の土地に生れて此の土地で育つて所謂土地兒です。こゝで亡なつた妻と何不足な

く幸福な生活を送つてゐたのが、妻はあんなに早く世を去つて了ふし――あれの事は、君も以前こゝにゐらつしやつて、よく御承知の通りですがねえ。

アルンホルム　はあ――はあ。

ヴングル　で今の所ぢや、あれの代りに來て呉れた妻と極めて幸福な生活を送つてゐるのです。まあ、私も運がいゝと言はなくちやなりますまい。

アルンホルム　今度の奥さんには、お子さんは無いのでしたな？

ヴングル　男の兒が一人ありましたよ、二年か二年半程前でしたが、育たないでね、四五ヶ月目に死んで了ひました。

アルンホルム　奥さんは今お留守なのですか？

ヴングル　えゝ、でも、もうすぐ歸つて來ませう。海水浴に行つてゐます。

妻は此の季節になると一日も缺かさず出かけるのですよ、天氣が好からうが惡からうが、お構ひなしです。

アルンホルム　お加減が惡いのですか？

ヴングル　いや、それ程でもないのですが、此の二三年、不思議に神經過敏になりましてね――時々變です。一體何でさうなるのか私には見當がつかない。兎に角斯うして毎日海に浸るのが、あれの生命でも喜びでもあるのです。

アルンホルム　考へて見ると、前からさうでしたよ。

ヴングル（殆ど認め難い程の微笑で）　あゝ、さうでせうとも。君はショルドヴィックで先生をしておいでの頃からエリーダを御存じでしたな。

アルンホルム　無論です。よく牧師館へいらつしつたものです。それから私もあの方のお父さんが燈臺守をしてゐられる所へお話しに

行つて、よくあの方にお目にかゝりました。

ヴングル　その燈臺の生活が、あれに深い印象を殘したのですよ。迚も此の邊の町に住んでゐるものには分らない事です。土地の人は彼女を『海の夫人』と呼んでゐますよ。

アルンホルム　さうですか？

ヴングル　えゝ。ですからね、君――彼女に昔話をしてやつて下さい、アルンホルムさん。そしたら、あれの爲に、どんなにか效驗があるでせう。

アルンホルム（訝しげに見て）と仰しやるのは、何か理由があつてですか？

ヴングル　あります、たしかに理由があります。

エリーダの聲（外、庭園右手から聞える）あなた、そこにゐらつしやるの？

ヴングル（起ち上り乍ら）あゝ、ゐるよ。

（ヴングル夫人、大きな輕い緩やかな外套を纏ひ濡れた髮を兩肩にゆるく垂れて、亭の側の樹木の中から出る。アルンホルム立ち上る。）

ヴングル（微笑し乍ら手を差し延べて）あゝ、人魚さんが來たね！

エリーダ（急いて外廊に上り來りヴングルの兩手を取り）まあよかつた、無事で歸つて下すつたわね！。何時歸つていらしたの？

ヴングル　唯今――ほんの少し前に。（アルンホルムを指して）だがお前、舊いお馴染に――何も言はないのか？

エリーダ（アルンホルムの方へ手を差し出して）ほんとにあなたいらつしやつたのね？よくいらつしやいました！留守になんかしてゐて、御免下さいな――

アルンホルム　おゝ、そんな事を。どうぞお構ひ下さらないように――

ヴングル　今日は海水は綺麗だつたか、冷たかつたかい。

エリーダ　冷たい！だつて此處の海水は少しも冷たかありません――生温くつて、感じが鈍くて、つまらない！此の邊の峽灣の水は病んでるやうですよ。

アルンホルム　病んでゐますつて？

エリーダ　えゝ、病んでるやうですよ。浴びるものまで病みついて了ひさうですよ。

ヴングル（微笑して）海水浴場に取つちや、有難い證明書だね。

アルンホルム　それよりか奥さん、私は、あなたが海といふものに一種特別の關係を持つてゐらつしやると言ひたいのです。海と海に關するすべての物にね。

エリーダ　さあ、さうかも知れません。私も何だかそんな風に思ひます、それはさうと、御覽なさいな、娘たちが、あなたがいらつしやるといふのでそこいらを裝飾しましたこと！

ヴングル（當惑して）ふむ（懷中時計を見て）時間になつたから行つて來なくちやならない――

アルンホルム　實際私が來るためでせうか？

エリーダ　だつて、無論ですとも。不斷はこんなに綺麗にしちやゐませんよ――は！こんな屋根下へ這入ると暑いこと、息がつまりさう！（庭園に降りる）此處へいらつしやいな！こゝだとせめて息がつけますから。（四阿の中に座る。）

アルンホルム（其方へ行つて）此の邊の空氣は全く新鮮なやうですね。

エリーダ　あゝ、あなた方にはね、クリスチアニアの濁つた空氣に馴れていらつしやるとさうでせうよ。あの邊は、夏は全くひどいといふぢやありませんか。

ヴングル（同じく庭園に降りて來て）ふむ、エリーダや、ぢや私はちよつと失禮しなくちやならないから、暫くのあひだお前こゝで久しぶりのお友達をもてなしておあげ。

エリーダ　あなたは何かお仕事？

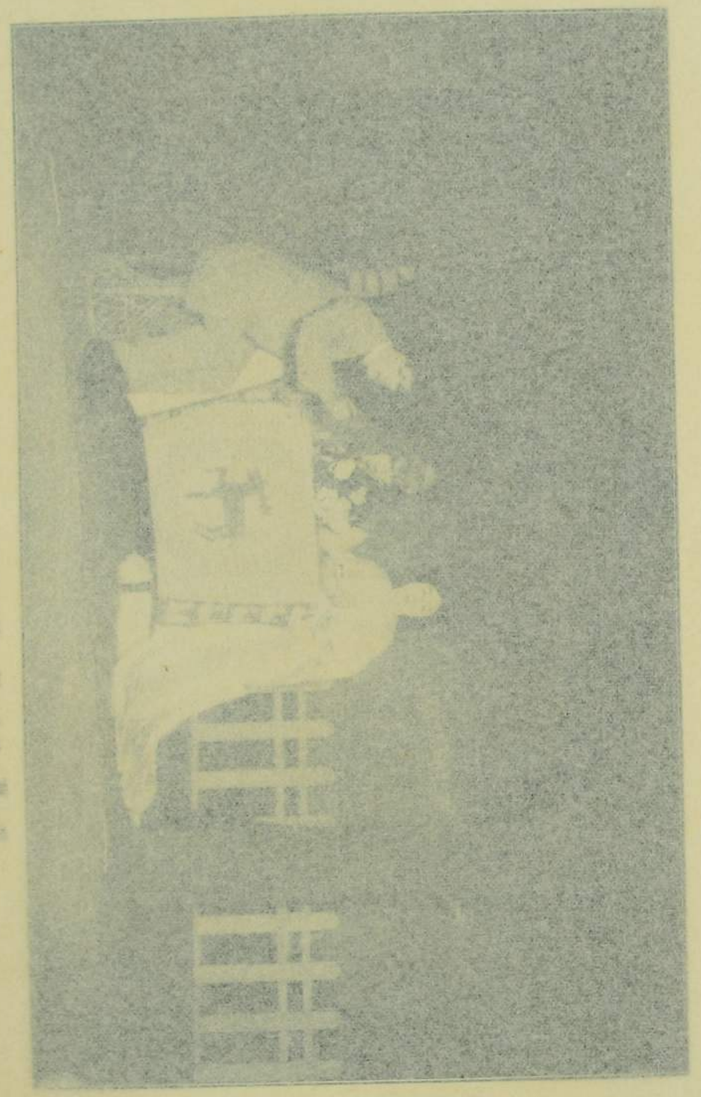
ヴングル　あゝ、私は外科室へ行つて來なくちやならない。それから服も着更へなくちやならない。もつとも、さう長くはかゝるまいよ—

アルンホルム（四阿の中に席を取り。）何半御緩くりと。私が奥さんのお相手はしてゐますから。

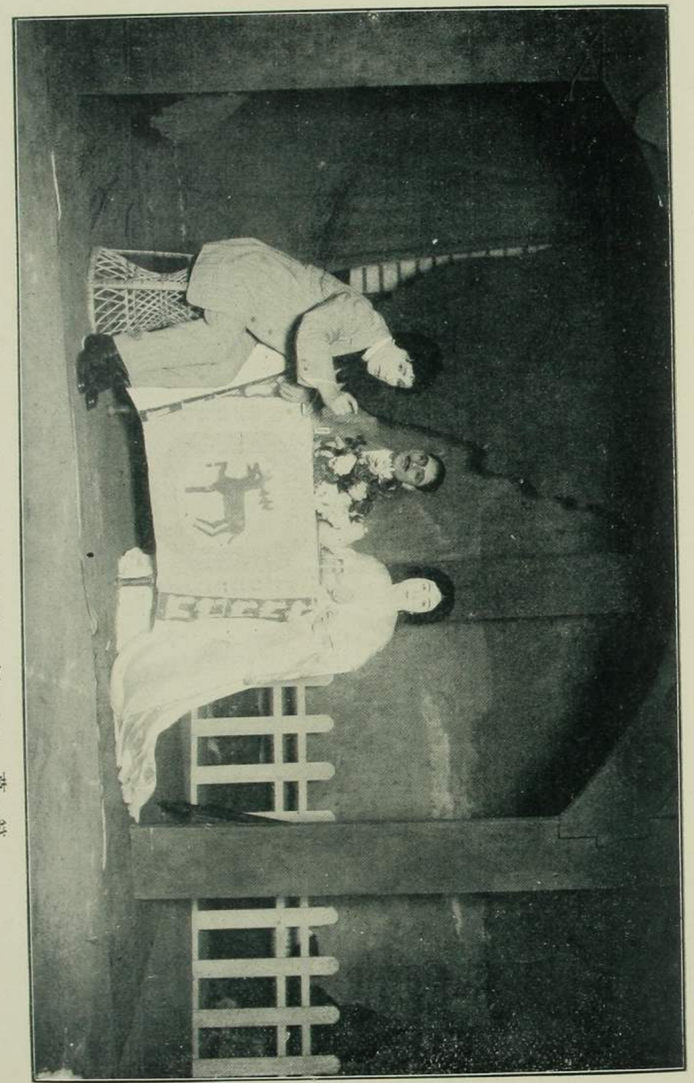
ヴングル　あゝ、さう願ひます——是非あなたでなくちや。さあ〳〵少しの間失禮しますよ！（庭を通り左方に去る）

エリーダ（ちよつと沈默の後）こゝに腰かけてゐるといゝ氣持でせう？

アルンホルム　はあ、非常にいゝ氣持ですね。



ドンクトスプンド　ヒルダ　ヴングル　第一幕



第一幕　ヨーリエ　ダ　ルルボシルア　トンラトスケン

ヴンゲル　（間じく庭園に降りて來て）　ふむ、エリーダやぢや私はちよつと失禮しなくちやならないから、暫くのあひだお前こゝで久しぶりのお友達をもてなしておあげ。

エリーダ　あなたは何かお仕事？

ヴンゲル　あゝ、私は外科室へ行つて來なくちやならない。それから服も着替へなくちやならない。もつとも、さう長くはかゝるまいぞ！

アルンホルム　（四阿の中に席を取り。）何卒御緩くりと。私が奥さんのお相手はしてゐますから。

ヴンゲル　あゝ、さう願ひます——是非あなたでなくちや。さあ〳〵少しの間失禮しますよ！（庭を通り左方に出る）

エリーダ　（ちよつと沈默の後）こゝに腰かけてゐるといゝ氣持でせう？

アルンホルム　はあ、非常にいゝ氣持ですね。

エリーダ　こゝは私の四阿と言つてるのですよ、私が拵らへさせたのです。ワングルが私の爲に拵へて呉れたのです。

アルンホルム　で、あなたは、いつもこゝにいらつしやるのですか？

エリーダ　えゝ、一日中大部分はこゝで過します。

アルンホルム　お娘さんたちと？

エリーダ　いゝえ――娘達は大抵廊下の方にゐます。

アルンホルム　そして御主人は？

エリーダ　あゝ、あれは往つたり來たりしてゐます。こゝで私と一緒にゐる時もあるし。

アルンホルム　そんな風になすつたのはあなたの案ですか？

エリーダ　それがどちらの爲にも一番都合がいゝだらうと思ひますのいつでも向うとこつちとでかけ合ひに話すことが出來て――何か

言ふ事のある場合にはね。

アルンホルム（ちよつと考へてゐて）此の前あなたの家へお邪魔に出たのは――ショルドヴヰックでの事ですね――ふむ――あれからもう餘程になりますね――

エリーダ　ちやうど十年ですよ、あなたがあそこへ來て下すつてから。

アルンホルム　あゝ、そんな事でせう。けれども、あの燈臺に居らつしやつた頃のあなたは――！あの老人の牧師が「異敎徒」と言つて居ましたつけ。お父さんが、洗禮の時にあなたの名を、船の名から取つて、普通のキリスト敎の名をつけなかつたからだと言つてゐました。

エリーダ　はあ、それから？

アルンホルム　斯うしてヴングル夫人としてお目にかゝらうとは實に豫想しなかつた事です。

エリーダ　えゝ、あの頃は主人がまだ――あの娘達の初めの母が生きてゐた時でしたよ――あれらの本當の母がね――

アルンホルム　さうでした〳〵。けれども、そんな事がなくつたつて――獨身でいらつしやつた所で――こんな事にならうとは豫期しなかつたでせうよ。

エリーダ　私だつてさうです。夢にもこんな事を――あの頃。

アルンホルム　ヴングルさんは實に立派な人です。あんなに高潔で、誰に對しても親切な善い人です。

エリーダ（溫情を持つて心から）えゝ、全くさうね！

アルンホルム　――併し、私の見る所では性質はまるであなたと違つてゐるやうです。

エリーダ　それも仰しやる通りですよ。私達は現にもう別々なのです。

アルンホルム　はあ、どういふ事からさうなりました？　どうしたのです？

エリーダ　それは聞かないで置いて下さいなアルンホルムさん。私には説明することが出來ないと思ひますから。それに、説明が出來たとしても、私の言ふ事は、一句だつてあなたに分りますまいよ。

アルンホルム　ふむ――（更に柔かに）あなた、今までに何か私の事を御主人にお話しなすつた事がありますか？　つまり、無論あの不成功に終つた、私の向ふ見ずな企ての事を。

エリーダ　いゝえ。そんな事を私が話すと思つてらつしやるの？　一言も話した事はありませんよ――今おつしやつたやうな事は。

アルンホルム　それで安心しました。私は少し困つてゐたのです、若しやと思ひましてね――

エリーダ　ちつともそんな心配はいりません。私たゞ眞實の事を話したのです――彼地にゐるあひだ、私はあなたが一番好きで一番眞實な善いお友達だつたといふ事をです。

アルンホルム　それは有難う。併し、ねえ――なぜあなたは、お別れしてから、一度もお便りを下さらなかつたのですか？

エリーダ　それはね、私から便りをお聞きになるのは、あなたには苦痛でせうと思つたからですよ――あなたのお望みに從ふことの出來なかつた私ですもの。何だか古疵を發くやうだと思つたのですよ。

アルンホルム　ふむ――さうです〳〵。御もつともです。

エリーダ　けれどあなたこそ、なぜ一度もお手紙を下さらなかつたの？

アルンホルム（顏を見つめて、半ば咎めるやうに微笑し）私？　私から先に？　そして、また盛りかへして來る氣かと疑ぐられてですか、一度擊退せられ

た癖に？

エリーダ　いゝえ、それは私にも分つてゐますよ――で、あなたは、其の後他に誰とも、何うといふ事はお考へなさらなかつたのですか？

アルンホルム　少しも。私はたゞ忠實にあの想出で滿足してゐました。

エリーダ　（半ば冗談のやうに）おゝ、くだらない！昔の悲しい想出なんか打ちやつておいて了ひなさいな。仕合せな夫になる工風をなさる方が、ずつと優ですよ。

アルンホルム　さうだと、もうくづ〳〵しては居られませんよ、奥さん。

エリーダ　ねえ――お耻しい次第ですが――三十七は二度來ませんからね。それなら、猶の事急がなくちやならないぢやありませんか。

（少しの間默つてゐて、そして熱心に低い調子で）ですけどねえ、アルンホルムさん――私ね、あの頃自分を救ふ必要から、どうしてもあなたにお話し出來なかつた事を、今お話しますわ。

アルンホルム　何ういふ事でせう？

エリーダ　あなたがね――今仰しやつた不成功な事をお望みなすつた時は――私、あゝよりほかお答へのしやうが無かつたのです。

アルンホルム　それは分つてゐます。あなたが私に下さるものは、友情しか無かつたのです。それはよく承知してゐます。

エリーダ　併しあなたはあの時私の心も考も全く他の方へ傾いてゐた事を御存じないでせう？

アルンホルム　あの時？

エリーダ　えゝ、ちやうどあの頃。

アルンホルム　けれども、それは有り得べからざる事ですよ！あなたは時を思ひ違へてゐらつしやる！その頃あなたはまだヴングルさん

を御存じの筈はないのですもの。

エリーダ　私の言つてるのはヴングルの事ぢやありません。

アルンホルム　ヴングルさんでないんですつて？併しあの頃――ショルドウィツクで――あなたの氣に入りさうな者は、他には一人も居なかつたと思ひます。

エリーダ　えゝ、えゝ――それやさうに違ひありません。全體が氣違ひじみたお話なのですもの。

アルンホルム　どうかそれを聞かせて下さい！

エリーダ　ねえ、あの頃の私は、自由でなかつたのですよ、それだけ言つて置けば澤山。お分りでせう？

アルンホルム　で、その時若し自由だつたとすれば？

エリーダ　それが何うといふのでせう？

アルンホルム　あなたの私に下さる御返事は違つてゐたでせうか？

エリーダ　どうしてそんな事が分かりませう？ヴングルの時には違つてゐたのですけれど。

アルンホルム　ぢや何のためにあなたは自由でなかつたなんて事を仰しやるんですか？

エリーダ（心苦しく心配さうに立ち上り）だつて私、誰れか打ち明け話の出來る人が無くちや困るのですもの。いえ〳〵、座つたまゝでゐて下さい。

アルンホルム　ぢや御主人は何も其の事を御存じないのですか？

エリーダ　私の心が一度他のあるものに引きつけられてゐたといふ話は、最初にしたのですけれど、夫はそれ以上聞かうともしないのですよ。それからといふもの、遂に一度もその話をしたことはありませ

ん。兎に角氣ちがひ染みたお話に過ぎないのですからね。そしてそれもすぐお了ひになつて了ひました。少なくも――或る意味では。

アルンホルム　（立ち上り）或る意味だけで？すつかりぢやないんですか？

エリーダ　いゝえ、それは無論片づいたのですよ！あなたね、そんな風にお考へなすつちや、まるで違ひますよ。まあ、到底説明の出來ない事なのです。何うといつて、お話しする言葉もないと思ひますわ。つまり私は病氣だつたのか、それとも氣が狂つてゐたかとしか思はれないでせう？

アルンホルム　ねえ、奥さん――いよ〳〵そのお話をすつかり私に聞かして下さらなくちやなりません、聞かして下さるでせう？

エリーダ　さう仰しやるなら、話して見ませうが、あなたの、その健全な常

識で、どうして斯んな事が考へられませう――（外を見、そして止める。）ちよつと。此の次にしませう――誰か來ます。

（リングストランド左手から路に現はれ、庭園に入る。釦穴に花を挿し、手には紙で包んでリボンをかけた大きな花束を持つてゐる。外廊の前で立ち止まり、ちよつと躊躇する）

エリーダ　（四阿の口の方へ來て）娘達を探してらつしやるのですか、リングストランドさん？

リングストランド　（振り向きて）あゝ、そこにいらつしやいましたか、奥さん（禮をして近寄る）いえ、さういふ譯ぢやございません――お嬢さんたちぢやございません。奥さんをお探ししてゐたのです。伺がつてもいゝといふお許しでしたから――

エリーダ　えゝ、えゝ、さうですとも、いつでもいらっしつて下さいな。

リングストランド　難有御座います。ちやうど運よく今日はお宅のお祝ひ日だと承はつたものですから――

エリーダ　あゝ、それを御存じですか？

リングストランド　はあ、で私はこれを奥さんに献じたいと思ひまして――

――（禮をして花束を差し出す。）

エリーダ　（微笑して）だつて、リングストランドさん、その綺麗なお花はアルンホルムさんにお上げなさるのぢやありませんか？今日はあの方のためなのですから――

リングストランド　（面くらつて二人の顔を見くらべどうも失禮を――私其の方を存じませんが。たゞ、その――奥さん是れはお誕生日のお祝ひのつもりでございます。

エリーダ　誕生日のお祝ひ？あなた、思ひ違ひをしていらつしやるのですよ。宅では今日誰れの誕生日でもございません。

リングストランド　（靜かに微笑して）いや、それは萬事承知して居ります。併しそれほど秘密な事だとは知りませんでした。

エリーダ　御承知だつて、何をですか？

リングストランド　あなたの御誕生日だといふ事です、奥さん。

エリーダ　私の？

アルンホルム　（不審相にエリーダを見て）今日が？なあに、そんな事はない。

エリーダ　（リングストランドに）どうしてさうお思ひなすつたの？

リングストランド　ヒルダさんがさう仰しやつたのです。ちやうど今少し前におうかゞひしましたらお嬢さんがたが、花や旗をこんなに立派にお飾りになつてゐますから、お聞きしたのです――

エリーダ　それで？

リングストランド　――するとヒルダさんの仰しやるには、『おつ母さんの誕生日ですから』つて。

エリーダ　おつ母さんの――！あゝ、さう。

アルンホルム　ははあ！

（アルンホルムとエリーダとは分かつたといふ風に顔を見合はす。）

アルンホルム　ねえ、奥さん、その若い方がさう御承知の上は――

エリーダ（リングストランドに）えゝ、あなたが御存じでゐらしやる以上は――

リングストランド（花束を又差し出して）祝意を表させて下さいますやうに――？

エリーダ（花を取り）どうも有難う、――ちよつとおかけなさいませんか、リングストランドさん？

（エリーダ、アルンホルム、リングストランドみな四阿の席につく。）

エリーダ　此の事は一切――私の誕生日だと申す事は――秘密にして置く筈だつたのですよ。

アルンホルム　さうのやうですね。吾々外部のものにはおつしやらない事になつてゐたのですね。

エリーダ（花束を卓上に置く）えゝ、さうなの。外部の方には申さなかつたのですよ。

リングストランド　私はお誓ひいたします、生きてる者には誰れにだつて此の事は口外いたしません。

エリーダ　おゝ、そんな意味で申したのぢやありませんよ。――で、あなたお加減はどうですか？いつもよりいゝやうに見えますね。

リングストランド　はあ、段々よくなるやうに思ひます。來年になつて南

の方へでも行けましたら――

エリーダ　行らつしやる御計畫ですつてね、娘どもがさう言つてゐました。

リングストランド　えゝ、ベルゲンに私を保護して呉れる人がゐまして、來年は行かして呉れるといふ約束です。

エリーダ　どうしてその方とお知合におなんなすつたの？

リングストランド　それが實に不思議な緣でした。私は嘗て一度その人の船で航海をした事があるのです。

エリーダ　さう？ぢやその頃あなたは舟乘にならうとしていらつしやつたのですね？

リングストランド　いゝえ、少しも其のつもりぢやなかつたのです。けれども母が亡くなりましてから、父が私を家にぶら〳〵させて置くの

を好まないで、海へ出したのです。所が歸りの航海にイギリス海峽で難船して了ひました。それが私に取つて大事件だつたのです。

アルンホルム　といふと？

リングストランド　その難船のために、私は病氣を受けたのです――此の胸にです。人が來て救つて呉れるまで、隨分長いあひだ氷のやうな冷たい水の中にゐました。そんな事で私は海を廢めて了ひました――さうです、それが實際不思議な仕合せだつたのです。

アルンホルム　あゝ！さういふのですか？

リングストランド　えゝ、つまり病氣は言ふに足りません、それよりか、私はこれで自分の本心の希望から彫刻家になるやうになつたのです。考へて見て下さい――指先一つで自由自在に微妙な形を見はして來る、あの和かい粘土でモデルを取つて行くのです！

エリーダ　で、あなたは何をモデルになさるおつもり？人魚の雄と雌？
それとも、昔の海賊王ですか――？
リングストランド　いゝえ、そんなものぢやありません。やれるやうになつたら、すぐ、大作を一つやつて見やうと思ふのです――いはゆる群像をです。
エリーダ　さう。でその群像は何の像なの？
リングストランド　あゝ、それは私自身の經驗から得た或るものです。
アルンホルム　さう〳〵それをおやんなさい。
エリーダ　ですけど、どんなもの？
リングストランド　さうですね、私の考では、玆に或る船乘の妻君がゐましてね、若い女ですが、一種不思議な不安の狀態で横になつて、眠りかけてゐるのです。そして眠ると夢を見るのです。そこを誰れが見て

も、夢みてゐると分かるやうに作つて見せるつもりです。
アルンホルム　それ限りですか？
リングストランド　いゝえ。其のそばにもう一つ人物が――ありますが――たゞ一種の姿といつてもいゝでせうが、それは其の女の夫なのです、女は夫の留守中に不義をしてゐました。所が夫は航海中に溺死したのです。
アルンホルム　え、どういふのですつて――？
エリーダ　溺死しましたつて？
リングストランド　はあ、航海中に溺死したのです。所が不思議な事にはその夫が家へ歸つたのです。夜のことですが、歸つて來て妻の寢床の傍に立つて見つめてゐます。ちやうど今海から引き上げられたといふ風に濡鼠になつて雫が垂れてゐなくちやなりません。

エリーダ　（椅子により、後へそつて）何て不思議な思ひつきでせう！（眼を閉ぢて）あゝ、私あり〳〵と見える様ですわ！

アルンホルム　併しおよそ世の中に、君――君――！君は御自身の經驗から來たのだと仰しやつたね？

リングストランド　はあ――私の經驗からです、或る意味から、さう言つていゝのです。

アルンホルム　君は死んだ人が來るのを御覽なすつたか――？

リングストランド　いや、それを私が確實に見たといふのぢありません。無論外形的に見たといふのぢやありません。けれども、やつぱり――

エリーダ　（興奮してもだへて）その話をあなたが御存じの限り殘らず聞かせて下さい！私、すつかり知りたいのですよ。

アルンホルム　（微笑し乍ら）はゝあ、成程これはあなたの畑ですね――海の

不思議といふやうな事になると。

エリーダ　それで、どういふ譯なのです？、リングストランドさん？

リングストランド　さうですね、私たちがちやうど歸りの航海でハリファックスと言ふ港から其の帆船を出さうとすると、水夫長が病氣になつて病院に置いて行かなくちやならない事になりました。で、その代りに一人のアメリカ人を傭つたのです。すると此の新しい水夫長が――

エリーダ　アメリカ人の？

リングストランド　はあ――其の男が或る日船長から古新聞を一束借りて來て、毎日一心に見つゞけてゐました。ノルウェー語が習ひたいのだと言つてゐましたつけ。

エリーダ　さう、それから？

リングストランド　それから、ある晩の事でした、非常な暴れで水夫どもは殘らず甲板で働いてゐて――跡にはその水夫長と私だけしか居ませんでした。水夫長は脚を挫いて歩けないでゐたし、私は具合が惡くて床の中に寢てゐたのです。で、その男は例の通り寢椅子の中に座り込んで、古新聞を讀みつゞけてゐましたが――

エリーダ　はあ？はあ？

リングストランド　だしぬけに、鋭い叫び聲を揚げました。私は愕りしてその方を見ると、水夫長の顔はまるで白墨のやうに蒼白くなつてゐて、それからその新聞を揉みくちやにして、細かく細かくずだ〳〵に裂き出しました。もつともそれを靜かに實に靜にやつてゐました。

エリーダ　全く何も言はないで？

リングストランド　初めのうちは何も言ひませんでした。けれども、暫くすると獨語のやうに斯う言ひ出しました「おれの居ない間に、――他の男と――結婚した」

エリーダ（眼を瞑り、半ば獨語のやうに）そんな事を言ひましたか？

リングストランド　えゝ。そしてどうでせう――立派なノルウェー語でそれを言つたのです。語學の天才があるのですね、あの男には。

エリーダ　それからどうして？次はどうなつたのでせう？

リングストランド　それからが愈々不思議な事になるのです――生涯決して忘れられない事なのです。その男は――やつぱり極めて靜な調子で斯う言ひ足しました。「併しあの女は己の物だ、己の物にしなくちやならないんだ。己が溺死して暗い海からあの女を連れに歸つてもあの女は、必ず己について來なくちやならいのだ。」

エリーダ（水をコップに充たす、その手が震へてゐる。）あゝ――今日は暑苦しい

事――！

リングストランド　そしてその言ひかたが非常な決心を持つてゐて、屹度その通り實行する男だと思はれたのです。

エリーダ　それからあなた――その男がどうなつたか御存じ？

リングストランド　そりや無論、死んだのですよ、奥さん。

エリーダ（急いで）どうしてさうお考へなさるの？

リングストランド　それは、私達の船が海峽で難船しました時私は船長と他に五人許り一緒に大ボートで遁れたのですが、運轉士は小ボートに乗り込みました、そしてそのアメリカ人と今一人其の方へ一緒になりました。

エリーダ　其の後その方の樣子は分からないのですか？

リングストランド　はあ、一言の便りも聞かないのです。私の保護者の所

からつい先日さう言つて來ました。つまり是れが私の心を感動させて、群像彫刻を作らうと思ひ立たせた理由です。その船乘の不貞節な妻君が、私の眼の前に生々と浮んで來ます。またその男も、溺れ死んだに拘らず、復讐の爲に海から歸つて來るのが、あり〳〵と見えます。私には二人とも實にはつきりと見えるのです。

エリーダ　私にもそれが見える。（立ち上り）さあ――彼方へ這入りませう。それともワングルのゐる室へ行つた方がいゝか知ら！私、此處にゐると息がつまるやうでならないから。（四阿から出る。）

リングストランド（矢張り立ち上る。）私はもうお暇した方がいゝでせう。今日はたゞ御誕生日のお祝ひを申上げたいばかりに伺つたのですから。

エリーダ　あら、もう、いらつしやらなくちやならないのですか――（手を

さし伸べる。）左様なら、花を有り難う御座いました。

（リングストランド禮をして庭口から左方に去る。）

アルンホルム　（立ち上りエリーダに近寄り）今の事があなたには辛かつたやうですね、奥さん。

エリーダ　あゝ、ねえ、そりやさう仰しやつてもいゝでせうけれど――

アルンホルム　併しつまりは、あなたが覺悟してゐらしやらなくちやならなかつた事です。

エリーダ　（愕いて彼を見つめ）覺悟して？

アルンホルム　はあ、さうだらうと思ひます。

エリーダ　男が歸ると覺悟して――？そんな風にして歸るだらうと？

アルンホルム　下らない、どうして世の中に――！全體あの氣違じみた彫刻家のお話なんか――？

エリーダ　だつてアルンホルムさん、あの男は、あなたがおつしやる程氣違じみちやゐないでせうよ。

アルンホルム　あなたの心をそれ程痛めさせたのは、あの愚にもつかない死人の話ぢやないでせう？私は屹度――

エリーダ　屹度どう？

アルンホルム　言ふまでもなく、お話の方は、あなたに取つちや、たゞ假託で、本當は家庭のお祝ひがあなたに内證でせられるのを見て、辛いとお思ひなすつたのでせう？――御主人とお子供さんとが亡くなつた方を思つてゐられる、あなたは其の中から除けものにされてゐらつしやる。

エリーダ　まあ、とんだ事を。私そんな事は大して苦勞にもなりませんの、夫に對して私一人だけといふ權利はないのですから。

アルンホルム　いや、その權利をお持ちなさらなくちやいけないと思ひますね。

エリーダ　はあ、ですけど事實持つてゐないのですから。さうなつてるのですから。で、私も自分の生活を持つてゐて――他人はその中に入れません。

アルンホルム　あなた！（一層柔かく）それでは何ですか――あなたは――あなたは實際御主人を愛してゐらつしやらないと仰しやるのですか？

エリーダ　そんな事があるものですか――私はありつたけの眞心で夫を愛するやうになりました！　其のためですよ、こんなに恐ろしい――こんなに譯の分からない――何とも言へない事になつたのは――！

アルンホルム　あなた御遠慮は要りません、さう聞けば、奥さん、いよ〳〵あなたの苦しみを打明けて頂かなくちやなりません。聞かして下さい。奥さん。

エリーダ　だめですよ、あなた――兎に角、今はだめですよ。いつか其のうち。

（ボレッタ外廊から出て庭に降りて來る。）

ボレッタ　今お父さんが外科室からいらつしやいます。御一緒に庭向のお部屋へ行きませうか？

エリーダ　あゝ、さうしませう。

（衣服を更へたヴングルがヒルダと共に家の後方左から出て出る。）

ヴングル　さあ、これですつかりお相手が出來る！　何か冷たい飲みものがあるといゝな。

エリーダ　ちよつと待つてらつしやい。（四阿に戻つて花束を持つて來る。）

ヒルダ　あらまあ！綺麗な花だ事！何處から取つてらつしやつたの？

エリーダ　これはね、ヒルダや、彫刻家のリングストランドさんから戴いたの。

ヒルダ（ぎよつとして）リングストランドさんから？

ポレッタ（不案さうに）リングストランドさん此處へいらつしやいましたか――あれからまた？

エリーダ（半ば微笑し乍ら）あゝ。此の花束を持つてゐらつしつたのよ――誕生日のお祝にね。

ポレッタ（ヒルダを偷み見て）まあ――！

ヒルダ（つぶやくやうに）畜生！

ヴングル（當惑して心苦しさうにエリーダに向つて）ふむ――ねえ、お前――

エリーダや、お前に言つて置かなくちやならないが――

エリーダ（遮つて）さあお前たち、お出で！私の花を水に活けませう、他のも一緒にね。

（外廊の方へ上つて行く）

ポレッタ（ヒルダに柔かに）ねえ、御覽、あんなに優しいぢやないの。

ヒルダ（少し聲高に、怒りを帶んで）お茶番よ！たゞお父さんに取り入りたいからなのよ。

ヴングル（外廊の上で、エリーダの片手を固く握り。）有難う――有難う――！あんなにして呉れて私は實にうれしいよ、エリーダ！

エリーダ（花を揃へ乍ら）おゝ、つまらない事を――なんで私が御一緒に祝はないでいゝものですか――母さんの誕生日ですもの

アルンホルム　ふむ――！

（彼はヴングルとエリーダの方へ行く。ポレッタとヒルダトは庭の中に殘る。）

第二幕

町の背後、木立ある高臺の見晴の上、後の方に標柱と風信機が立つてゐる。腰掛に用ひる大きな石が幾つか標柱の圍り及前方に据えてある。遙か後の方に峽灣の沖によつた邊が、點在した島や突き出た岬などと共に見える。外洋は見えない。空の低い邊は夏の夜の蒼白い薄明りで一杯になつてゐる。上の方は遙か遠方の山の峰々からかけて橙色に染まつてゐる。四部合唱の聲がかすかに右手下方の傾斜地から聞こえる。町の若い男女、右手から一對づゝになつて上り來り、親しげに話し合ひ乍ら標柱の所を通り左手に去る。稍後れてバレステッド、一組の外人旅客の案内者となつて出て來る。婦人のショールや旅鞄などを背負つてゐる。

バレステッド（杖で上の方を指して）御覽なさい、マイネ、ヘルシャフテン（皆さん）――あそこに今一つ、アンデレ、バイト（ほかの高臺）があるでせう？

あれへもベシュタイゲン(登る)しませう、それからヘルウンテル(下の方)に――(英語であとを喋りつゞけて、旅客を右手へ導き去る)

(ヒルダ右手の傾斜地から急いで上つて來て立ち留まり後ろを振り返り見る。すぐ後からボレッタがその路を上つて來る。)

ボレッタ　ヒルダ、お前何もリングストランドさんを置き去りにして、駈け出さなくてもいゝぢやないの？

ヒルダ　だつて私、坂道をあんなにのろ〳〵とあるいちやゐられないのだもの――ほら――ほら、ね這つて上つて來るぢやないの？

ボレッタ　だつてお前、病氣なのぢやないか？

ヒルダ　重い病氣だと思つて？

ボレッタ　あゝ、屹度さうですよ。

ヒルダ　今日お午すぎにお父さんに診て貰つたのね。お父さんは何う思つてらしやるか知ら。

ボレッタ　お父さんの仰しやるにはね、あの人は肺病か――何かそんな病氣ですつて。迚も長くは持つまいと言つてゐてよ。

ヒルダ　さう言つて、お父さんが？そら御覽なさい、私が思つてゐた通り。

ボレッタ　けどねえ、決してあの人にそんな事を知らしちやいけないよ。

ヒルダ　そりや心得てゐてよ(低い調子で)ほら！――あの人がやつとの事で上つて來てよ。ハンスさん――！ねえ、あの人の顔を見るとハンスといふ名だらうとは思はない？

ボレッタ　(叱く)ふざけちやいけないよ！氣をおつけ！

(リングストランド右手から入り來る。蝙蝠傘を携へてゐる。)

リングストランド　どうも失禮しました。追付いて來られませんでした。

ヒルダ　おや、傘を持つてらつしやるのね？

リングストランド　こりやあなたのお母さんのですよ。これをステツキの代りにしてもいゝと仰しやつたのです、私が自分のを持つて來なかつたものですから。

ポレツタ　みんなまだ下にゐますか？お父さんや他の人たちも？

リングストランド　はあ。お父さんはちよつと料理店へいらつしやいましたが、他の連中は外で音樂を聞いてゐます。併し今に上つて來るといふおつ母さんのお話でした。

ヒルダ　（彼を見つめてゐたが）あなた大層勞れてらつしやるやうね？

リングストランド　はあ、少し勞れたかも知れません。ちよつと腰かけてゐた方がいゝやうです。（右手前方の石に腰を下す。）

ヒルダ　（彼の前に立つてゐて）今少したつと下の音樂堂の傍で舞踏があるでせう、あなた御存じ？

リングストランド　はあ、そんな事を聞きました。

ヒルダ　あなた屹度舞踏が大好きでせう？

ポレツタ　（叢の中で小さい花を摘んで歩いてゐたが）まあ、ヒルダ――リングストランドさんは息んでゐらつしやる方がいゝのですよ。

リングストランド　（ヒルダに）えゝ、ヒルダさん、私も舞踏は非常にやつて見たいのですがね――踊れさへすれば。

ヒルダ　おや、さう。お稽古なさらなかつたの？

リングストランド　はあ、稽古しませんでした。併し私の言つたのは其の意味ぢやなかつたのです。胸が苦しくて踏れないと言つたのです。

ヒルダ　あなたがおつしやつた、あのお怪我のせいで？

リングストランド　えゝ、其のためです。

ヒルダ　あなたは其の怪我のために一生不幸だとお思ひなすつて？

リングストランド　いゝえ、さうとは限りません。（微笑して）皆さんが斯うして親切にして下すつて、親しくたよりになつて頂くのも、みんなあのせいだと私は信じてゐます。

ヒルダ　さうねえ、で、その病氣は全く心配する程ぢやないのですか？

リングストランド　はあ、少しも心配する病氣ぢやありません。その點ではお父さんのお見たても、他の醫者と全然一致するやうです。

ヒルダ　そして外國へいらつしやれば、すぐ癒つて？

リングストランド　えゝ、癒りますとも。

ポレッタ　（手に花を持つて）御覽なさいな、リングストランドさん――これをあなたの釦穴にお挿しなさるといゝわ。

リングストランド　おゝ、お孃さん、どうも有難う！御親切は忘れません。

ヒルダ　（右手丘の下を見下して）あら、みんなあの道から上つて來てよ。

ポレッタ　（も見下して）あそこで曲ることを知つて居るのか知ら。いけない〳〵、違つた道へ行くよ。

リングストランド　（立ち上り）曲り角まで駈けおりて行つて、呼んでやりませう。

ヒルダ　ぢや、大きな聲で呼ばなくちや駄目よ。

ポレッタ　いけない、お止しなさいよ。また勞れる許りですもの。

リングストランド　なあに、降りるのは、譯はありませんよ。（右手へ出て行く。）

ヒルダ　えゝ、降りるのはね、（後を見送る。）あら、飛んで行くよ！又上つて來なきやならいのに、その方は忘れてゐるのよ。

ポレッタ　かはいさうに――

ヒルダ　若しリングストランドが姉さんに結婚を申込んだら、承知して？

ポレッタ　お前、どうかしてゐるのよ。

ヒルダ　それはね無論あの病氣がないとしてさ――あんなに死にかかつてゐるのでなかつたらさ。あなた承知して？

ポレッタ　お前さんの方が好い事よ。

ヒルダ　いやな事だ、それこそ大變よ。あの人はね一文無しで自分さへもかつ〳〵なのよ。

ポレッタ　ぢやどうしてお前、さうあの人の事ばかり氣にしてゐるの？

ヒルダ　あら、それはね、あの人の「病氣」が氣になるのよ。

ポレッタ　だつて、お前は、少しも氣の毒がつてる樣子なんかないぢやないの？

ヒルダ　氣の毒とは思はないわ。けれど、私、なんだか斯う、面白くて釣り込まれるやうよ――

ポレッタ　何がさ？

ヒルダ　彼の人を見てゐると、そして、あの人に、心配する程ぢやない〳〵つて言はせてやると、そして、外國へ行つて美術家になる〳〵と言はせてやると。あの人はすつかりそれを自信してゐて、そりやもう喜んでゐるのだもの。で、つまりはそれがみんな當がはづれて、何も出て來やしない。それまで生きちや居られなくなつて了ふ。さう思ふと私ほんとうに痛快だわ。

ポレッタ　痛快だつて！

ヒルダ　えゝ。痛快よ――私、さう言つてよ。

ポレッタ　およし、ヒルダ、お前ほんとうに、驚いた子だね！

ヒルダ　えゝ、私さうなるつもりよ――馬鹿らしい（見下して）あゝ、やつて來た！アルンホルムさんは登り道が嫌ひのやうだわ。（向き返つて）

あ、だけどね、――私、お晝飯の時アルンホルムさんに就いて發見した事があるのよ、何んだか分つて？

ボレッタ　なあに？

ヒルダ　あのね――あの人の頭が段々禿げはじめたのよ――ちようど頂邊のところ。

ボレッタ　まあ、嘘ばつかし！決してそんな事はなくつてよ。

ヒルダ　いゝえ、さうよ。そうしてね、ここのところに、兩方の眼の緣に皺があつてよ。一體まあ、姉さんは、自分の家庭教師だつた人がどうしてそんなに好きになつたの？

ボレッタ（笑い乍ら）ねえ、分らないでせう？私ね、一度あの人に、ボレッタといふ名はいやな名だと言はれてひどく泣いた事があつたつけ。

ヒルダ　そらね！（又見下して）ほら、あそこを御覽なさいよ！――あそこに「海の夫人」がアルンホルムさんと一緒にあるいてゐてよ――お父さんとでなく、あの人と、べちやくゝ、お喋りをしながら。私、あの二人は、少し怪しいのぢやないかと思ふわ。

ボレッタ　お前ほんとうに恥知らずですよ。どうしておつ母さんの事を、そんなにはしたなく言ふのですよ。折角うまく行きかけてゐたのに――

ヒルダ　さうでせうとも！――さう思つてゐらつしやいよ、お嬢さん！ほんとうはね、到底私たちとあれとは、うまく行きつこなし。向ふは私たちと氣が合はないし、私たちは向ふと氣が合はないんだもの。どうしてまあ、お父さんはあんな人を家へ引つぱり込む氣になつたのでせう！――あの人だつて、こんな事をしてゐて、今に氣違にでもなるのが落ちよ、結構だわ。

ボレッタ　氣違だつて？どうしてお前そんな事を考へて？

ヒルダ　別に不思議も何もないわ。あの人のおつ母さんも氣が違つたぢやないの？氣が違つて死んだのですつて。

ボレッタ　まあ、お前は何にでも啄を突つこむ人ねえ。もう〳〵そんな事は言ひつこなし。おとなしくおし――お父さんのためだから。ね、ヒルダ？

（ヴングル、エリーダ、アルンホルム及リングストランド右方から上り來る。）

エリーダ　（後の方を指して）あの邊に當りますよ。

アルンホルム　あゝそうです〳〵。あの方角でなくちやなりません。

エリーダ　彼處がずつと海なのですよ。

ボレッタ　（アルンホルムに）此處は見晴しがいいでせう？

アルンホルム　むしろ雄大ですね――素晴しい景色です！

ヴングル　君はまだ一度もここへはお上んなさらなかつたか？

アルンホルム　いえ、まだ一度も。私のゐた頃には、まだ來られる場所でなかつたやうです。こんな路もなかつたのですから。

ヴングル　地形なんぞも、少しもついてゐなかつたしね。それが出來たのはつい四五年の事ですよ。

ボレッタ　あの上の水先案内の丘だと、景色がもつと雄大ですわ。

ヴングル　彼處へ行かうかね、エリーダ？

エリーダ　（右手の石に腰をかけて。）ありがたう、私やめますわ。あなたがた行つていらつしやい。其のあひだ私はここで息んでゐますから。

ヴングル　さうか、では、私はお前とここで息んでゐやう。お前たちアルンホルムさんのお供をするがいゝ。

ボレッタ　私たちと御一緒にいらつしやいな、アルンホルムさん？

アルンホルム　はあ、ありがたう。そこへ行くにも路がついてゐますか？

ポレッタ　えゝ〳〵、廣い、いゝ路ですよ。

ヒルダ　二人並んで手を繋いで歩いても十分よ。

アルンホルム（冗談のやうに）ほんとうにさうですか、ヒルダさん！（ポレッタに）どうです二人でためして見やうぢやありませんか？

ポレッタ（笑を抑へて）えゝ、どうぞ。さあ。（二人腕を組み合つて左方に出て行く）

ヒルダ（リングストランドに）私達も行きませうか――？

リングストランド　手を繋いで――？

ヒルダ　いゝぢやないの？私平氣ですわ――。

リングストランド（腕を貸し、嬉しさうに笑つて）こりやおもしろいですね。

ヒルダ　おもしろい――？

リングストランド　でも、ちようど私たちが結婚約束をしてゐるやうぢやありませんか？

ヒルダ　あなた屹度まだ婦人に腕を貸して散歩したことがないのね。

リングストランドさん。（二人は左方に出て行く。）

ヴングル（後方標柱の傍に立つてゐて）エリーダや、これで少しの間、やつと二人だけになつたね――

エリーダ　えゝ、此處へいらつしやい、此處へおかけなさいな。

ヴングル（腰を下して）此處はからつとしてゐて實に靜かだね。ここで少し話したい事がある。

エリーダ　どんな事！

ヴンゲル　お前の事さ、それから私たちお互の關係に就いてもね。こんな樣子で長く續くものでない事は、私によく分つてゐるよ。

エリーダ　ぢやその代りにどうなさらうと仰しやるの？

ヴンゲル　何處までも信じ合はなくちや、お前。一心同體にならなくちや――もとさうだつたやうにさ。

エリーダ　あゝ、さう出來さへすればねえ！けど、とても〳〵出來ない事ですわ！

ヴンゲル　お前のその心持は分かつてゐる積りだ。時々のお前の素振りから、私にはそれが分かると思ふ。

エリーダ（激しく）いえ、あなたには分りません！分つてゐるとは言はせません――！

ヴンゲル　分かつてゐるよ。お前は眞直な性分だ。眞實な情合を持つ

てゐる。

エリーダ　はあ、持つてゐます。

ヴンゲル　お前が安全だと思ひ、幸福だと思ふことの出來るのは、いつでも完全無缺な場合でなくちやいけないのだ。

エリーダ（不安さうに見つめて）さう――だから？

ヴンゲル　お前は人の後妻なんかには適しない。

エリーダ　今になつてどうしてそんな事を思ひついて？

ヴンゲル　たび〳〵さういふ疑ひは起こつたのだが、今日明かにそれを認めた。子供等の今日の紀念祭に――お前は、私も一種の仲間だと見たやうだが――そりや勿論人の記憶といふものは拭ひ消すことの出來ないものだ。――とにかく私にはそれは出來ない、私の性分がそれを許さない。

エリーダ　それは知つてゐます。えゝ、よく解つてゐます。

ヴングル　然し、矢張り、お前は思ひ違ひをしてゐる。お前は何だかまだ彼等の母が生きてでもゐるやうに思つて、我々の中へ、目に見えない姿を現してゐるやうに感じてゐる。私の心がお前とあれとの間に二分せられてゐると思つてゐる。其の考がお前の胸を掻き亂すのだ。お前には、私とお前の仲が、何か不德義なものでもあるやうに見えて、そのため、私と一緒に、私の妻としてやつて行くことが出來ないのだ、さうする氣が起らないのだ。

エリーダ（立ち上る）あなた、それをすつかり御覽なすつて？すつかり見とほして御覽なすつて？

ヴングル　然、今日私はとほ〳〵それを見とほした——底の底まで見とほした。

エリーダ　底まで見とほしたのですつて？おゝ、どうして、あなたにそんな事が言へませう。

ヴングル（立ち上り）そりや、その上にまだ譯のあることも、私はよく知つてゐるよ、エリーダ。

エリーダ（氣がゝりのやうに）まだ他に譯のあることを御存じ？

ヴングル　然、其の譯といふのはね、お前にはこの邊の周圍が我慢しきれない。山が多くてそれがお前を壓迫して精神を滅いらせて了ふし、光線もお前には充分でないし——眼界も至つて狹いし——空氣も強くないからお前に取つては刺戟が足りない。

エリーダ　其の點は全くさうですよ。冬だつて夏だつて、夜晝なし私につきまとつて離れないのは——海です、海の戀しい病氣です。

ヴングル　エリーダ、それはよく知つてゐるよ（エリーダの頭に手をあてゝ）だ

から可哀さうな病人はまた自分の郷へ歸らなくちやならない。

エリーダ　それはどういふ事？

ヴングル　言葉通りさ。引き移つて行かうよ。

エリーダ　移るのですつて！

ヴングル　さうさ。何處か外海に臨んだ所で――お前の氣に入つて眞個の家だと思へるやうな場所へ。

エリーダ　まあ、あなた、そんな風にお考へなすつちやいけないのよ！そんな事は到底出來るものぢやありません。あなたには、ここよりほかに幸福に住める所は、世界中にないぢやありませんか？

ヴングル　そんな事はどうにでもなるさ、その上――お前がゐないとしたら――此處で私が幸福に暮して行けると思ふかい？

エリーダ　だつて私ここにゐるぢやありませんか。斯うしてゐるぢや

ありませんか？あなたの妻ですもの。

ヴングル　ほんとうに私の妻だらうか、エリーダ？

エリーダ　あゝ、もう、その事は言はないで頂戴。あなたは此處にゐらつしやれば、生活して息をついで行くものが揃つて居ます。あなたの生涯の仕事がみんなここにあるのですから。

ヴングル　そんなことはどうでもいゝと言つてるぢやないか。此の土地を引拂はうさ――何所か外海に近い所へ移らうよ、ね、私はもう決心をしたよ。

エリーダ　ですけど、そんな事をして、どんな益があるとお思ひなすつて？

ヴングル　お前の健康と心の平和がとりかへせるだらうさ。

エリーダ　私それを疑ひますわ。で、あなた御自身は！あなたの自身の

事もお考へなさらなくちや。あなたはそれで何んな利益があるでせう？

ヴングル　私はそれでお前を取りかへす事が出來るよ、エリーダ。

エリーダ　けれど、それが出來ないのですよ！だめなの、だめなの、それが出來ないのです！そこが、考へてもぞつとするほど辛い苦しい羽目なのです。

ヴングル　それはやつて見なけりや分らない。とにかくお前がここにゐてそんな考に取つ付かれるといふのなら、こゝからお前を連れて退くに越した事はない。それも早いほどいゝのだ。私はもう固く決心したよ。

エリーダ　いけない！それよりか――あゝ、どうしやう――私、何もかも包まず言つて了ひますわ、ありのまゝに。

ヴングル　あゝ、あゝ、――さうして呉れ！

エリーダ　私のためにあなたが不幸な思ひをなさらないやうにね、どうせさうしたつて、何の役にも立たないのですから。

ヴングル　お前は何もかも話すと約束したぢやないか――ありのままに。

エリーダ　話しますよ、私に分つてゐて、私に話せるだけは――さあ此處へいらつして、私の傍へかけて下さい。

（二人石の上に腰かける。）

ヴングル　それで、エリーダ？それで――？

エリーダ　あなたはね、あの日彼處へいらつしつて。私に、妻になつて呉れないかとお聞きなすつた時――何も隠さないで、あけすけに初めの結婚の事をお話しなすつたのね。大層仕合せだつたとおつしや

つたのね？

ヴングル　そりや、さうだつた。

エリーダ　さうでせうとも、私にもそれはよく信じられます。けれどそれを今言はうと思つたのぢやありません。たゞそれと一緒に、私も自分の身の上を打ち明けて置いたからそれを思ひ出して貰はうと思つたのです。私は生涯に一度、他の或る人を思つた事があると、その時包まず言つて置きました。それも殆ど――一種の結婚約束をするまでになつてゐました。

ヴングル　一種の――？

エリーダ　えゝ、結婚約束のやうな事を。でもそれはほんの少しの間で、その男は行つて了ひましたの、それからしばらく立つて、私は約束を取り消しました。此の事はもうみんなお話ししましたね。

第二幕　エリーダとヴングル

第二幕　エリーダとヴンゲル

つたのね？

ヴンゲル　そりや、さうだつた。

エリーダ　さうでせうとも、私にもそれはよく信じられます。けれどそれを今言はうと思つたのぢやありません。たゞそれと一緒に、私も自分の身の上を打ち明けて置いたからそれを思ひ出して貰はうと思つたのです。私は生涯に一度他の或る人を思つた事があると、その時包まず言つて置きました。それも殆ど――一種の結婚約束をするまでになつてゐました。

ヴンゲル　一種の――？

エリーダ　えゝ、結婚約束のやうな事を。でもそれはほんの少しの間で、その男は行つて了ひましたの、それからしばらく立つて、私は約束を取り消しました。此の事はもうみんなお話ししましたね。

ヴングル　だから、エリーダや、どうしてそんな事を繰りかへすのだ？　そんな事は要するに私に關係がないぢやないか？　私はその男が誰だつたかさへ問うた事はないよ。

エリーダ　えゝ、さうでした。ほんとうにあなたは私のためにいつも氣を遣つてゐらつしやるのね。

ヴングル（微笑して）　いや、此の場合、其の人の名は聞くまでもなかつたのさ。

エリーダ　其の人の名を？

ヴングル　ショルドウィックからあの邊に、さう澤山これはといふ人はゐなかつた。といふよりも、一そたゞ一人しか居なかつたと言つていゝくらゐだ――

エリーダ　それでは屹度――アルンホルムさんだと仰しやるのでせう

ヴンゲル　さうだ――ぢやないのか？

エリーダ　違ひます。

ヴンゲル　さうぢやないのか？それぢや、どうも私には見當が付かない。

エリーダ　あなたは、何年か前に、秋の末ごろ、大きなアメリカ船が一艘、ショルドウィックへ修繕のため這入つて來たのをおぼへて居らしつて？

ヴンゲル　あゝ、よくおぼへてる。朝起きて見ると船長が室の中で殺されてゐたのは、あの船だつた。私が檢視に行つた事をおぼへてゐる。

エリーダ　えゝ、さう、でした。

ヴンゲル　殺した犯人は、二等運轉士だつたね。

エリーダ　それは誰にも分かつちやゐません。證據は到頭上りません

でした。

ヴンゲル　でも、全くそれに疑ひないよ。でなくて何うしてその男が逃げたり、自分で溺死したりするものかね。

エリーダ　その男は溺死したのぢやありません。北行きの船に乘り込んで逃げたのですよ。

ヴンゲル（愕く）どうしてお前それを知つてゐるか？

エリーダ（一生懸命で）それはね、あなた――それはね、その二等運轉士なのですもの、私が――結婚約束をしたのは。

ヴンゲル（愕いて立ち上り乍ら）何うしたと？そんな事があり得やうか？

エリーダ　たしかに――その男とですよ。

ヴンゲル　けれども、お前、どうしてまあ――！一體どうしてそんな事が出來たのだ！自分から求めてそんな男と結婚約束をするなんて！まるつきり知らないものと！――その男の名は何と言つたのだ？

エリーダ　その頃は自分でフリーマンと言つてゐましたが、後に手紙を

寄越した時は、アルフレッド、ジョンストンと書いてありました。

ヴングル　それで一體何處から來たのか？

エリーダ　フヰンマルクからだと言つてゐました。もつとも生れはフヰンランドの方で、小供のとき、なんでも父親に連れられて、國を出たのですつて。

ヴングル　それでは、クヱーン人なのだ。

エリーダ　えゝ、さう言ふのですつて。

ヴングル　其のほかに、まだ何かその男の事を知つてゐるか？

エリーダ　唯ね、ごく若い時から船に乘つて、幾度も長い航海をしたといふ事だけです。

ヴングル　その外には何にも？

エリーダ　えゝ、何にも。そんな話はまるでしなかつたのですから。

ヴングル　ではどんな事を話してゐたのかい？

エリーダ　重に海の事を。

ヴングル　ふむ――！海の事を？

エリーダ　海に暴風が來たり風いだり、暗い夜半の海だの、ぎら〳〵日光を照り返してゐる海だの、いろんな事を話しました。けれど一番よく聞いたのは、鯨や海豚や、日中に暗礁の上で日向ぼつこをしてゐる海豹の話でした。それから又鷗や鷲や、其の外の海鳥の話もしました。するとー――不思議ぢやありませんか？――そんな話につれていつか其の海の獸や鳥がみんなその男と血のつゞいたものゝやうに思はれて來ますの。

ヴングル　でお前自身は――？

エリーダ　えゝ、私だつて、よつぽどさう思ひました、あれらと何所か命が

通つてるやうに。

ヴングル　さうだらう、さうだらう――それでお前がその男と約束をするやうになつたのだね？

エリーダ　えゝ、その男が、さうしなくちやならないと言ひました。

ヴングル　しなくちやならない？　お前は自分の意志といふものを持たなかつたのか？

エリーダ　その男が傍にゐるとさうでした。――後になつて見ると、まるつきり自分にも譯が分からなかつたのですよ。

ヴングル　その男には度々逢つたかい？

エリーダ　いゝえ、さうたび〳〵ぢやありません。或日その男が燈臺を見に來たとき始めて逢つたのです。それから折々逢つてゐましたが、其のうちにあの船長の事件が起こつて、そこを去らなきやならな

いやうになりました。

ヴングル　あゝさうか、その話をして呉れ？

エリーダ　朝早くまだ薄暗い時刻でしたが、その男から私へ短い手紙が來たのですよ。それによると、私はプラットハムメルにゐる其の男に逢ひに行かなくちやならない。――そら、御存じでせう？　ショルドヴィックの間の岬を。

ヴングル　あゝ〳〵――よく知つてゐる。

エリーダ　何か話したい事があるから、私にそこまですぐ來なくちやならないと書いてゐました。

ヴングル　で、お前行つたのか？

エリーダ　えゝ、仕方がなかつたのですよ。でね――その男は昨夜自分が船長を刺し殺したといふ話をしました。

ヴングル　その男が自分でお前に！有りの儘を話して！

エリーダ　はあ。ですけどそれはたゞ正當な事をしたに過ぎないとその男は言つてゐました。

ヴングル　正當な事？ではどんな理由で刺し殺したと言つたか？

エリーダ　理由は話したくないやうでした。私の聞くべき事ぢやないと言つてゐましたつけ。

ヴングル　それをお前は言葉だけで信用したのかい？

エリーダ　はあ、私は初めからその男を疑ふ氣なんか起こりませんでした。で、まあ、とにかくその男は立ち退くことになつて、私に暇乞をしやうとした、其の間際に――ねえ、その男が何をしたとお思ひなすつて？

ヴングル　ふむ、言つて御覽。

エリーダ　隱しから鍵輪を取り出して、いつも自分の指に箍めてゐた指輪と私が持つてゐた小さい指輪とを取つて、二つ一緒に、その鍵輪に通したのです。そしてその男の言ふには、私達二人、海と結婚をしなくちやならない。

ヴングル　結婚――？

エリーダ　えゝ、さう言ひました。それからその大きな輪と小さい二つの指輪を、出來るだけ遠い沖の方へ投げ込みました。

ヴングル　そしてエリーダ、お前は？お前は？それを承知したのか？

エリーダ　えゝ、嘘のやうな話ですがその時は私、さうしなくちやならないのだと思ひました。――けど、仕合せと、それ限りその男は行つて了ひました！

ヴングル　でその男が行つて了ふと？

エリーダ　そりやもう、言ふまでもなく、私はすぐ正氣に返つて、すべてが馬鹿々々しい、意味のない事だと氣づきました。

ヴングル　併しお前は手紙の事も何か言つてゐたが、その後便りがあつたのか？

エリーダ　はあ、便りはありました。始め、アーチャンジェルから來た短い手紙にはたゞアメリカへ渡るといふ事しか書いてなくて、返事を送る宛がしるしてありました。

ヴングル　返事をやつたか？

エリーダ　直にやりました。無論、二人の間はあれ限り斷えた事にしなくちやならないと書いてね――私は決してもう其の男を思はないから、向ふも二度と私の事を思つちやならないつて。

ヴングル　それでもやつぱり手紙を寄越したのか？

エリーダ　えゝ、また寄越しました。

ヴングル　で、お前の言つてやつた事に、どういふ返事をして來たか？

エリーダ　一言も言つて來ないの。關係を斷つなんて話は、まるでなかつたやうな書きぶりで、私に待つて居なくちやならないと、極おとなしく言つてよこしました。用意が出來たら知らせるから、すぐその男の方へ來るやうにといふのです。

ヴングル　お前を手ばなすまいとするのだね？

エリーダ　えゝ、ですから私また手紙を出しました、殆ど一句々々、前と同じことを書いて、たゞもつと強い言葉で。

ヴングル　それで先方も我を折つたのか？

エリーダ　いゝえ、我を折る段ぢやありません。前と同じやうに穏やかな手紙をよこして關係を斷つなんて文句は、まるで氣がつかないや

うでした。ですから、私、もう無駄だと思つて、それつきり手紙もやらない事にしました。

ヴングル　向ふからもそれつきりか？

エリーダ　いゝえ、向ふからは其の後三通來ました。一度はカリフォルニアから、一度は支那から、その次には最後に濠州からよこして、金山へ行くのだと言つてゐましたが、それきり何のたよりもありませんの。

ヴングル　其の男はお前に對して、一種不思議な力を持つてゐたのだね、エリーダ。

エリーダ　えゝ、さうです。あの怖ろしい男！

ヴングル　併しお前、もうその事は考へちやいけない。決して考へちやならない！それを私に誓つて呉れ、ねえ、エリーダや！そこで今度はお前に別な療治をして見やう――こんな峽灣の奥の空氣よりも、もつと新鮮な空氣で、鹽分に富んだ軟かい海風で、ね！どうお思ひか？

エリーダ　あゝ、それを言はないで下さい！そんな事をお考へなすつちやいけません！少しも私のためにはならないのですから！他へ移つたからと言つて、やつぱり打つちやられるものでない事は、分かつてゐます、私さう感じるのですよ。

ヴングル　打つちやるつて、お前――何をさ？

エリーダ　その男の怖いのをですよ。あの底の知れない不思議な力が私の魂に被さつて――

ヴングル　だけどお前もうそれは打つちやつたぢやないか！ずつと以前、お前が其の男と縁を絶つた時に。今ぢやもう久しい前に濟んだ事だ。

エリーダ。（起ち上り）いゝえ、要點はそこですよ。まだ濟んぢやゐないの

です！

ヴングル　濟んでゐない！

エリーダ　はあ、あなた――濟んでゐないのです！そして恐らく、いつまでたつても、濟みはしないでせう。此の世にゐる限りは濟まないでせう。

ヴングル　（息づまりのしたやうな聲で）それではお前、どうしても心の底からその不思議な男を忘れる事が出來ないと言ふのか？

エリーダ　一度は忘れてゐましたが、だしぬけにまた戻つて來たやうに思はれます。

ヴングル　いつ頃からか？

エリーダ　もう三年くらゐか、も少しになりませう――ちやうど――あの子の生まれる前でした。

ヴングル　あゝ、あの時か？それでは、エリーダや――私にも事情が分かりかけて來たよ。

エリーダ　あなたそれは間違ひですよ！私の上へ被さつてゐる此の――あゝ、何と言ひませう、とても〳〵人に分かるものぢやありません。

ヴングル　（見つめて心苦しげに）此の三年間、ずつとお前の心が他の男の方へ行つてゐたと思ふと。他の男の方へ！私でなく――他の男の方へ！

エリーダ　あゝ、あなたはまるで私を誤解してゐらつしやるのねえ。私はあなたよりほか、誰をも愛しちやゐません。

ヴングル　（低い調子で）それなら、なぜ、その間お前は私の妻として一緒に生活することを拒んだのだらう？

エリーダ　それは、あの不思議な男が私に怖かつたからですよ。

ヴングル　怖かつたから――？

エリーダ　えゝ、怖かつたからです。その怖さと言つたら、ちやうど海から染み込んで來るとしか思へないやうな物凄さです。それはこれからお話ししますから――（町の若い人々左手から戻り來り禮をして右方に出て行く。それらと共にアルンホルム、ボレッタ、ヒルダ及リングストランドが出る。）

ボレッタ（通りかけに）おや！未だ此處にいらつしやるの？

エリーダ　あゝ、高臺の上はほんとうに涼しくていゝ氣持ですよ。

アルンホルム　私達の方は、これから降りて踊りに行かうといふのです。

ヴングル　それがいゝ。私達もすぐ降りて行きますよ。

ヒルダ　ぢや後ほど。

エリーダ　リングストランドさん――あなた一寸待つてゝ下さいな。

（リングストランド立ち留まる。アルンホルム、ボレッタ及びヒルダ右手に出て行く。）

エリーダ（リングストランドに）あなたも舞踏にいらつしやるの？

リングストランド　いゝえ、奥さん、私は行くまいと思ひます。

エリーダ　さうですよ、あなたは氣をお注けなさらなきや。その胸の御病氣がね――まだ十分よくなつていらつしやらないのだから。

リングストランド　はあ、十分治つて居ません。

エリーダ（稍ためらふやうに。）あなたがお話の航海をなすつてから、何のくらゐになりますか――？

リングストランド　私が病氣を受けてからですか？

エリーダ　はあ、今朝お話しなすつた、あの航海ですよ。

リングストランド　あゝ、さうですか、それはちやうど――待つて御覽なさ

いよ――さうです、きつちり三年になる筈です。

エリーダ　三年？

リングストランド　或はも少し前かも知れません。アメリカを出帆したのが二月で、難船したのが三月でした。彼岸の疾風に出くわしたのです。

（エリーダ（ヴングルを見て）ね、ちやうど其の時ですよ。

ヴングル　けれども、お前――？

エリーダ　ぢや、リングストランドさん、お邪魔をしてはいけないから、いらして下さいな、けれど、踊ることはお止しなさいよ。

リングストランド　はあ、たゞ見てゐませう。（右手に去る。）

ヴングル　エリーダや――何故お前その航海の事を、證人調べでもするやうに聞いたのかい？

エリーダ　ジョンストンがその船にゐたのですよ。それは私、堅く保證して見せます。

ヴングル　どうしてそんな事が考へられるか？

エリーダ（それには答へずに）あの男がその船にゐて、留守中に私が他の男と結婚したことを聞いたのです。そして其の途端に、私がこんなになつたのです！

ヴングル　怖いのがか？

エリーダ　えゝ。隙さへあれば、だしぬけにあの男の姿が見えて來るのです。すつくりと私の前に立つて、幾らか片方へ寄つてゐます。決して私を見つめないで、たゞそこに立つてゐるのですよ。

ヴングル　どんな風で現はれるのだ？

エリーダ　最後に逢つた時のまゝで。

ヴングル　十年前に？

エリーダ　えゝ、ブラットハムメルでね。そして私にはあの男の襟飾のピンが、一番はつきり見えます、大きな青味がゝつた眞珠が一つ嵌めてあつて、それが死んだ魚の眼玉のやうにぎよろ〳〵として私を睨んでゐるやうです。

ヴングル　あゝ――！お前の病氣は、想つたよりも惡い、お前が氣づいてゐるよりも惡いのだよ、エリーダ。

エリーダ　さうです、さうです――何卒私を救つて下さい！段々それに締めつけられるやうな氣がします。

ヴングル　それでお前は、まる三年といふもの、こんな有樣でゐたのだね！こんな秘密な心配を打ち明けもしないで！

エリーダ　それは打明けられなかつたからですよ。今あなたの爲に必

要になつて打ち明けたのですけれど、それまでは打明けられなかつたのですよ。若し殘らず言つて了ふとなれば、やつぱりあの――口で言へない事も――

ヴングル　口で言へない事――？

エリーダ　（避けるやうに。）いえ、いえ、聞かないで下さい！たゞもう一つ、それでお了ひです――あなた、どうしたらあの不思議が解けるでせう？――あの、子供の眼の――？

ヴングル　これ、エリーダや、それは全然お前の空想といふものだ、あの子の眼も、普通の子供の眼と少しも違つちやゐなかつた。

エリーダ　いゝえ、さうぢやなかつたの！それが見えない筈はないぢやありませんか？あの子の眼は、海と一緒に色が變りました。入江に日がさして靜かな時だと、眼も靜かで明るいし、暴れの日だと眼もそ

の通りに變る。あゝ、私、よくそれを見て置きました。あなたは御覽なさらなくとも。

ヴングル（慰め乍ら）ふむ――さうかも知れない。が、さうだつたとしても？それがどうと言ふのか？

エリーダ（柔かく、彼に近づいて）私はね、それと同じ眼を、前にも見ました。

ヴングル　何時？何處でさ――？

エリーダ　ブラットハムメルで。十年前に。

ヴングル（一歩退いて）何うしたと――！

エリーダ（震へ乍ら呟く。）あの子はあの不思議な男の眼を貫つたのですよ。

ヴングル（思はず叫ぶ）エリーダ――！

エリーダ（絶望して兩手を頭の上で握りしめ）それであなたも分かつたでせう？私がどうあつても、あなたの妻として一緒に生活することの出來ない譯を、さうしない譯を！

（エリーダは急に振り返り一散に丘を右手に駈け下る。）

ヴングル（後を追ひかけ呼ぶ）エリーダ！エリーダ！エリーダ！可哀さうに！

第三幕

醫師ヴングルの庭の片隅。その邊りは濕氣多く、土が濡れてゐて大きな老木が茂つてゐる。右方に水の澱んだ池の端が見える。後ろに低いまばらな垣があつて路及峽灣と庭とを仕切つてゐる。遙か遠方、峽灣の彼方には山脈が見えて幾つかの峰を峙てゝゐる。午後遲く殆ど夕暮。

ボレッタ左手の石の上に腰かけて縫物をしてゐる。腰掛の上に二三册の書物と仕事籠が置いてある。ヒルダとリングストランドは二人とも釣道具を持ち、池の端に立つてゐる。

ヒルダ（リングストランドに合圖をする。）ぢつとしてゐらつしやいよ！彼處に大きいのが一尾見えたから。

リングストランド（見廻し乍ら）何處にです？

ヒルダ（指して）見えなくつて——そら、あそこ。ほらまた！そこにも見

つかつたり！（木立の間を透し見て）うゝ——向ふへあの人がやつて來たおかげで、みんな逃げちやつた！

ボレッタ（見上げて）誰れが來るの？

ヒルダ あなたの先生よ、お嬢さま！

ボレッタ 私の——？

ヒルダ はい。仕合せと私の先生にはならなかつたのですよ。

（アルンホルム右手木立の中から出て來る。）

アルンホルム どうです、その池に魚がゐますか？

ヒルダ はあ、非常に年を取つた鯉がゐます。

アルンホルム へえ、そんなに年を取つた鯉がまだ生きてゐるのですか？

ヒルダ えゝ、中々丈夫よ。然し今に幾つか片づけてやつてよ。

アルンホルム　却つて入江の方がよくはありませんか？
リングストランド　いゝえ、池がいゝですね――池の方がいはゆる神秘的な分子に富んでゐます。
ヒルダ　さうよ、こゝの方が一層痛快ですわ。――あなた浴びてゐらした所？
アルンホルム　たしかに。浴舎から眞直にこちらへ來たのです。
ヒルダ　あなたは圍の中だけでせう？
アルンホルム　はあ、私はあんまり泳げませんから。
ヒルダ　あなた仰向いて泳げて？
アルンホルム　いゝや。
ヒルダ　私泳げてよ（リングストランドに）向ふ側へ行きませう。
（二人は右手の方へ池の縁に沿うて出る。）

アルンホルム（ボレッタに近寄り）あなたお一人？ボレッタさん。
ボレッタ　えゝ、私大抵一人ですわ。
アルンホルム　お母さんはお庭ぢやありませんか？
ボレッタ　いゝえ、父と一緒に散歩してるだらうと思ひます。
アルンホルム　今日お午から何んな御様子でした？
ボレッタ　よく存じませんの。聞くことを忘れちやつて。
アルンホルム　そこにあるのはどんな本です？
ボレッタ　え、一つは植物の本で、一つは地理ですわ。
アルンホルム　あなたさういふ種類の書物を讀むのがお好き？
ボレッタ　えゝ、閑暇のありますときは――。ですけど家庭の世話の方が第一ですから。
アルンホルム　併しおつ母さんが――今のおつ母さんが――其の方は

助けて下さるでせう？

ボレッタ　いゝえ、私の役目なの。私ね、お父さんが一人でいらしたあひだ二年間其の世話をしたのですよ、で、それからずつと引き續いてやつてゐます。

アルンホルム　でもあなたは、前と同じやうに讀書がお好きなのですね？

ボレッタ　はゐ、有益な書物は手にはいるだけみんなみますの。幾らでも世間の事が知れると、ほんとにうれしうございますわ。私たちは、まるきりかけ離れた生活をしてゐるのですもの――殆どまるつきり。

アルンホルム　なんです、ボレッタさん、そんな事を言つちやいけない。

ボレッタ　けど、私、さう言ひますわ。私達の生活と、あの池の鯉の生活と大した違ひはないのですもの。直傍に入江があつて、そこでは大きな自由な魚の群が、出たり這入つたりしてゐても、かはいさうな手飼の鯉どもは、そんな事は少しも知らないで、一生それに交ることも出來ない。

アルンホルム　入江に出て行つたとしても、鯉どもにそれが適するかどうかは分かりませんね。

ボレッタ　そんな事はさう構つたものぢやないと思ひますわ。

アルンホルム　それに、あなたは、こゝで、さう全然世間とかけ離れてると も言へませんよ。少なくとも夏なぞはね。今日では、此の邊が世間の生活に取つて一種の地方的中心です――通りがゝりの澤山の流れが集まるところなのです。

ボレッタ（笑ひながら）あゝ、あなた御自身が通りがゝりの流れに這入つてゐらつしやるのね。あなたがたには、そんないゝ加減な冗談をお

つしやるのも、何でもありますまいよ。

アルンホルム　私がいゝ加減な冗談を――？何うしてそんな事を思ひます？

ボレッタ　だつて、やれ世間の生活の中心だの集まりだのつて、それはみんなこの町の人たちが言つてるのをお聞きなすつたのでせう？きまつてそんな事ばかし言つてるのですもの。

アルンホルム　えゝ、實は、私もよく氣がついてゐます。

ボレッタ　ですけど、あの人たちの言ふ事は皆嘘ですわ――始終此の土地に住んでる私達には、そんな事はありやしません。外の大きな世界の流れが、眞夜中の太陽を見に行く途中で私たちの戸の側を通つたからつて、それが何になるでせう？私たちが其の流れに這入れるぢやなし、私たちには眞夜中の太陽も何もありはしない。つまらない、私達はやつぱりこゝで、鯉と一緒に池の中をうろ〳〵して滿足してゐなくちならないのです。

アルンホルム（彼女の傍に腰かけて）ねえ、ボレッタさん――私はさう思ふが、何か知ら――ある特別なもので――あなたが斯うして家にゐながら、あこがれてゐらつしやるものがあるのぢやないか？

ボレッタ　はあ、或はあるかも知れませんよ。

アルンホルム　ぢやそれは何でせう？何にあこがれてゐるのでせう？

ボレッタ　第一に、國を離れるといふ事。

アルンホルム　それが何よりも？

ボレッタ　はあ。それから次には、も少し學問がしたい事。本當に世間の事情を知りたい爲に。

アルンホルム　あなたと書物を讀んでゐた頃、お父さんは、よくあなたを

大學へ入れると言つてゐられましたね。

ポレッタ　えゝえ、父も氣の毒な人ですわ――いろんな事を言ひますけれど、いざとなるとそれが――父には實行する氣力が少しもないのですから。

アルンホルム　さうです、惜しい事には――それが無いやうですね。併し此の事は今までお父さんに話して御覽なすつた事がありますか？眞面目にせがんで見た事が？

ポレッタ　いゝえ、それ程の事もしませんでした。

アルンホルム　でも、あなた、言ふならあまり後れない方がいゝですよ、ポレッタさん。なぜ言つて見ないのです？

ポレッタ　それはね、つまり私にも實行する氣力が無いのでせうよ。私その點ぢや屹度父に似たのですよ。

アルンホルム　ふむ――そんな事を言つてる場合ぢやないと思ひますがね？

ポレッタ　いゝえ、ですけどね。それに父は私の身や私の將來の事などを考へて呉れる暇はないのですよ――それから其の氣もないのですし。父は出來るだけそんな事を避けて、たゞもうエリーダさんの事にばかりかゝつてゐるのですから――

アルンホルム　誰れですつて――？どういふ風に――？

ポレッタ　父と二度目のお母さんとは――。（聲を途切らせる）父と母とは別々の生活をしてゐるのでせう？

アルンホルム　だから、尙あなたは家を出たくなる譯ぢやありませんか？

ポレッタ　えゝ、ですけど、何だか私、出て行く權利が無いやうにも思はれ

ますの――父を見棄てゝねえ。

アルンホルム　けれども、ボレッタさん、どうせ何時かはお父さんの側を離れるのでせう？だから、早ければ早いだけよからうといふのです。

ボレッタ　えゝ、いづれはさうなる外なからうと思ひますの。私だつて自分の事も考へて何か地位をこしらへて置かなきや、父が居なくなつた時たよる所が無くなります――けれどお父さんも氣の毒ですわ――見捨てゝ行くといふことが心配ですわ。

アルンホルム　心配――？

ボレッタ　えゝ、お父さんのために。

アルンホルム　併し變ですね、繼おつ母さんはどうしたのでせう？あの方がお父さんには附いてゐられるぢやありませんか？

ボレッタ　そりやさうですけれど、あの人は、おつ母さんがよくしてゐらしやつたやうな事には、まるで向かないのですよ。あの人には氣のつかない事だらけ、きつと氣をつけたくないのかも知れません――それともそんな事は構はないのか知ら。何うなのだか私には分かりません。

アルンホルム　ふむ――あなたのおつしやる意味は分かりました。

ボレッタ　お父さんが氣の毒です――どうかすると體が弱いのですから。あなたもそれはお氣がついたでせう？でね、仕事だつて十分一杯〳〵にはないのです。それをあの人は構つてあげやうともしないのですよ――無論そりや、半分はお父さんの罪かも知れませんけど。

アルンホルム　どうしてさうでせう？

ボレッタ　それはね、父はいつも周圍の者が愉快な顔をしてゐるのが好

きで、家の中には日光と滿足が必要だと言つてゐます。で、父はよくあの人に藥を飲ませてゐるのですが、それが長いあひだには害をするのぢやないかと思つて、氣になるのですよ。

アルンホルム　ほんとにさう思ひますか？

ボレッタ　えゝ、私どうしてもさう思はれてならないのです。時々全く、あの人は變ですもの。（激しく）けど、つまり無理ですわね、私を斯うして、是非とも家に引きとめて置かうといふのは。實際父にだつて、何の役にも立ちはしませんし、私としてはまた自身に對する義務もあると思ひますわ。

アルンホルム　私はねえ、ボレッタさん、――此の事はもつと精しく言つて見なくちやいけませんよ。

ボレッタ　だつて、そんな事がどうなるものですか？　やつぱりこゝで、

鯉と一緒に池の中で一生を送るやうに出來てるのでせうよ。

アルンホルム　そんな事があるものですか。それは全然あなた次第です。

ボレッタ（熱心に）さう思つてらつしつて？

アルンホルム　えゝ、さうですとも。全然あなた一人の手できめられる事です。

ボレッタ　あゝ、ほんとにさうだつたら――！あなたね、父にうまく言つて見て下さらない？

アルンホルム　それも言つて見ますが、それより先に、私はあなた御自身に打ち明けて聞いて貰ひたい事があるのです、ボレッタさん（左方を見て）しつ！人が聞いちやいけないから――またあとで話しませう。

（エリーダ左手から這入つて來る。帽子に冠らないで輕いショールを頭から肩

へかけてゐる。）

エリーダ（無理に活氣づいて）何ていゝんでせう、こゝは！なんていゝ氣持でせう！

アルンホルム（立ち上り）散歩してゐらつしやいましたか？

エリーダ　えゝ、家と一緒に長く〳〵散歩してゐました、いゝ氣持でしたこと。これからまた船に乘らうといふのですよ。

ポレッタ　おかけなさらない？

エリーダ　ありがたう、いゝのよ。

ポレッタ（ベンチの席を明けて）よくかけられますわ。

エリーダ（歩き廻り）いえ、いえ、いえ、私いゝのよ、私いゝのよ。

アルンホルム　散歩が利いたに違ひありません、活々していらつしやつたやうです。

エリーダ　もう、ほんとによくなりました！何とも言へないいゝ氣持です！ほんとに安心して了ひました！ほんとに安心して――（左手を見て）何て大きな汽船が這入つて來るのでせう？

ポレッタ（立ち上り見て）屹度あの大きなイギリス船ですよ。

アルンホルム　浮標の所へ錨を下しますね。いつも此の邊へ泊るのですか？

ポレッタ　ほんの半時間ばかりで、ずつと奥の方へ上つて行きます。

エリーダ　それから明日はまた出て行きます、あの大きな廣い外洋の方へまつすぐに沖へ出て行くのです。一緒に行けたらどんなでせう！ねえ、どんなでせう！どんなでせう！

アルンホルム　奥さんは、まだ長い航海をなすつた事はありませんか？

エリーダ　一度もありません。たゞ入江の中を少うし乘つたばかり。

ボレッタ（嘆息して）どうしたつて、私達は、乾からびた土の上に喰つついてなきやならないのですわね。

アルンホルム　まあ、とにかくそれが私たちの自然の領分ですからね。

エリーダ　そんな事はありませんよ。私さうは思ひません。

アルンホルム　陸がさうでないのですか？

エリーダ　はあ、私さうは信じません。私、さう思ひますの、若し人間が最初から海の上か――ひよつとすると海の中にでも――住みつけてさへゐたら、今ごろはもつと〳〵完全なものになつてゐたらうと思ひますの――もつと善くて、もつと幸福で。

アルンホルム　あなたほんとにさうお信じですか？

エリーダ　はあ、きつとさうだと思はれます。その事はワングルともよく話しました。

アルンホルム　それでお宅では――？

エリーダ　それはね、幾分の道理は其の中にあるといふのです。

アルンホルム（冗談のやうに）まあ、ねえ。併し出來た事は出來た事で、吾々が一旦間違つた道を取つて、海の動物の代りに陸の動物になつた以上、今さら出直さうといつても、もう間にあはないと思ひますね。

エリーダ　えゝ、それが悲しい事實なのですよ。そして誰でも此の事はみんな自身でさう感じてゐて――其の感じがちやうど秘密な悲しみか嘆きのやうに誰れにでも附きまとつてゐると思ひますわ。人間全體の心の底にある愁ひは、これが本だと信じます。きつとさうに違ひないのですよ。

アルンホルム　併し奥さん――私は人間がさう深く憂欝なものだといふ事實を認めません。却つて多數の人は人生を愉快に氣輕に過ご

してゐます――大きな靜かな意識しない悅びで過ごしてゐます。

エリーダ　いゝえ、それはさうぢやありません。その悅びは――丁度長い明るい夏の日の悅びのやうなものです。その中にはもう暗闇の來る前兆が含まれてゐます。そして此の前兆が人間の悅びに影をさします――たとへば疾風雲が入江に影をさすやうに、今すつかり澄んで輝いてるかと思ふと、だしぬけに――

ボレッタ　そんな悲觀した考を起こしちやいけないわ、あなた。ちよつと前までは、あんなに活々して快活だつたのに――

エリーダ　然、然、さうでしたよ。ほんとにこんな――私、馬鹿ねえ。（不安相に見廻して）家で來て呉れるといゝのに。ちやんと約束して置きながら、まだ來ないなんて。忘れちやつたのですよ。アルンホルムさん、あなたいらつしつて探して來て下さいませんか？

アルンホルム　はあ宜う御座んすとも。

エリーダ　どうぞさう言つて下さい、ほんとうにすぐ來て呉れなくちやならないつて。私、もうあの人が見えなくなつたのですから――

アルンホルム　見えなくなつた――？

エリーダ　あゝ、あなたには分らないのです。私ね、あの人が居なくなると、よく何んな顏つきだつたか思ひ出せなくなるのですよ、そして全く見失つて了つたやうになるのですよ――それがたまらなく苦しいのです。どうぞ行つて下さいな。（池の方へぶらぶらと行く）

ボレッタ（アルンホルムに）私一緒に行きませう、あなたに分からないから――

アルンホルム　なあに、御心配には及びません、どうにかして――

ボレッタ（低い聲で）いえ、いえ、不安心ですから。父はあの汽船にゐるか

も知れませんさうだと心配ですわ。

アルンホルム　心配？

ポレッタ　だつてお父さんは、いつも船客の中に知人がゐやしないか探しに行くのですよ、そして船には食堂の酒場があつて――

アルンホルム　あゝ！ぢやいらつしやい。

（ポレッタと二人左方に去る。）

（エリーダ池を見つめたまゝ、少時立ち留つてゐる。時々柔かに、切れ〳〵に獨語する）

（外の方、庭の垣の向ふの路に、一人の旅裝した他國人が左手から這入つて來る。濃く生えた赤い髭の毛と鬚があつてスコッチ帽を冠り、旅行鞄を紐で肩から斜めに釣り下げてゐる）

他國人（垣に沿うてそろ〳〵と歩みより、庭を見込む。エリーダを見付け立ち留まりつく〴〵と探るやうな眼つきで見入つて、靜かに言ふ）エリーダ、今晩は！

エリーダ（振り向いて叫ぶ）おや、まあ――とう〳〵いらつしやつたの！

他國人　えゝ、とう〳〵。

エリーダ（彼を見、愕いて心配げに）誰ですあなたは？誰れか探してゐらつしやるのですか？

他國人　私だよ。

エリーダ（愕いて）何うしたのだらう！變な風におつしやるのね！誰れを見つけてゐらつしやるのですか？

他國人　知れてるぢやないか？お前を見つけてゐるさ。

エリーダ（びつくりして）あゝ――！（ちよつと見つめてゐて激しく後退りし、殆ど窒息したやうな叫び聲を立てる）あの眼！あの眼！

他國人　よし〳〵――とう〳〵私が分かりかけたね？私にはすぐお前が分かつたよ、エリーダ。

エリーダ　あの眼！そんなに私を見ないでゐて下さい！誰れか呼んで助けて貰はう！

他國人　しつしつ！怖がるには及ばない。何も害はしないから。

エリーダ（眼を兩手で抑えて）そんなに私を見ちやいけないといふに！

他國人（兩腕を庭の垣に凭けて）私はあのイギリス船で來たよ。

エリーダ（畏縮するやうにちらと見て）私に何の御用があるの？

他國人　私は出來るだけ早く返つて來ると約束したよ——

エリーダ　行つて下さい！また行つて下さい！決して——決して二度とこゝへ來ちやいけない！二人の間はすつかり切れたのだと言つて上げたぢやありませんか！すつかり！さう言つて上げたでせうか？

他國人（それには答へずに、極靜に）もつと早く來やうと思つたが、さう行かなかつた。やつと折を得て、斯うして來たのだよ、エリーダ。

エリーダ　私に何の御用があるの？何を考へてゐるのです？何のためにこゝへ來たのです？

他國人　分かつてるぢやないか、お前を連れに來たのさ。

エリーダ（恐怖して後退りして）私を連れに！そんな事を思つて來たのですか？

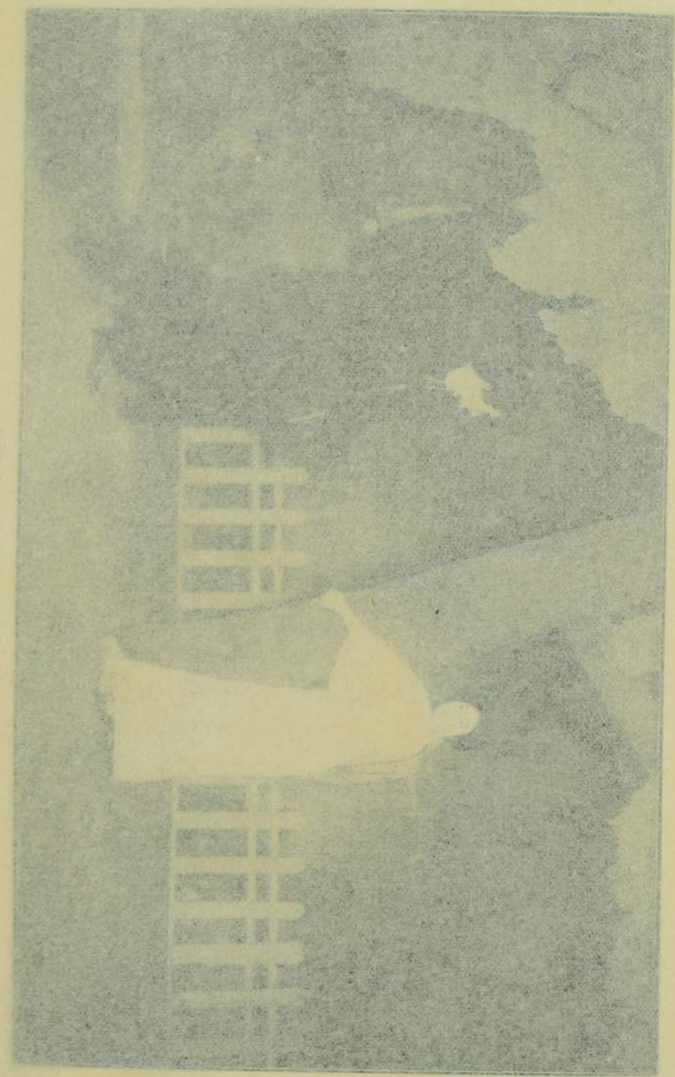
他國人　あゝ、さうとも。

エリーダ　だけど私が結婚した事は知つてるのでせう！

他國人　あゝ、知つてゐる。

エリーダ　それでも——！それに構はずやつて來て——私を——私を連れて行かうとして！

他國人　あゝ、その爲に來たのだよ。



エリーダ　（兩手で自分の頭を摑んで）　おゝこんな恐ろしい――！こんな怖い事、こんな怖い事――！

他國人　きつと、來たくないのだらう！

エリーダ　（我知らずに）　そんな風に私を見ないで下さい！

他國人　來たくないのかい？

エリーダ　いけない、いけない、いけない！行きたくない！どんな事があつたつて、決して！決して行かない。行けもしないし、行きたくもない！（低い調子で）行くものか。

他國人　（垣を乘り越えて庭の中に入る）ではそれで宜しいエリーダ――私は行く前にたつた一言言つて置かう。

エリーダ　（逃げやうとするが逃げ得ないで恐怖の餘り失神したやうに立つて、池の傍の樹の幹に身を支へてゐる）私に、私に觸つちやいけない！傍へ來ちやい

第三幕　エリーダと他國人

けない！そこに其のまゝゐて下さい！私に觸ることはならない！

他國人（用心して、一二歩近より）そんなに私を怖がつてはいけないよ。エリーダ。

エリーダ（兩手で眼を掩ひ）そんな風に私を見ちやいけない。

他國人　怖がらないで、怖がらないで。

（ヴングル、左手から庭を通つて來る）

ヴングル（木立を全く出切らない前に）あゝ、大分待たせたね。

エリーダ（急に走り寄り腕にしつかりと縋りついて叫ぶ）おゝ、あなた——助けて下さい！助けて下さい——どうぞ！

ヴングル　エリーダ——一體どうしたのだ——！

エリーダ　助けて下さいよ！あの人が見えませんか？そこに立つてゐます！

ヴングル　（他國人を見て）そこにゐる人か？（彼の方に近寄り）失禮だが、あなたは誰れです、なぜ此の庭へ這入つて來たのです？

他國人（頤でエリーダを指して）あれに用があるのです。

ヴングル　あゝ、では君だな――？（エリーダに）見馴れない人がお前を尋ねて來たと聞いたよ。

他國人　はあ、それは私です。

ヴングル　で、妻に何ういふ御用があるのです？（振り向ひて）お前その方を知つてゐるか、エリーダ？

エリーダ　（兩手をしぼりながら、柔かに）知つてゐるかつて！　さうですとも、さうですとも！

ヴングル　（急いで）ふむ？

エリーダ　おゝ、あれが此の人ですよ、あなた！　この人自身なのですよ！

此の人――ね、分かつたでせう――！

ヴングル　何？　何だつて？（振り返り）君があのジョンストンと言つて――？

他國人　さやう、ジョンストンでもよろしい、御隨意に。だがそれは私の名ぢやありません。

ヴングル　名ぢやない。

他國人　今はさうぢやありません。

ヴングル　で、妻を何うしやうといふお考へか？　その燈臺守の娘が幾年か前に結婚してゐる事は御承知だらう。それから其の夫になつたのが誰だといふ事も御存じに違ひない。

他國人　この三年餘り前に、それを知りました。

エリーダ　（熱心に）どうして分かりました？

他國人　お前に逢はうと思つて歸りかけてゐた途で、此の地方の古新聞が手に入つて、讀んで見ると、その中にお前の結婚の事が出てゐた。

エリーダ（眞直に前方を見て）私の結婚が――それぢや、あの――

他國人　それが私に妙な感じを與へたよ。あの指輪をつないだことが――あれがやつぱり一種の結婚だつたのだ。エリーダ。

エリーダ（兩手で顏を掩ひ）おゝ――！

ヴングル　どうして君はそんな事を――？

他國人　お前それを忘れてゐたか？

エリーダ（凝視せられてゐることを感じたやうに叫ぶ）そんなに、私を見つめてゐちやいけない！

ヴングル（他國人の前に立つて）どうか私に言つて下さい、妻にでなく。要するに――成り行きは君に分かつてゐるのだから――こゝで何うしやうと言ふのです？なぜやつて來て私の妻をお尋ねになつたか？

他國人　私は出來るだけ早く逢ひに來るとエリーダに約束してあつたのです。

ヴングル　エリーダを――！また！

他國人　それからエリーダも私の來るまで待つてゐると、眞心で誓つたのです。

ヴングル　君は私の妻の名を呼んでおいでのやうだが、さういふお馴染は此の邊では許しません。

他國人　それはよく心得てゐます。併しあれは誰れよりも先に私のものになつてゐるのですからね。――

ヴングル　君のもの！まだそれを――！

エリーダ（ヴングルの後ろに隠れ）おゝ――！どうしても私を離すまいとしてゐる！

ヴングル　君のもの！エリーダが君のものだと！

他國人　あれはあなたに二つの指輪の事を話しましたか？私の指輪とエリーダの指輪と？

ヴングル　たしかに聞きました。併しそれが何うしたのです？其の事は後にあれが破談の手紙を君に送つて、君も知らないとは言へない筈だ。

他國人　エリーダと私の契約では、指輪の事が結婚の證據として完全な效力を有してゐます。

エリーダ　けれど私はそれを認めない！何んな事があつたつて、私はこの上あなたに用はありません！そんなにして私を見ないで下さい

！用はありません、分りましたか！

ヴングル　君はこゝへ來てそんな子供の遊び事のやうな事で權利を主張しやうなんて、氣が狂つてるのぢやないか？

他國人　それは其の通りです。あなたの考方から言へば、私にエリーダを要求する權利はたしかにありません。

ヴングル　それならどうしやうと言ふのです？力づくで奪つて行けるものでもあるまいし――あれ自身の意志に反してはね！

他國人　いや、何でそんな事をする必要があらう？若しエリーダが私のものになるのなら、あれが自身の自由意志で來なくちやなりません。

エリーダ（飛び立ち叫ぶ）私自身の自由意志で――！

ヴングル　そんな事が――！

エリーダ（獨語して）私自身の自由意志で――！

ヴンゲル　君は氣が狂つてゐるに違ひない。行きたまへ！此の上君に用はない。

他國人（懷中時計を見て）もう間もなく私は船へ歸らなくちやならない。（一歩進んで）まあ、まあ、エリーダ、これで私は私の義務を果たしたのだ（猶近寄り）誓つた言葉を守つたのだ。

エリーダ（後退りし乍ら嘆願するやうに）おゝ、どうぞ私に觸らないで下さい！

他國人　明日の晩まで待つてやるから、よくそれを考へて御覽——

ヴンゲル　何も考へる事はない。君自身立ち去る仕度をしたらよからう！

他國人（なほエリーダに）私はこれからあの汽船で入江を上つて行くのだが、明日の晩は歸るから、その時また逢はう。お前はこゝで、庭で私を

待つてゐなくちならない。この事はお前と二人きりで決したいから。分かつたか？

エリーダ（柔らかに震へ乍ら）おゝ、お聞きなすつて、あなた？

ヴンゲル　驚かなくてもいゝ。來るのを止める工風があらう。

他國人　とにかく、さやうならエリーダ。では明日の晩に。

エリーダ（頼むやうに）いけない、いけない——明日の晩來ないで下さい！二度と來ないでゐて下さい！

他國人　それで若しその時までに、私と一緒に海へ行く決心がついたら——

エリーダ　おゝそんな風に私を見ないで下さい——

他國人　その場合には、すぐ出發するやうに用意して置かなくちやならない。それが分かつてさへゐればいゝ。

ヴンゲル　家へお這入り、エリーダ。

エリーダ　這入れません。おゝ、手を貸して下さい、助けて下さい、あなた！

他國人　よくおぼえておいで、明日私と一緒に來なかつたら、それが最後だよ。

エリーダ　（震へ乍ら彼を見て）それが最後ですと？永久に――？

他國人　（頷いて）一旦さうなつたら、取り返しはつかないよ、エリーダ！私は二度と此の國へ歸らないから、此のゝち私に逢ふこともなからうし、便りを聞くことも無からう。私は死人のやうになつて永久に前と分れて了ふだらう。

エリーダ　（不安げに息をして）おゝ――！

他國人　だから、お前のする事によく氣をおつけ。左樣なら。（垣を乘り越え、立ち止まつて言ふ）いゝかい、エリーダ――明日の晩出發されるやうに支度をしてお置き。私が來て連れて行くから。

（路をそろ〳〵と靜かに右方に去る。）

エリーダ　（しばらく後を見送つて）私自身の自由意志でと、あの人は言つた！ねえ――あの人は私自身の自由意志で一緒に行かなくちやならないと言ひましたね。

ヴンゲル　氣を靜めなさい。あの男はもう行つて了つたから、二度と逢ふ氣遣ひはない。

エリーダ　あら、どうしてそんな事が言へて？明日の晩また來るちやありませんか？

ヴンゲル　來ても構はない、お前と逢はせないやうにするから。

エリーダ。（頭を振り）いゝえ、あなた、あの人を防ぐことは出來ませんよ。

ヴングル　出來るとも、――私にまかせてお置き。

エリーダ　（それには耳を貸さないで沈思し乍ら）あの人がこゝへ來たら――明日の晩――そして海を越えて――あの船で行つて了つたら――

ヴングル　ふむ、さうすると？

エリーダ　あの人は決して――決して歸つて來ないか知ら。

ヴングル　然、エリーダや、それはもうたしかだよ。あゝして置けば、この後何うすることも出來ないぢやないか？もうお前の口から、用は無いと言ひ渡したのだもの。それできまりは附いてゐるよ。

エリーダ　（獨語して）ぢや明日――それともう二度と。

ヴングル　その上、萬一あの男がまた來る氣になつても――

エリーダ　（興奮して）その時はどうするのです――？

ヴングル　何に、害にならないやうにする法があるさ。

エリーダ　あら、そんな事を思はないで下さいな。

ヴングル　する法があるといふのさ！若しいよ〳〵他で避ける途がなかつたら、その時は船長殺しの罪に問へばいゝ。

エリーダ　（激しく）いえ、いえ、いえ――！それはいけません！船長殺の事は何にも分かつちやゐません。まるつきり何も！

ヴングル　何にも分からない！だつてあの男が自身でお前に白狀したぢやないか！

エリーダ　いゝえ、其の事は少しも！若しあなたが何かおつしやるなら、私、それを否定します。あの人を牢屋へ入れちやなりません！あの人の居所は、廣い海の上ですもの、それがあの人の家ですもの！

ヴングル　（エリーダを見て除かに言ふ）あゝ、エリーダ――エリーダ！

エリーダ　（熱烈にヴングルに取りつき）あゝ、あなた、ねえ――あの男の手から

私を救つて下さい！

ヴングル　（やさしく離れて）さあ、おいて！私と一緒に！

（リングストランドとヒルダ、二人とも釣道具を携へて、池の右方から現はれる。）

リングストランド　（急いでエリーダの方に行き）あゝ、奥さん、どうでせう――不思議な話があります！

ヴングル　何ですか？

リングストランド　どうでせう――例のアメリカ人に逢つたのです。

ヴングル　アメリカ人？

ヒルダ　えゝ、私も逢つてよ。

リングストランド　庭の後を廻つて行きました。そしてあの大きなイギリス船に乗り込みました。

ヴングル　あなたは何處でその人をお知りでした？

リングストランド　一度あの男と一緒に航海をしました。たしかに溺れ死んだと思つてましたがあゝして生のまゝで出て來たのです。

ヴングル　君はまだ他に其の男の事を御存じですか？

リングストランド　いゝえ、併しあれは、たしかに不義をした妻君に復讐をしやうと思つて歸つて來たのですよ。

ヴングル　といふと？

ヒルダ　リングストランドさんはね、群像の彫刻を作つて、其の中へ其の人を入れやうといふのですよ。

ヴングル　私には更に分からない――

エリーダ　其の事はあとで精しく話しますよ。

（アルンホルムとポレッタ庭の垣の外の路に沿うて左手から入り來る。）

ポレッタ　（庭にゐる人々に）來て御覽なさいよ！イギリス船が入江を上つ

て行くところですよ。

（大きな汽船が一艘向ふを除々とすべつて行く）

リングストランド（庭の垣の傍にゐるヒルダに）あの男は、今晩きつとその女を襲ふでせうよ。

ヒルダ（頷いて）不義した妻君をね――さうよ。

リングストランド どうでせう――丁度（ちやうど）眞夜中頃（まよなかごろ）に。

ヒルダ おゝ、どんなにか痛快な事でせう。

エリーダ（船を眺め乍ら）ぢや明日（あした）――

ヴングル それからは、決して二度と來なくなる。

エリーダ（柔らかにそして震へ乍ら）あゝ、あなた――私を私の手から救つて下さい！

ヴングル（心配さうに見て）エリーダ！私にはどうも――この事のうしろに何かあるやうに思はれるよ。

エリーダ 私を誘惑するものが其のうしろにあるのです。

ヴングル 誘惑するものが――？

エリーダ あの人は海のやうですよ。

（エリーダは思ひに沈んだまゝそろ〳〵と庭を通つて左に去る。ヴングルは不安さうに傍についてあるき注意深く觀てゐる。）

第四幕

醫師ヴングルの家の庭に臨んだ一室。左右に扉。後方正面、二つの窓の間は外廊に通ずる大きな硝子戸。庭の一部が下の方に見える。前方左りに長椅子(ソーファ)とテーブル。右手にピヤノが一臺、ずつと後ろに大きな花臺中央に一臺の圓卓とその周圍に數脚の椅子。卓の上に滿開の薔薇の鉢が載つてゐて周りには種々の植木鉢が置いてある。午前の事。ポレッタは左方、テーブルの傍の長椅子に座つて、刺繍をしてゐる。リングストランドはテーブルの上方の端の椅子にかけてゐる。バレステッドは庭で畫をかいてゐる。ヒルダその傍に立つて見てゐる。)

リングストランド (兩腕をテーブルにもたせてポレッタの仕事してゐるのを暫く默つて眺めてゐたが) そんな風に緣(ふち)を取るのは難(むつ)しいものでせうね、お孃さん。

ポレッタ いゝえ、そんなでもありませんわ。たゞ氣をつけて勘定(かんぢやう)を間違さへしなけりや——

リングストランド 勘定(かんぢやう)? 勘定をするのですか?

ポレッタ はあ、針の目を。ね、ほら。

リングストランド なるほどさうですね! どうでせう! 殆ど一種の美術ですね。意匠もおやりですか?

ポレッタ はあ、下圖(したづ)さへあれば。

リングストランド 下圖がないと?

ポレッタ 出來ませんの。

リングストランド それではやつぱり、ほんとうの美術とは言へませんね。

ポレッタ えゝ、まあ精々(せい〳〵)で——手なぐさみですわ。

リングストランド 併し何うですね、あなたは屹度、美術を習へば習へる方(かた)

だと思ひますね。

ポレッタ　ちつともその傾向がなくつても？

リングストランド　えゝ、構ひませんとも――若しあなたが絶えず本當の美術家と一緒にあらつしやることさへ出來たら――

ポレッタ　其の人から習へるとお思ひなさつて？

リングストランド　習へるつて、普通の意味ぢやないのですが、段々に分かつて來るだらうと思ひます――一種の奇蹟のやうにね。

ポレッタ　妙な考へですことね。

リングストランド（間を置いて）あなたは是れまで本氣でお考へなすつた事がありますか――つまり深く眞面目にですね、結婚といふ事を？

ポレッタ（ちらと見て）あの――？いゝえ。

リングストランド　私はあります。

ポレッタ　あら、さう？

リングストランド　えゝ、私はそんなやうな事をしば〳〵考へます。殊に結婚についてさうです。それから、之れに關する書物も隨分讀んで見ましたが、私の考へでは結婚は一種の奇蹟と言つていゝですね。女が次第にかう變形して、夫に似て來るものですよ。

ポレッタ　夫と同じ趣味を持つといふのですか？

リングストランド　はあ、それです！

ポレッタ　そりやさうでも、能力の方はどうでせう？――夫の才能とか技術とかは？

リングストランド　ふむ――さうですね――それらもやつぱり、さうでない譯はありませんね――

ポレッタ　ぢや、何でせうか、男が書物とか思想とかで得たものも、そんな

風に妻君に移つて行くでせうか？

リングストランド　はあ、それもです、段々に奇蹟のやうにしてね。併し無論こんな事は、眞實な結婚でなくては起こりません。相愛して本當に幸福な結婚でなくては。

ボレッタ　では、それと同じやう、夫が妻の方へ引きつけられて了ふ事もあるとはお思ひなさらない？つまり妻君に似て來るのですよ。

リングストランド　夫が？いゝえ、そんな事は、ついぞ考へたこともありません。

ボレッタ　けれど、どうして一方だつてさうならないのでせう？

リングストランド　なりませんね。男は一生を捧げるだけの仕事を持つてゐます。男が強くてしつかりしてゐるのはその爲ですよ。一生の事業があるのです。

ボレッタ　どんな男でも？

リングストランド　いや、私は主として美術家の事を考へてゐたのです。

ボレッタ　美術家は結婚していゝものだとお考へなすつて？

リングストランド　いゝですとも。眞に愛するものが見つかりさへすれば――

ボレッタ　其時だつて、美術家はむしろ自分の藝術だけに一生を捧げるのがいゝと私は思いますわ。

リングストランド　無論そりやそうなくちやなりませんが、併し結婚したつて充分に出來ることです。

ボレッタ　それならその女はどうなるでせう？

リングストランド　その女？どの女です――？

ボレッタ　その人と結婚した女。その女は何を目的に生活するのでせ

う？

リングストランド　その女も矢張り夫の藝術を目的に生活しなくちやなりません。それが女に取つては此の上もない幸福であるべきだと私は思ひますね。

ボレッタ　ふむ、――私はそんなにも思ひません――

リングストランド　ですけどお嬢さん、たしかですよ。女が夫のために受ける幸福は尊敬とか名譽とかばかりぢやあないのです、そんなものは寧ろ言ふに足らない小部分なのです。女は夫の創作を助けることが出來ます――常に夫の傍にゐて勞作を輕くしてやるのです、夫に侍いて、其の生活を徹頭徹尾安樂な愉快なものにしてやるのです。女に取つてこれほど立派な幸福はないと思ひます。

ボレッタ　まあ、何てあなたは自分勝手な人でせう！自分ぢや分からないのですね。

リングストランド　私が自分勝手ですつて？とんでもない――！あゝ、もう少しよく私を解してさへ下すたら――（ボレッタの方に身を屈めて）お嬢さん、――私が行つて了ひましたら――そして私は間もなく――

ボレッタ（同情して彼れを見る）あら、そんな心細い考へを起こすものぢやありませんよ。

リングストランド　僕はさう心細いことだとも思ひません。

ボレッタ　どういふ譯で？

リングストランド　僕は此の一ヶ月許しの間に立ちましてね、最初に家へ寄つてそれからすぐ南の方へ行くのです。

ボレッタ　あゝ、さう。分かりました、分かりました。

リングストランド　で、時々僕の事も思ひ出して下さるでせうか、お嬢さん

ボレッタ　えゝ、そりやねえ。

リングストランド　（嬉しさうに）ぢや、どうかそれを約束して下さい。

ボレッタ　えゝ、約束しますわ。

リングストランド　きつとですかボレタさん？

ボレッタ　きつと。（語調を變へて）ですけどそんな事が何になるでせう？

何にもなるものぢやありませんこと！

リングストランド　だつてあなた？あなたが此處にゐて僕の事を思つて下さると思ふと僕は非常に嬉しいです。

ボレッタ　はあ、ですけどそれが何になるでせう？

リングストランド　それが何ういふ事になるかは、僕にも分かりませんが

――

ボレッタ　私にも分りません。其のあひだにはいろんな事が起こるもの

のですから、もう、ありつたけの事が出て來るものですから。

リングストランド　さうですね、何か奇蹟のやうなものでも現はれるか知れない。運が向いて來るか――何かそんな事がありますよ。僕は確かに運の好い人間だといふ自信がありますから。

ボレッタ（活氣づいて）えゝ、さうなのよ！さうお思ひでせう？

リングストランド　はあ、確かにさう信じてゐるのです。そして――三四年たつと――有名な彫刻家になつて工面もよくなり、健康も回復して歸つて來て――

ボレッタ　はあ、ねえ、さうさせたいわね。

リングストランド　それはもう、さう信じてゐらつしやい――あなたがたゞ僕の南方へ行つてゐるあひだ、本當に溫い心で思つてゝさへ下されば、それで大丈夫です。あなたは其の約束をして下さいましたね。

ボレッタ　はあ、お約束してよ。（頭を振り乍ら）けどやつぱり、それが何にもなりつこはありません。

リングストランド　なりますともボレッタさん、少なくともそれが僕の群像を作る助けになつて、より容易く、より早く進歩するやうになります。

ボレッタ　さうでせうか？

リングストランド　えゝ、僕さふいふ感じがします。それからあなたにしても、張合があるだらうと思ひますよ――こんな邊鄙な土地にゐながら、――いはゞ僕の製作を助けてゐるのだとお考へなすつたら。

ボレッタ（相手を見て）で――あなたは、あなたに取つちや？

リングストランド　私は――？

ボレッタ（庭の方を見て）しつ！何か他の事を話しませうよ、アルンホルムさんが來てよ。

（アルンホルム左手庭の中に出て來る。立ち留まつて、バレステッド及ヒルダと話をする。）

リングストランド　ボレッタさん、あなたはあの、昔の先生がお氣に入つてるんですか？

ボレッタ　氣に入つてるんですつて？

リングストランド　はあ、お好きですかといふのです。

ボレッタ　えゝ、えゝ、私大好きですよ、お友達としても相談相手としてもほんとにいゝ方です。そして機さへあれば、いろんな助けになつて下さるのですよ。

リングストランド　あの方がまだ結婚しないといふのは變ぢやありませんか？

ポレッタ　それがそんなに變でせうか？

リングストランド　はあ。財産もあるといふぢやありませんか？

ポレッタ　さうだらうと思ひます。けれどあの方には屹度お嫁にならうといふものが容易に見つからないのでせうよ、

リングストランド　何故でせう？

ポレッタ　それはね、あの方のお近付の娘さんといへば、大抵その先生をなすつてらつしつたのですからね。自分でさう言つてらつしやいました。

リングストランド　でも、それがどうといふのでせう？

ポレッタ　だつて、あなた、自分の先生だつた人の所へお嫁には行かないでせう？

リングストランド　娘が自分の先生を愛する事は出來ないものでせうか

？

ポレッタ　一人前になつてからは、さうも參りませんの。

リングストランド　おや〳〵！奇態ですね！

ポレッタ　（注意するやうにしつ、しつ！

（バレステッドは少時の間道具を片付けてゐたがこれを携へて右手へ去る。ヒルダはそれを手傳ふ。アルンホルムは外廊に上つて室に入る。）

アルンホルム　お早う、ポレッタさん。お早う君――えゝ――えゝ――ふむ！

（リングストランドの立ち上り禮をするのを氣まづげに見て冷やかに頷く。）

ポレッタ　（立ち上り、近寄つて）お早う御座います、アルンホルムさん。

アルンホルム　今日は皆樣お變りありませんか？

ポレッタ　え、有難う御座います。

アルンホルム　おつ母さんは、今日もまた海水浴に入らつしやいましたか？

ボレッタ　いゝえ、上の居間に居ります。

アルンホルム　御不快？

ボレッタ　どうですか？　部屋をしめきつてゐるのですよ。

アルンホルム　ふむ――しめきつて！

リングストランド　奥さんは昨日のアメリカ人でひどく愕りなすつたやうでしたね。

アルンホルム　君御自身何か御承知なのですか？

リングストランド　僕が奥さんにお話したのです、その男がちやんと生きてゐて、庭の後ろを歩いて居た事を。

アルンホルム　あ、さうでしたか。

ボレッタ（アルンホルムに）あなたとお父さんは、昨晩遅くまで起きてゐらしやつたのね、さうでせう？

アルンホルム　えゝ、かなり遅くまで。或る重大な問題を議論してゐたのです。

ボレッタ　私の身の上に就いて幾らかでもお話しして下すつて？

アルンホルム　いや、まだです。出來なかつたのですよ。あなたのお父さんは何か他の事にすつかり氣を取られてゐらつしやいました。

ボレッタ（ためいきをして）あゝ、さう――いつもあゝなのですよ。

アルンホルム（意味ありげに見入り乍ら）けれども此の事に就いちや、いづれあなたと私とでお話しなくちやなりません。――お父さんはどちらですか？　お出かけですか？

ボレッタ　きつと外科室の方でせう。私行つて連れて來ませう。

アルンホルム　いや、それには及びません。私が行つた方がいゝでせう。

ポレッタ（左手の方に聞き耳を立てゝ）ちよつと、あなた。父が降りて來たやうですよ。さうです。ぢや、きつと上で、おつ母さんの所にゐたのです。

（ヴングル左手の戸口から入る。）

ヴングル（アルンホルムに手を差し延べて）あゝ、君もうお出で下すつたのですか？よくこんなに早く。實は今一度是非お話しなくてはならない事がありましてね。

ポレッタ（リングストランドに）少しの間庭へ出て見ませうか、ヒルダのゐる方へ？

リングストランド　結構ですね、まゐりませう、お嬢さん。

（二人は庭へ降りて背後の木立の中へ消える）

アルンホルム（二人の後を見送つてゐたが、ヴングルの方に向いて）あの若い男の事をよく御存じですか？

ヴングル　いゝや、詳しい事は知りませんよ。

アルンホルム　では、いつもあんなにお嬢さんたちと一緒にゐていゝのですか？

ヴングル　いつも一緒にゐますか？實は氣がつかなかつた。

アルンホルム　あゝ、言ふ事には氣をお付けなさらなくちやいけますまいね？

ヴングル　それは、たしかにさうですが、困つた事には私にそれが出來ないんでしてね。娘どもはみんな自分で自分の世話をするやうに仕つけられて來たものだから、私の言ふことは勿論、エリーダの言ふことも聞かうとしません。

アルンホルム　奥さんの仰しやることでも？

ヴングル　えゝ、其のうへ、妻も、そんな事に立ち入るのを好むかどうかは分りません。あれにはまるで方角違ひの事ですから。（急に話を切つて）併し、こゝでお話ししやうと思つたのはそんな事ぢやありません。どうですか――あの事をも一度熟考して下すつたか？――昨晩申しあげた事を？

アルンホルム　お別れしてから、ずつとあの事しか考へてゐません。

ヴングル　で一體どうすれば好いでせうな？

アルンホルム　それはあなた、あなたの方が、お醫者さまですもの、私よりもよく御承知の譯です。

ヴングル　いや、それがね、醫者に取つては自分のひどく愛してゐる患者だと、却つて正確な斷定を下しがたいものですよ！そしてこれがま

た並の病氣でもなければ――並の醫者に分かるものでもなし、並の治療で行くものでもないのですからね。

アルンホルム　今日はどんな風ですか？

ヴングル　ちやうど今迄上であれの所にゐたのですが、至極落ちついてゐるやうに見えました。併しどんな氣分の時でも、其の奥の方に何か或るものが潜んでゐるやうで、それが何だか私に見當がつかない。そしてまた氣分が實に變り易くて――實に測りにくゝて――ひよい〳〵と、むら氣で動くのですからね。

アルンホルム　疑ひもなく頭が病的になられたせいですね。

ヴングル　全然さうでもないのですが、其の萠芽はあれの性質の中にあるのです。エリーダは海の人種に屬してゐます、それが根本なので

アルンホルム　といふと、精しく申せば？

ヴングル　君はあの荒海に生活してゐる人々が別な人種のやうに見えるのをお氣づきぢやありませんか？あれ等は殆ど海そのものゝ生活を自分等の生活にしてゐるやうです。海に大浪が立つても――潮の滿干があつても――それがみなあれ等の思想にも感情にも現はれて來るのです。そしてあれ等は決して他で辛抱することが出來ない。あゝ、もつと早くその事に氣がつかなくちやならなかつたのです。エリーダを海から引離してこゝへ連れて來たのは、あれに對して罪を犯したやうなものです！

アルンホルム　このごろさうお考へなさるやうになりましたか？

ヴングル　はあ、段々と。併し最初から分かつてゐなくちやならなかつたのです。いや、實は最初からさうとは思つてゐたのですが、自分で

それを承認しなかつたのです。たゞもうあれを愛してゐたため、何よりも自分の思ひ通りにしやうとしたのです。私は實に申譯のない程自分勝手な事をしましたよ！

アルンホルム　ふむ――誰でもそんな事情の下には、少々自分勝手になるだらうと思ひますね。けれども、ヴングルさん、あなたにそんな過ちがあるとは言へますまい。

ヴングル（不安さうにあちこちとあるき廻りながら）いや、あります、そしてそれ以來ずつとさうでした。元來私はあれよりも遙かに年を取つてゐるのだから、あれに對しては一人で父でも案内者でもあつて然るべきでした。あれの思想を發達させて明瞭にしてやる爲には全力を盡さなくちやならなかつたのです。所が不幸にして少しもそんな效果が見えなかつたのは、私に充分な力がなかつたからですね！も

つとも實際はあれをありのまゝ、そつくりして置く方が私には都合がよかつたのです。で、さうして置くとあれは段々惡くなつて來てとう〳〵何うしていゝか分からない事になりました。（一層低い調子で）そこです、私が當惑のあまり君にお頼みしやうと思つてお出でを願つたのは。

アルンホルム（愕いて彼を見つめ）へえ！そのために手紙をお寄越しなすつたのですか？

ヴングル　さうです、併しそれに關しては何も言はないで下さいよ。

アルンホルム　あなた――一體どうして――私がどんな役に立つとお考へなすつたのですか？私には解せません。

ヴングル　さうでせう、無論君には分りますまい。私が誤解してゐたのです。私はエリーダが嘗て君を思つたことがあつて、今でも内々心

を其の方に惹かれてゐるのだと想像しました。それで今一度君に逢はせて、國の事や昔の事を話させたら、恐らくあれの爲にいゝだらうと思つたのですよ。

アルンホルム　では奥さんの事でしたか、こちらで私を待つて、――待ち焦れてゐるものがあるとお手紙にあつたのは！

ヴングル　さうです、他に誰れがゐませう？

アルンホルム（早く）さうでせう〳〵。――併し私には分りませんでした。

ヴングル　其の筈です、今もいつた通りでね、私が全く方角違の事を考へてゐたのだから。

アルンホルム　それでゐてあなたは御自身を自分勝手だと仰しやる！

ヴングル　いや、私は大變な過ちをしたのだから、それを償はなくちやな

らないと思つてゐます。少しでも妻の心を落ち着ける事なら、どんな方法でも拒む權利はないと思つてゐます。

アルンホルム　あなたは、あの妙な男が奥さんの上に持つてゐる力を、どう説明しやうとなさるのですか？

ヴングル　ふむ、それはねえ――此の問題に説明を許さない方面があるかも知れない。

アルンホルム　何か到底説明し難いものがあるとおつしやるのですか？全然説明し難いものが？

ヴングル　兎に角、さしあたり説明しがたいものですよ。

アルンホルム　あなたはさういふものをお信じですか？

ヴングル　信するでも信じないでもありません。私には單に分からないといふだけです。だからそんなものは、其のまゝにして置くほか

はない。

アルンホルム　併し此の一點はどうですか――あの、子供の眼に關する、奥さんの不思議な奇怪な説は――

ヴングル（熱心に）私はあの眼の事なんぞ少しも信じはしません。あんな事は信じやうとも思ひません！あれは妻の純然たる空想に過ぎません。

アルンホルム　昨日お逢ひなすつた時その男の眼を氣をつけて御覽でしたか？

ヴングル　えゝ、勿論見ましたよ。

アルンホルム　で少しも似た所は見えませんでしたか？

ヴングル（避けるやうに）ふむ――實は何と言つていゝか分らないが、私が逢つた時は十分に明るくもなかつたし、それにエリーダから其の事

をいろ〳〵聞かされてゐたのですから――どうも先入主となつてゐて、偏見なしに見ることはむづかしかつたやうです。

アルンホルム　さうでせう、さうでせう、それは其の筈です。では今一つ此の點はどうですか、奥さんの恐れと不安の念がちやうどその妙な男の歸らうした時から起こつたといふ事は？

ヴングル　それもさ――やつぱり妻の空想で造りあげた夢を信じてゐるのですよ、一昨日からの事ですもの。あれの病氣は、今あれが言つてるほど、さう突然――さう急に起つたのぢやありません。それをあのリングストランドといふ若い男から、ジョンストン又はフリーマン――とか何とかいふもの――が三年前に歸りかけてゐた――三月の事だ――といふやうな話を聞いて、自分で自分を說きおとして、その氣病ひがちやうど同じ月から起こつたと極めて了つたのです

よ。

アルンホルム　で、さうではなかつたのですか？

ヴングル　決してそんな事はありません。病氣の徵候はもう、ずつと前からありました。もつとも、ちやうど――偶然の事で――やゝ激しい發作にかゝつたのが確かに三年前の三月でした――

アルンホルム　なるほど――！

ヴングル　もつとも、それも樣子を知つてゐればすぐ譯もなく說明の出來ることで――その頃あれが、――どういふ容態でゐるかといふ事さへ知つてゐればね。

アルンホルム　ではその徵候はどちらにでも取れるのですね。

ヴングル　（兩手をしぼつて）それでどうすることも出來ない！全く手段に盡きてしまつた！療治のしやうが無い――！

アルンホルム　何んなものでせう、一そお住まゐを變へる決心をなすつちや――何處かほかへ移つて御覽になつては？そしたら或はあの方に取つて一層居心地のいゝ所が見つかつて、萬事うまくは行きますまいか？

ヴングル　君、私がまだそれを言ひ出さないでゐたとお思ひかね？私はショルドヴックの方へ移らうと言つたのでよ。所があれはそれを望まない。

アルンホルム　それもいけないのですか？

ヴングル　いけない、そんな事をしたつて無益だと言ふのです、それもさうでせう。

アルンホルム　ふむ――さうお考へですか？

ヴングル　えゝ、それにね――も一歩進んで考へて見ると――私にも本

當はどうしてそれがやれるか分つてゐません。娘等の爲めを思へばそんな隅つこの邊鄙な所へ移るのがいゝ事だとはとても言へない。つまりあれ等は何處かいゝ土地に住んで少なくとも何等かの機會があつたら、いざといふ時の仕度のして置ける所にゐなくちやならないのですからね。

アルンホルム　仕度ですつて？あなたももうその事をそんなに御心配になつてゐるのですかね？

ヴングル　でも君、勿論ですよ、其の事も考へなくちやなりません！併しまた――一方には――あのかはいさうな病人のエリーダの事もある――！あゝ、アルンホルムさん――私は實際どちらから言つても、火水の間に立つてゐますよ！

アルンホルム　ボレッタさんの事は御心配に及びますまいね――（途切れて）

何所へあの方は――あの二人は行つたのでせう？

（開いてゐる戸の所に行き外を眺める。）

ヴングル　（ピヤノの傍で）あゝ、私はどんな犧牲でも喜んで拂ふ――あれら三人のためなら――たゞ何うしてそれをやればいゝか！

（エリーダ左方の戸口から入る。）

エリーダ　（早口にヴングルへ）今朝は外出なすつちやいけませんよ。

ヴングル　あゝ〳〵行かないとも。一緒に家に居るさ。（寄つて來るアルンホルムを指して）だがお前まだこちらへ御挨拶をしないね？

エリーダ　（振り向き）おや、アルンホルムさん、そこにいらつしたの？（手を差し延べて）お早う御座います。

アルンホルム　お早う御座います奥さん。今日はまだ、いつものやうに海水浴にはいらつしやらないんですか？

エリーダ　どうして〳〵、今日はそんな事を考へちやゐられないんです。まあちよつとおかけなさらない？

アルンホルム　有難う、又後ほど――（ヴングルを見て）お庭でお嬢さん達にお目にかゝる事にしてありますから。

エリーダ　どうですか、庭にゐますか知ら。あの子等つたら何所へ行くのだか少しも知れやしませんから。

ヴングル　さうさ、多分池の近所にゐるだらう。

アルンホルム　見つかるだらうと思ひます。

（うなづいて外廊を通り庭に下り、右手に去る。）

エリーダ　何時でせう、あなた？

ヴングル　（懐中時計を見て）十一時少し過ぎてゐる。

エリーダ　少し過ぎてゐる。そして今夜の十一時か十一時半にはあの

流船が來る。あゝこれが通り越して了つたら！

ヴングル（更に近く寄つて）エリーダや、私は一つお前に聞きたい事があるがね。

エリーダ　何？

ヴングル　一昨日の晩――あの見晴の上で――お前は此の三年間何度となくあの男をまざ〳〵と眼の前に見たと言つたね。

エリーダ　えゝ、見ました。確かに見ました。

ヴングル　ふむ、併しどんな風に見えたのかい？

エリーダ　どんな風に見えたかつて？

ヴングル　つまりね、お前が眼の前に見たと思つたとき、その男はどんな樣子をしてゐたかといふのさ。

エリーダ　だつて、あなた――あなたはもう御自身でその男の樣子を御

存じぢやありませんか。

ヴングル　では、お前が見たと思つた時も、あの通りに見えたのかい？

エリーダ　えゝ、さうです。

ヴングル　昨夜實際に見た、あの通りに？

エリーダ　えゝ、あの通りに。

ヴングル　では、どうしてあの時すぐに、それとお前に見分けがつかなかつたのだらう？

エリーダ（愕いて）見分けがつきませんでしたか？

ヴングル　さうさ。お前自身で後にさう言つたぢやないか？あの他國人が誰れだつたか最初は見分けられなかつたつて。

エリーダ（感じて）さう、それは全くその通りねえ！不思議ぢやありませんか？すぐ見分けられなかつたなんて！

ヴングル　唯その眼で分かつたとお前は言つたね――あの眼で！あの眼で！

エリーダ　えゝ、さうです――

ヴングル　だつて、お前は見晴の上で、さう言つたぢやないか？いつも十年前に別れた時そつくりの姿で、現はれたつて。

エリーダ　そんな事を言ひましたか？

ヴングル　然。

エリーダ　ぢや、その頃も大體今のやうな樣子をしてゐたのでせうよ。

ヴングル　いや、お前が一昨日の晩、歸り途で話したのはまるで違つてゐたよ。十年前には鬚は無かつたと言つたし、着物も全く違つてゐたらしい。それから眞珠の入つた胸飾りのピンはどうした？昨日は何もそんなものを着けてゐなかつたよ。

エリーダ　さう着けてゐなかつたのね。

ヴングル　（導れるやうに見て）だからエリーダや、少し考へて御覽。多分お前はブラット、ハムメルで別れた時、その男がどんな風をしてゐたか想ひ出せないのだらう？

エリーダ　（考へて見るやうに一寸眼を閉ぢて）十分はつきりとは想ひ出せません。さうです――今日はちつとも想ひ出せません。不思議ぢやありませんか？

ヴングル　そう不思議でもないよ。新しい生きた姿が眼の前に現はれて古いのを掻さ消して了つて、もう見えないやうにしたのだ。

エリーダ　さう思つて、あなた？

ヴングル　あゝ、そしてそれがまたお前の病的な色々の空想をも掻き消して呉れる。だから實體が現はれるといふ事はいゝ事だ。

エリーダ　いゝ！あなたはそれをいゝ事だと御覽なすつて？

ヴングル　さうさ、實體が現はれゝば救ひになるかも知れない。

エリーダ（長椅子に腰を下して）あなた――此處へ來てかけて下さいな。私考へてる事をすつかり話さなくちやなりませんから。

ヴングル　あゝ、どうか、エリーダや。（卓子の他の側の椅子にかける。）

エリーダ　私たちには――實際非常な不幸でしたのねえ。――人も多からうに、斯うして私たち二人が一緒になるなんて。

ヴングル（愕く）何だと？

エリーダ　さうですとも、つまり――當然の事ですよ。不幸に終るほかは無かつたのですよ。――私たちが一緒になつた方法を考へて見ると尙さらさうです。

ヴングル　方法がどうして惡い――？

エリーダ　聞いて下さい、あなた――此の上もう私たちは自分を僞つたり――お互に僞つたりしてやつて行く必要はないのですよ。

ヴングル　私達がさうしてゐるだらうか？僞るつて？

エリーダ　えゝ、僞つて。でなければ少くとも――事實を隱してゐるのです。交り氣のない正味の事實といふのは――あなたが出向いていらつしやつて――私を買ひ取つてお了ひなすつたのです。

ヴングル　買ひ取つた――！お前――買ひ取つたつて？

エリーダ　あゝ、私だつてちつともあなたよりは善くはなかつたのです。其の取引に同意して、出かけて行つて、自分の身をあなたに賣つたのですもの。

ヴングル（深く心若しげに妻を見て）いふ氣かい？

エリーダ、お前ほんとうにそんな事を

エリーダ　だつて、他に言ひやうはないでせう？　あなたは家の中の空になつたのが堪えられなくて、新しい妻をお探しなすつたのです――

ヴンゲル　それから子供等のために新しい母を、エリーダや。

エリーダ　それもでしたらう――言はゞついでにね。もつとも――あなたは、私といふものが母となるに適するやら、適しないやら、少しも御存じなかつたのです。たゞ私に逢つて、一度か二度お話なすつたばかりで私に思ひついて、そして――

ヴンゲル　然、まあ何とでもいゝやうに言ふがいゝ。

エリーダ　それから私は、私として――どうする事も出來ない、頼りのない一人ぼつちでした。ですから、その取引に飛びついたからと言つて、少しも無理は無いぢやありませんか――あなたがいらして、一生私の身を支へてやるとお申し出しなすつたのですもの。

ヴンゲル　私はね、エリーダや、決してさうは思はなかつたよ。財産と名のつくものも少しはあるから、來て私や子供と一緒に暮しては呉れまいかと、むき出しに聞いたばかりさ。

エリーダ　はあ、さうでした。けれど私がそれを承知しちやならなかつたのです！　何んな價がつかうと、決して承知しちやならなかつたのです！　決して自分の身を賣つちやならなかつたのです！　そんな事よりか、どれ程卑しい勞働でも――どれ程ひどい貧乏でも――自分の自由意志で――自分の選んだ道に行くのが優でした！

ヴンゲル（立ち上り）それでは、此の五六年一緒になつてゐたのがお前に取つては全然値打のないことだつたのか？

エリーダ　あゝ、さうお取んなすつちやいけない、あなた！　勿體ないほどあなたからは親切にして貰ひました。けれど私があなたの所へ來

たのは自分の自由意志でなかつたのです――それが要點ですよ。

ヴングル（エリーダを見て）お前の自由意志でない？

エリーダ　えゝ、私があなたに一生を任せたのは、私自身の自由意志ぢやなかつたのです。

ヴングル（柔かに）あゝ、考へて見ると――昨日あの男が其の言葉をつかつたね。

エリーダ　すべてあの言葉の中に籠つてゐるのですよ。あの言葉が私に新しい光りを見せて呉れて事柄がはつきり分かるやうになりました。

ヴングル　どういふ事が分かつたか？

エリーダ　私達二人が一緒になつてゐた生活は――ほんとうの結婚ぢやないといふ事です。

ヴングル（心苦しげに）それはお前の言ふ通りだ。私たちの現在の生活は全く結婚ぢやない。

エリーダ　過去の生活だつてさうです、ずつとさうです、始めからさうなのですよ。（前方を眞直に見て）あの最初の――あれが實際本當の結婚だつたのかも知れない。

ヴングル　最初の？どの「最初」だといふのか？

エリーダ　私の――あの男との。

ヴングル（呆れてエリーダを見る）私には少しも分からない。

エリーダ　ねえ、あなた――お互に偽り合つてゐてもいけないし、自分で自分を偽つてゐてもいけないわ。

ヴングル　そりやそうだ、勿論さうだ！けれども、それぢや何うするか？

エリーダ　ねえ、さうぢやありませんか――到底遁れられない事でせう

？――自分の隨意で結んだ約束なら、どこまでも結婚と同じ力があるのですから。

ヴングル　どうして、そんな事が――？

エリーダ（激して立ち上り）あなた！別かれませうよ！

ヴングル　エリーダ――！エリーダ――！

エリーダ　さうです、さうです――別かれませう！どうしても、つまりはそれより他にないのですから――二人でこゝまで來た以上は。

ヴングル（抑へた熱情で）あゝ、到頭そこまで來たか。

エリーダ　來なくちやならなかつたのです。他に道はないのですよ。

ヴングル（悲しげに見て）そんな風にして、毎日一緒に接んでゐても、お前は私のものにならなかつたのだ。嘗て一度も私のものになり切らなかつた。

エリーダ　あゝ、あなた――どうかしてあなたを愛することが出來たらねえ！私、心からそれを望んでゐるのですよ！どんなに優しくして上げてもいゝあなたですよ！けれども私にははつきり感じられますの、――それが到底出來ない事だと。

ヴングル　ぢや離緣しろといふのか？離緣――正式な法律上の離緣、――それがお前には入用なのか？

エリーダ　まあ、あなたは少しも私を理解して下さらないのね。私が言つてゐるのは、形式の事なんかぢやありません。そんな上部の事に拘らつてゐるのぢやありません。私の望むのは、私達二人が銘々の自由意志で、お互に自由になる相談がしたいといふのです。

ヴングル（氣持惡しげに頷く）取引を無効にする――さうだ。

エリーダ（熱心に）さうなの！取引を無効にするの！

ヴングン　そしてその後は？エリーダその後は？お前は私達二人の將來の事を考へたか？私たちの生活はどんな風になるだらう――お前のも私のも？

エリーダ　それはなるやうになるよりほかありません。未來は未來でいゝやうになつて行きます。お願ひしてゐる事が――その方が大事なのですよ！私を自由にして下さい！今一度私にすべての自由を與へて下さい！

ヴングル　エリーダ、――それは私に取つて恐しい要求だよ。とにかく少し落ち着いて考へてから極りをつけやう。もつと根本から此の事は相談をしやう。それからお前も、自分のしてゐる事を反省して見る時間がいらう！

エリーダ　けれどそんな事で無駄にする時間はありません。今日すぐに私の自由を返して下さらなくちやならない！

ヴングル　何故、今日さ？

エリーダ　あの人の來るのは今夜ですもの！

ヴングル（びつくりして）やつて來る！あの男が！あの他國人がそれに何の關係があるのか？

エリーダ　私、全く自由な身になつてあの人に逢はうと思ひますの。

ヴングル　で、何を――それから爲やうといふのだ？

エリーダ　私は他人の妻だからとか――選擇の自由がないからとか言つてそれを口實に逃げるのがいやだからですよ。そんな事をしてゐちや、自分の行ひに少しもきつぱりした所が無くなります。

ヴングル　選擇の自由だと！自由にお擇び、エリーダ！此の事について自由に擇んで呉れ！

エリーダ　はあ、擇ばなくちやなりません――自由にどつちかを擇ばなくちやなりません。あの人を一人行かすか――それとも私が一緒に行くか、私の自由でなくちやなりません。

ヴングル　お前は自分の言つてることが分つてゐるか？あの男と一緒に行つて！生涯の運命をあの男の手に任して了ふ！

エリーダ　あなたの手にだつて、生涯の運命を任したぢやありませんか！熟考した譯でもなく。

ヴングル　そりやそうかも知れない。併しあの男に！あの男に！全くの他國人に！殆ど何も知らない男に！

エリーダ　あなたをだつて、もつと知らなかつたのですよ。それでもあなたと一緒になりました。

ヴングル　少なくともあの時は、是れからどんな生涯に這入るのだか、相

應に分つてゐた筈だ。それが今度は？今度は？考へて御覽！今度は何が分つてゐるのか？何にも分かつちやゐない。誰れだかさへも――第一人間だかどうかさへ。

エリーダ　（前方を眞直に見て）それはさうです。けれどそこが私たまらなく物凄いのですよ。

ヴングル　ああ、さうだらう――

エリーダ　その爲めに私は、どうあつても從はなくちやならない氣がするのです。

ヴングル　（エリーダを見て）たまらなく物凄いために？

エリーダ　ええ、そればかりに。

ヴングル　（近くに寄り）ねえ、エリーダ――その物凄いといふのは、實際どういふ意味なのだ？

エリーダ　（考へて）物凄いといふのはね――何だか誘惑せられるやうで、同時に怖ろしいのですよ。

ヴングル　誘惑？

エリーダ　誘惑だと思ひます、重に。

ングル　（除かに）お前は海と生命が通つてゐるのだ。

エリーダ　海にも物凄いところがある。

ヴングル　お前だつてさうだ。誘惑せられるやうな、そして怖ろしいやうな所がお前にもある。

エリーダ　さう思つて、あなた？

ヴングル　私は今まで實際お前を知らなかつた。根本から知ることが出來なかつた。それが今やつと分りかけて來たよ。

エリーダ　ですから私を自由にして下さらなくちやなりません！あなたやあなたの家と私との關係を、すべて切り放して下さい！私はあなたが考へてゐらつしやるやうな女ぢやありません。それが今御自身で分つたでせう？さあこれで、私たちはお互に了解し合つて別れることが出來ます――銘々自分の自由意志で。

ヴングル　（沈んで）恐らくそれが二人の爲めに一番いゝだらう――別れるのが。併しさうは言つても、私にはそれが出來ない！私に物凄い思ひをさせるのは、お前だ、エリーダや。誘惑――それが何よりもお前なのだ。

エリーダ　さうでせうか？

ヴングル　今日一日を迷はないで過ごしたいものだ――冷靜によく考へてね。私は今日はお前を自由にして出て行かすことが出來ない。そんな事をしてはならない――お前のためだ、エリーダ。私はお前

を保護するのが、私の權利だとも義務だとも信ずる。

エリーダ　保護？何に對して私を保護して下さるのですか？私をおびやかしてゐるのは、何も外からの暴力や亂暴ぢやありません。物凄い力はもつと深いところにゐるのですよ。物凄いと言つてもたゞ私自身の心の中の誘惑に過ぎないのですから、どうしてあなたがそれに對抗なさることが出來ませう？

ヴングル　それに負けないやうにお前に力を添へて助けてやることは出來やう。

エリーダ　えゝ――若しそれに負けないとする氣があつたらね。

ヴングル　その氣はないのか？

エリーダ　あゝ、そこが私に分らないのですよ！

ヴングル　今夜すべて―極まるだらうよ、エリーダ――

エリーダ（叫んで）えゝ、ねえ――！最後の極まりが、もうすぐつくのです！生涯の極まりが！

ヴングル　――そして明日は――

エリーダ　えゝ、明日は！私の本當の未來は壞れてゐるかも知れません！

ヴングル　お前の本當の――？

エリーダ　完全な自由の生活は壞れて了つて――私に取つても、それから多分あの人に取つても壞れて了つて！

ヴングル（腰を捉え低い調子で）エリーダ――お前はあの他國人を愛してゐるのか？

エリーダ　私が――？あゝ、どうして分りませう！私はたゞ物凄いと思ふ一心で、そして――

ヴングル　――そして――？

エリーダ（身を振り放して）――そして何んだか私の家はあの人と一緒の所のやうな氣がします。

ヴングル（うなだれて）分りかけて來た。

エリーダ　で、どんな助けを、どんな療治をして下さらうといふのですか？

ヴングル（悲しげに見て）明日は――あの男が居なくなるだらう。するとお前の災難もなくなるだらうし、その時お前を自由にして行かせてやる。取引を帳消しにしやうよ、エリーダ。

エリーダ　あゝ、あなた――！明日では――もう遲いでせうよ。

ヴングル（庭の方を見やり）子供等が！子供等が――！少くともあれ等だけには――今はねえ。

（アルンホルム、ボレッタ、ヒルダ、及リングストランド庭に現はれる。リングストランドは家に入らないで、別れを告げて左方に入る。他の人々は室に這入つて來る。）

アルンホルム　あゝ、どうです、私達は大計畫を立てましたよ――

ヒルダ　今晩みんなで入江へ乘り出してね――

ボレッタ　いけない、いけない、默つておいで！

ヴングル　私達も計畫を立てたよ。

アルンホルム　あゝ――さうですか？

ヴングル　明日エリーダはちよつとショルドヴィックへ行くのです。

ボレッタ　旅行して――？

アルンホルム　奥さん、それが何よりですよ。

ヴングル　エリーダは又家へ歸りたいのです、海の家へ。

ヒルダ（エリーダの方へ小走りに走り寄つて）あなた、旅行なさるの？行つて了ふのだよ！

エリーダ（愕いて）何ですよ、ヒルダ！どうしたのさ？

ヒルダ（驅繕ふて）何でもないの、何んでもないの。（振り返り小聲で）是非いらつしやいよ！

ボレッタ（心配げに）お父さん、あのね――あなたもいらつしやるのでせう――ショルドウィックへ！

ヴングル　いや、私は行かないよ！たゞ折々行つて見ることになつて――

ボレッタ　そしてまたお歸りなさるの――？

ヴングル　あゝ、歸るとも――

ボレッタ　――それも折々、でせうね？

ヴングル　お前、さうするほかはないよ。（歩み去る）

アルンホルム（さゝやく）後に話したいことがありますよ、ボレッタさん。

（ヴングルの方に行き。低い聲で戸口の所で話す。）

エリーダ（柔かくボレッタに）ヒルダはどうしたのだらう？ひどく氣を腐らしてるやうね！

ボレッタ　ヒルダが不斷から焦れてゐるものがあるのですよ、あなた氣がつきませんか？

エリーダ　焦れて？

ボレッタ　あなたが此の家へいらつしてからずつと！

エリーダ　氣がつかないの――何だらう？

ボレッタ　唯一言、あなたから優しい言葉を。

エリーダ　あゝ――！私の生涯の仕事がこゝにあるのか知ら。！

（頭の上で兩手を握り、動かずに前方を見つめてゐる。思想や氣分の紛亂してゐ

るのに苦しむ如く。）

（ヴングルとアルンホルムは咽き合ひ乍ら前の方へ出て來る。）

（ボレッタは右手の隣室を覗き、その戸を廣く明け放つ。）

ボレッタ　さあ、お父さん――御飯になりましたから、――

ヴングル　（強ひて胸を抑へて）あ、さうかい？よし〳〵。アルン、ホルムさん、おいでなさい！一つ別れの盃でも酌みませう――「海の夫人」とねえ。

（人々右手の戸の方に行く。）

第五幕

ヴングル家の庭の片隅、鯉池の邊り。夏の夕暮の光が黑んで行く。アルンホルム、ボレッタ、リングストランド及ヒルダ短艇を入江の岸に沿うて漕ぎ乍ら左手から現はれる。

ヒルダ　ほら、此處からだとすぐ飛び上れてよ！

アルンホルム　いけない〳〵、お止しなさい！

リングストランド　僕にや飛べませんよ、ヒルダさん。

ヒルダ　あなたも飛べなくつて？アルンホルムさん。

アルンホルム　私は御免だ。

ボレッタ　浴舍の段々のところから上りませう。

（皆々右の方に漕ぎ出して行く。）

（此の時、バレステッド樂譜と佛蘭西式角笛とを携へて右手から路に現はる。短

艇にぬる人々に挨拶し、振り返つて話をする。先方の答は次第々々に遠く聞こえる。）

バレステッド　何んですつて？――さうです、無論イギリス船の爲めにですよ。今年の最後の航海ですからね。併しあなたがたも音樂が聞きたけりや、餘り長くなつちやいけませんよ。（叫んで）何ですと？（頭を振つて）何んだかちつとも聞えないや！

（エリーダ頭にショールをかけて、左手から入り來たる、ヴングルその後から續く）

ヴングル　だが、お前、時間はまだたつぷりあるよ。

エリーダ　いえ〳〵もうありません！あの人が何時來るかも知れない。

バレステッド　（外垣根の所で）やあ、先生、今晩は！奥さん今晩は！

ヴングル　（氣がついて）あ、君でしたか？今晩又音樂があるのですか？

バレステッド　はあ。音樂會が一つ出來るだけのことをやつて見やうといふのです。此の節はお祭りつづきで、今夜はイギリス人のためにやるのですよ。

エリーダ　イギリス船！もう見えて來ましたか？

バレステッド　まだですが、入江を下つて來てゐます、あの島の間を。もうすぐ、おやつといふ間に着きますよ。

エリーダ　あゝ、――それですよ、私の言ふのは。

ヴングル　（半ばエリーダに）是れが最後の航海で、今夜が過ぎると、もう來なくなる。

バレステッド　濕つぽいお話ですな、先生。だが先も申したやうに、あの船のために音樂會を開かうといふのも、全く其の心持ですよ。さうですとも〳〵！樂しい夏が段々終りに近づいて來て、芝居の文句ぢやないが「やがて海峽は見渡す限り氷にとざされん」

エリーダ　見渡す限り氷にとざされて――ねえ。

パレステッド　考へると悲觀して來ますね！長い間愉快な夏の子になつてゐたのが、之れからまた薄暗い日の中で過ごさなくちやならないと思ふと、辛いことですよ。もつとも、それも初めだけですがね、何故といふと、人間て奴はアックリーアッークリマタイズして行けるものですからね、つまり其の季候に同化するのでさあ、奥さん。全くですよ。（禮をして左方に去る。）

エリーダ　（入江を見渡して）あゝ、斯うしてゐるあひだの苦しいこと！生涯の極りがつくのだと思ふと、此の半時間がもどかしくつてしやうがない！

ヴングル　ではお前まだあの男と直接に話をする積りかい？

エリーダ　是非自分で話さなくちやなりません、自分の自由意志でどちらかを擇ばなくちやならないのですから。

ヴングル　お前にその自由はないよ、エリーダ。自由に擇ぶことは許しません――私がそれを許さない。

エリーダ　あなたの力でそれを止めることは出來ません。あなたに限らず、誰れにだつて出來ない事です。それは、私があの人と一緒に行つて――生涯をあの人に任せるといふ場合に、それをお禁じなさることは出來ませう。若し私がさういふ擇び方をしたとすればね。つまり私の意志に逆らつて、私の體を無理やり此處へ引き留めるのですから、それならあなたに出來ませうさ。けれど私が魂の奥で自由に――あなたよりもあの人を擇んだとすれば――それがどうあつてもさうしか思はれない場合にはそれを止めることは出來ません。

ヴングル　なる程それはさうだ。それを私が止める事は出來ない。

エリーダ　それに私行くのを拒む理由もないのですよ！こゝでは何一つ私を引き留めて放さないやうなものがないのですから。あなた私は此家に少しも根をおろしてゐないのですよ。子供は私のものぢやなし――あれらの心持がね、どうしたつて私のものにならないのです。若し私が出て行くとすれば――今夜あの人と一緒に行かうが明日一人でショルドウックに立たうが――どちらにしても私には鍵一つ渡して行く世話もなければ指圖一つ殘して行くこともありません。何一つ私がする事はないのです。そんな風にして、私は少しも此の家に根をおろしてゐませんの。この家へ來た初めから何事に限らずまるで除けものになつてゐたのですもの。

ヴングル　お前が自身でその方を望むのだ。

エリーダ　いゝえ、さうぢやありません。私はどちらを望むといふこともなかつたのです。たゞ何でも私が來たときのままに、そつとして置いただけ。却てあなたこそ――誰れよりも――そんな風にするのをお望みなすつたでせう？

ヴングル　私はたゞお前のためとばかり思つてやつたのだ。

エリーダ　えゝ、それはね、私がよく知つてゐます！けれどさういふやり口だと、報ひがついて來ます、自分で自分に復讐をするやうになります！そんな風にして私には、もう自分を結びつけて呉れるものも支へてくれるものも――助けて呉れるものも全くなくなつて、私たち夫婦の生活に一番貴い寶でなくちやならないものさへ、少しも私を引き留める力にならなくなりました。

ヴングル　それはよく分つてゐるよ、エリーダ。だから明日はお前が元

の自由に歸れる。その後はお前自身の生活に戻られるのだ。

エリーダ　あなたはそれを私自身の生活だと仰しやるのね！どうしてそんな事がありませう？私自身の本當の生活は、あなたと一緒になつた時に壞れて了ひました。（恐れと不安で兩手を握りしめ）そして今――――今夜――半時間の内に――私が振り棄てた人がやつて來る――その人の眞實に對しては、私だつて少しも不實な事をしちやならなかつたのですよ！いよ〳〵其の人がやつて來て私に――之れつきり最後だと言つて――新しい生涯を始める機會を與へやうとする――私自身の本當の生活を――あの引きつけられるやうな恐しい生活を――そして私はどうしてもそれを思ひ切ることが出來ない！私自身の自由意志でも思ひ切れない！

ヴングル　だからお前には夫であり――醫者である私がゐて――お前の手から其の力を取り出して、お前のためになるやうに取計らふ必要があるのぢやないか？

エリーダ　あなた、それはよく分かつてゐますよ。時々は私だつて無論さう思ひます、あなたの翼の下にしつかりと身をひそめて、あの恐ろしい誘惑の力を防いだら、どんなにか平和で安全だらうとは思ひますのよ。けれど私にはそれが出來ない。出來ない、出來ない――どうしても出來ない！

ヴングル　おいでエリーダ――少し散歩しやうぢやないか？

エリーダ　さうしたいのですけれど、私、出るわけに行かないのですよ。あの人が私に、こゝで待つてゐなくちやならないと言つたでせう？

ヴングル　まあ、おいで。まだ充分時間があるから。

エリーダ　さうでせうか？

ヴンクル　大丈夫、充分だ。

エリーダ　ぢや少し歩きませうか。

（二人前方右手に出て行く。同時にアルンホルムとボレッタが池の向岸に現はれる。）

ボレッタ　（出て行く人影を認めて）御覽なさいな――？

アルンホルム　（柔らかに）しつ！打つちやつてお置きなさい。

ボレッタ　此の三四日のあいだ、あの二人の仲にどんな事が起こつてたか、あなたに分かりますか？

アルンホルム　何か氣づきましたか？

ボレッタ　氣づいたの――！

アルンホルム　何か變つた事を？

ボレッタ　えゝ、いろんな事を。あなたには分からなくて？

アルンホルム　さうさね、よくは分かりませんが――

ボレッタ　あら、きつと分かつてゐるのよ。たゞそれをおつしやりたくないのでせう？

アルンホルム　少し旅行をなさるといふのが、岐度おつ母さんに利くだらうと思ひますね。

ボレッタ　さうお思ひなすつて？

アルンホルム　えゝ、あの方が時々少しづゝ何處かへ出られると、すべての方面に都合がいゝだらうと思ひますよ。

ボレッタ　明日ショルドウィックへ行つたら屹度もう歸らないでせうよ。

アルンホルム　だつて、ボレッタさん、どうしてそんな事をお思ひですか

ボレッタ　さうに違ひないと思はれますわ。見てゐて御覽なさい！きつと歸つて來ないから。とにかく、ヒルダと私が家にゐる間はね。

アルンホルム　ヒルダさんも？

ボレッタ　さうですね、ヒルダはそれ程でないかも知れません。あれはまだ子供ですからね。其の上、あの子はたしかに心の中ぢやエリーダさんを崇拜してゐるのですよ。けれど私とはさう行かないでせう？私とさう年の違はない繼母なのですから――

アルンホルム　ねえ、ボレッタさん、――あなたが家を出られるやうになるのも、さう遠くはありますまいよ。

ボレッタ（熱心に）さうでせうか？あなたその事をお父さんに話して下すつて？

アルンホルム　えゝ、それも話して見ました。

ボレッタ　で――父はどう言ひましたか？

アルンホルム　ふむ――お父さんはね、丁度今、他の考へに氣を取られて

ゐらつしやつて――

ボレッタ　えゝ、えゝ、その事ですよ、私がさつき言つたのは。

アルンホルム　併しこれだけの事は探つて見ましたよ、つまりお父さんの方から補助を貰はうとお思ひなすつちやいけないといふ事です。

ボレッタ　いけない？

アルンホルム　お父さんはお家の現狀をすつかり私に打明けて、到底そんな事は出來ない相談だといふことを明かになすつたのです。

ボレッタ（苦めるが如く）まあ、それでゐてあなたは、平氣でいゝ加減な事を私に言つてらつしやつたのね？

アルンホルム　決してさうぢやないのです、ボレッタさん。家を出ると出ないは、全然あなた自身にあることです。

ボレッタ　私にあるのですつて？

アルンホルム　世間へ出て行つて、心で望んでゐた事を學ぶのもです。こゝで斯うして焦れてゐる事に這入つて行くのもです。もつと幸福な中であなたの本當の生活をして行くのもです？ボレッタさん、どうお思ひです？

ボレッタ（兩手を握り合せて）あゝ、ほんとうにねえ――！けどそれは到底出來ない事ですわ。お父さんにさうして下さる力もなく、其の氣もないとしたら――。私が賴る人は世界中尋ねたつて他にないんですもの。

アルンホルム　あなたは其の補助を昔の――以前の家庭教師から受けて下さる氣はありませんか？

ボレッタ　あなたからアルンホルムさん？ほんとうにあなたが――？

アルンホルム　賴りになりますとも。喜んで助言でもお手傳でもしますよ。私にお任かせなさい。ぢや私の申出を受けて下さるか？承知して下さいますか？

ボレッタ　承知しますつて？家を出て、――世間を見たり――實際の知識を廣めたり――私が樂しみにしてゐた、夢のやうな望みが叶ふのでせうか――？

アルンホルム　えゝ、それがみんな、あなたの決心一つで出來るのです。

ボレッタ　で、あなたが其の何といつていゝか分からない程の幸福に私を導いて下さるやうに力を貸して下さるのですね！あゝ――けれどねえ――私、他人からそんな事をして戴いて好いのか知ら？

アルンホルム　一向差支ありませんとも、ボレッタさん、私からなら、どんな事でも御遠慮はいりません。

ボレッタ（彼の兩手を取り）えゝ、實際私もそんな氣がしますのよ。どうい

ふ譯だか分からないけれど、――（感情が高まつて叫ぶやうに）あゝ私たゞ嬉しくて――たゞもう幸福で一度に泣いたり笑つたりしたいやう！あゝ――考へても御覽なさい、とう〳〵世の中の學問が出來るのですもの。とても私には其の機會が無いのぢやないかと心配してゐたのに。

アルンホルム　そんな心配はいらないが、ボレッタさん、此處で是非明らさまに聞かして下さらなくちやならない事があります。それはね――何か繫累があつてあなたを此の土地に引き留めはしないかといふ事です？

ボレッタ　繫累？いゝえ、何もありません。

アルンホルム　全くありませんか？

ボレッタ　はあ、何も。それはね――無論、父は一種の――繫累ですし、ビ

ルダだつてさうですけれど、併し――

アルンホルム　それはさうでも――お父さんは、どうせ、早いか遲いか、別かれる人でせうし、ヒルダさんだつていつかは自分自身の生活の道を歩まれる人でせう、たゞ時の問題だけです。けれども、其のほかには、何にもあなたを束縛するものはありませんか？何か結婚約束といふやうなものは？

ボレッタ　いゝえ、そんなものはありません。その事なら、私、何所へでも自由に行けますわ。

アルンホルム　それでは、そんな風なら、ボレッタさん――私と一緒にいらつしやい。

ボレッタ（自分の兩手を握りしめて）あゝ、私――ほんとうに嬉しうございますわ！

アルンホルム　一切私を信じて、私をたよりにして下さい。

ボレッタ　えゝ、私さうしますわ。

ボレッタ　そしてあなたの身の上や將來の事も、すつかり、安心して私に任せて下さるでせうボレッタさん？　さうなすつていゝでせう、え？

ボレッタ　えゝ〳〵、無論ですとも！　極まつてゐぢやありませんか？　疑ぐつてゐらしつて？　あなたは昔の先生ぢやありませんか――昔一度先生になつて頂いたことのある方ぢやありませんか？

アルンホルム　そのためばかりで言ふのぢやありませんよ。その方面には、さう重きを置いてゐません。併し――さう――とにかく、あなたが自由だとして――少しも繫累がないとすれば――聞きたいのですがね――あなた其の氣になつて呉れませんか――私と一緒になる氣に――一生涯？

ボレッタ（恐れて飛びのき）あゝ――何を仰しやるの？

アルンホルム　一生涯ですよ、ボレッタさん。私の妻になつて下さい？

ボレッタ（半ば獨語のやうに）いえ、いえ、いけない！　出來ない事です！　とても出來ない事！

アルンホルム　これがあなたに取つてそんなに出來ない事でせうか――？

ボレッタ　あなたの言つてらつしやるのは、そんな意味ぢやないのでせう、アルンホルムさん？（彼を見て）でなければ――それともあなた、何ですか、私のためにあんなに盡してやらうと仰しやつたのは、其の意味だつたのですか？

アルンホルム　まあ、ボレッタさん、落ついて私の言ふことをお聞きなさらなくちやいけない。あなたはびつくりしてお了ひなすつたやう

だ。

ボレッタ　だつてこんなお話を――あなたから伺ふのですもの――愕かずにはゐられませんわ。

アルンホルム　そりや御もつともです。無論あなたは御存じないでせう――御存じの筈はないが、私が今度出て來たのは、あなたのためだつたのですよ。

ボレッタ　あなたのこゝへゐらしたのが――私のため？

アルンホルム　えゝ、さうですボレッタさん。私はね、此の春お父さんからお手紙を貰ひました。――その中の文面で、私は一圖にさう思ひ込んで了つたのです――ふむ――あなたが元の先生を忘れないで、――たゞの友情といふよりも、も少し以上の想ひ出を持つてゐて下さるといふ意味にね。

ボレッタ　どうしてお父さんが、そんな事を書いたのでせうねえ！

アルンホルム　ところが、お父さんのおつもりは、全たくそんな意味ぢやなかつたやうです。けれども私に取つては、いつも心の中で、この土地にゐる若いお娘さんが、私の歸るのを待つてゐて呉れるといふやうな考に耽つてゐました――いや、まあ、じつとして聞いてゐて下さい、ボレッタさん！それでね――私のやうに、もはや青年の活氣の衰へたものに取つては、今言つたやうに信じたり――想像したりして見ると――それが非常に強く頭に殘るのです。で、あなたに對する若々しい嬉しい愛情が段々と心の中に生じて來て、是非今一度あなたに逢ひに來なくちやならないやうに思はれました。そしてあなたが私に對して持つてゐて下さると思つた感情を、私も持つてゐますと言つて了はなくちや濟まないやうな氣がしたのです。

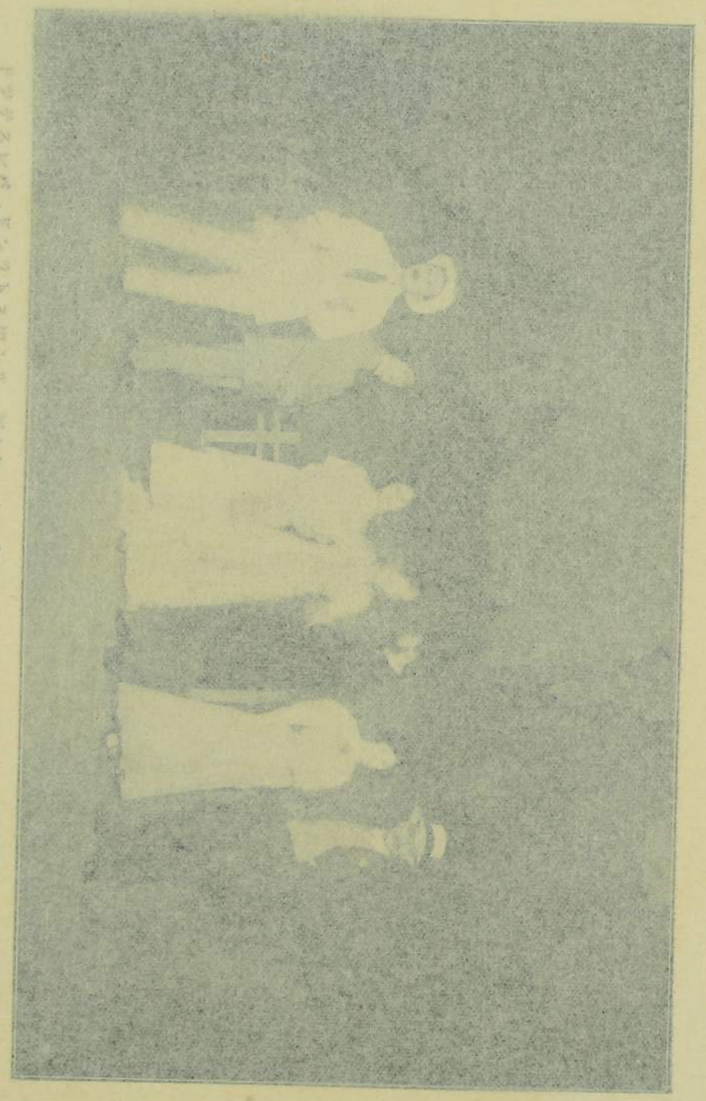
ボレッタ　ですけど、もう、さうでなかつたと分かつたのですもの！間違ひだと分かつたのですもの！

アルンホルム　そんな事は構ひません。あなたの姿は――私の心の中に殘つて――いつまでも此の行違ひから生じた愛情のために生きて浮んでゐるでせう。あなたにそれは分からないかも知れないが、事實さうなのです。

ボレッタ　私、こんな事にならうとは、夢にも思ひませんでした。

アルンホルム　けれども、さうなつて見れば――。ボレッタさんどうでせう？さう決心しては下さらないでせうか――私の妻になるやうに？

ボレッタ　あゝ、それは迚も出來ない事ですわ、アルンホルムさん。私の先生だつたあなたに！先生でない關係で御一緒にならうなんて、私



第五幕　エレーネ・ヴェンゲル・ゲーリッヒ　ルドルフ・ヴェンゲル・ゲーリッヒ

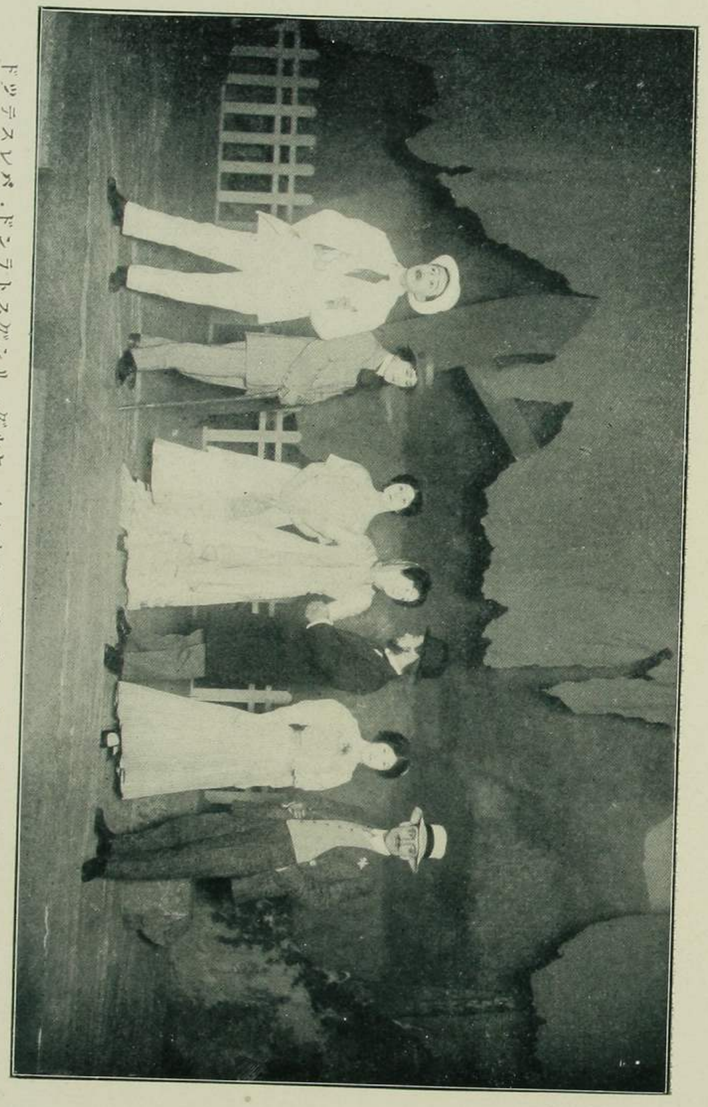
ボレッタ　ですけど、もう、さうでなかつたと分かつたのですもの。間違ひだと分かつたのですもの。

アルンホルム　そんな事は構ひません。あなたの妻は――私の心の中に殘つて――いつまでも此の行違ひから生じた愛情のために生きて浮んでゐるでせう。あなたにそれは分からないかも知れないが、事實さうなのです。

ボレッタ　私、こんな事にならうとは、夢にも思ひませんでした。

アルンホルム　けれども、さうなつて見れば――。ボレックさんどうでせう？　さう決心しては下さらないでせうか――私の妻になるやうに？

ボレッタ　あゝ、それは迚も出來ない事ですわ、アルンホルムさん。私の



第五幕　ドッデスレバ・ドンラトスゲシリ　ダルヒ・ムルホシルア・タッレボ・ルグシヴ・ダーリエ

には想像も出來ません。

アルンホルム　あゝ分かりました〳〵――あなたが本當にそんな事があつても、それは出來ないとお感じなさるのなら――それにして置いて私のあなたに對する關係は少しも變らない事にしませう。

ポレッタ　と仰しやると？

アルンホルム　勿論私はどんな事があつても、約束した事は變へません。どうにかしてあなたを家から出られるやうにして、世間を見させてあげませう、あなたが本當に望んでゐらつしやるものを學ばせてあげませう、獨立して安全に暮らして行けるやうに。そして其の先の事も、私が困らないやうにしてあげます。私をいつまでも、たしかな、變らない友人だと思つて、たよりにして下さい。決して間違はありません。

ボレッタ　あゝ――アルンホルムさん――今ぢやもう、そんな事も出來なくなりました。

アルンホルム　それも出來ないのですか？

ボレッタ　えゝ、さうお思ひぢやありませんか？あなたがあゝ言つてお了ひなすつて――私があゝお答へした以上――ねえ、あなたからそんな大變な御恩を受ける譯に行かないことは察して下さるでせう？私、あなたからは一文だつて頂けません、一文だつて、此の後は！

アルンホルム　ではあなたは、家に座つてゐて、本當の生活も知らないで過ごして構はないといふのですね？

ボレッタ　あゝ、それを考へると、たまらなくなります！

アルンホルム　あなたは世間を見やうといふ望みも打つちやるつもりですか？焦れてゐるとおつしやる事に携はる機會を、打つちやるつ

もりですか？世の中にはいろんな事がありますよ――それをあなたは少しも本當に了解し得ないでゐるのですね？考へて御覽なさい、ボレッタさん。

ボレッタ　さうです〳〵――あなたのおつしやる通りですよ、アルンホルムさん。

アルンホルム　その上――お父さんがゐらつしやらなくなれば――あなたは、たより無い一人ぼつちにおなんなさるかも知れない。恐らく他人に身を任せなくちやならない事になつて、――其の人といふのも――十中八九は――あなたの氣に入るやうな人ぢやないかも知れない。

ボレッタ　さうですとも――私だつてきつとさうなるだらうといふ事はよく知つてゐます――あなたのおつしやる通りですよ。けれど

やつぱり――！――それともひよつとしたら、つまりは――

アルンホルム　（早口に）はあ！

ボレタア　（半信半疑で見て）ひよとしたら、つまりは、それほど出來ない事でもないかも知れませんわねえ――

アルンホルム　何がですつて？

ボレッタ　私ね――ひよつとしたら――あの――あなたがおつしやつて下すつた事に御同意できるかも知れませんといふ事。

アルンホルム　といふと、ひよつとしたら、あなたが――？少なくとも眞實な友人としてあなたをお助けする幸福を私に許して下さるといふのですか？

ボレッタ　いえ、いえ、いえ！決してそんな事ぢやありません！それは到底出來ない事ですよ。いけないの――あなた――それよりか一そ

私の身をあなたに任かせますわ。

アルンホルム　ボレッタさん！ではあなた――？

ボレッタ　えゝ――私、さうした方が――いゝと思ひますわ。

アルンホルム　私の妻になつて下さる？

ボレッタ　えゝ、あなたがまだ――私でなくちやと思つてゐて下さるなら。

アルンホルム　思つてゐるなら――！（手を取つて）あゝ有難う、ボレッタさん、有難う！　あなたが言つてらつしやつた――最初の心配は――もつともだと思ひます。若しまだ十分にあなたの情が移らないやうだつたら、私がどんなにも勤めます。あゝ、ボレッタさん、私、實にうれしいと思ひますよ。

ボレッタ　そして私は世間も見られるし、世間の生活にも這入れるし。あなたそれを約束して下すつたわね。

アルンホルム　私、其の約束を守りますよ。

ボレッタ　で、私は、何でも望みのまゝに習へますのね。

アルンホルム　それから私は昔のやうにあなたの先生になりませう。あの頃の末のことを想ひ出すと――

ボレッタ（静かにうつとりとして）ねえ、さう思ふと――これで自由な身になつて――知らない世界へ出て行くのですもの！そして將來の事も心配がなくて、どうして喰べて行くかといふやうなみじめな苦勞もいらず――

アルンホルム　えゝもうそんな事に氣をつかふには及びません。ねえボレッタさん、さうなるとそれもいゝと思ふでせう？

ボレッタ　えゝ、よ御座んすわ。一番いゝ道ですわ。

アルンホルム（腰のまはりに腕をかけて）あゝ、どんなにか私たちの生活は、穏かな樂しいものになるだらう！そして二人はお互にたよりになり合つて平和に手固くやつて行きませうね、ボレッタさん！

ボレッタ　えゝ私にも段々それが。――私ほんとうにさう思ひますわ――一緒になつて行かなくちやなりませんわね。（右方を見やり、いそいで身を退いて）あゝ！どうぞ何も言はないでゐて下さいな！

アルンホルム　どうしたのです？

ボレッタ　あの、かはいさうな人が――（指して）そら、あそこに。

アルンホルム　お父さん――？

ボレッタ　いゝえ、あの、若い彫刻家よ。ヒルダと一緒にあそこを歩いてゐますわ。

アルンホルム　あゝ、リングストランドか。なぜ、あれの事を氣にするのです？

ボレッタ　あの人ねえ、それや弱くて病身なのですよ。

アルンホルム　さうでせうか、それとも自分でそんな風に想像してるのぢやないか？

ボレッタ　いゝえ、實際さうなの、もう長くは生きられないのよ。ですけど當人のためには却つてその方がいゝでせうよ。

アルンホルム　どうしてそれが當人のためにいゝのでせう？

ボレッタ　だつて――だつて、どの道さう大したものがあの人の腕で出來さうにも思へないからですよ。――さあ、みんな來ないうちに行きませう。

アルンホルム　さうしませう。

（ヒルダとリングストランド池の傍に出て來る）

ヒルダ　もし〳〵！私どもをお待ち下さる譯にはまゐりませんか？

アルンホルム　ボレッタさんと私は一寸お先へ。

（二人左手に出て行く。）

リングストランド（靜かに笑つて）これは面白い誰れも彼れも對になつて行きますね。いつも二人づゝで。

ヒルダ（二人を見送り）私誓つて斷言してやるわ、あの人姉さんを愛してゐるのよ。

リングストランド　さうでせうか？何かそんな風に思はれる事がありましたか？

ヒルダ　えゝえ、さうですとも。それが見えない譯はないぢやありませんか――あなたに眼さへあいてゐれば。

リングストランド　併しボレッタさんはあの方を愛しはしないと思ひますね。きつとさうですよ。

ヒルダ　えゝさうよ。姉さんはね、あの人を大變なお爺さんだと思つてゐるのよ。それから今に頭が禿げて了ふだらうと思つてるのよ。

リングストランド　いや、私はそんな事だけで言つたのぢやありません。どちらから見ても、あの方を愛しはなさるまいと思ふのです。

ヒルダ　どうしてそれがお分かり？

リングストランド　それはね、ボレッタさんが心で忘れまいと約束なすつた人が他にあるからです。

ヒルダ　たゞ心だけで？

リングストランド　えゝ、その人のゐない間は。

ヒルダ　あゝ、それはきつと、あなたね、姉さんが心で思つてるといふのは。

リングストランド　さうかも知れません。

ヒルダ　あなたにそれを約束したの？

リングストランド　えゝ考へて見て下さい――姉さんが約束して下すつたのですよ！併しそんな事を知つてる風なんかしちやいけませんよ。

ヒルダ　心配しなくてもいゝ事よ。私、墓場のやうに沈默を守つてよ。

リングストランド　それはどうも、實にありがたいと思ひますね。

ヒルダ　それから、今度あなたが歸つていらつしした時は――結婚約束になるのですか？姉さんと結婚するお積り？

リングストランド　いや、それはいけなからうと思ひます。結婚といふことは、私に取つちやまだ三四年、問題になりません。それかと言つて私が一人前になつた頃には、ボレッタさんは、もう少しお婆さんになり過ぎて、私に不適當だらうと思ひます。

ヒルダ　それでゐてあれにあなたの事を思はせてゐやうと仰しやるの

？

リングストランド　えゝ、それが大變私の助けになります、無論美術家としての私にです。それからあの方も別にこれといふ仕事を持つてらつしやるのでないから、そんな事は譯なく出來ます。それで私には實に有りがたいんですから。

ヒルダ　ぢや姉さんがあなたの事を此處で思つてるとさへ分かれば、群像彫刻が早く出來上るのですか？

リングストランド　はあ、さう思ひます。全體、世界のどこかで、若い、美しい無口な女が、誰れにも知らさないで思ひつゞけてゐて呉れるといふ事は――きつと、その――その――。まあ、何と言つていゝか分りませんがね。

ヒルダ　何でせう――痛快？

リングストランド　痛快ですつて？　あゝ、さうです。痛快です。それとも何かそんなやうなものです。（一寸見てゐて）あなたは實に活潑ですねヒルダさん。ほんとうにあなたは活潑です。私が又歸つて來たら、其のころあなたがちやうど、今の姉さんくらゐな年になつてゐつしやるでせう。きつと今の姉さんと似て來るでせう。それから心持も姉さんと同じやうに發達するでせう。言はゞあなたと姉さんとは――一體のやうになるに違ひありません。

ヒルダ　さうなるとあなたは滿足して？

リングストランド　はつきりは分かりませんが、そんなやうな氣がします。併しねえ――此の夏中は――今のまゝのあなたでゐて欲しいですね――そつくり今のまゝで。

ヒルダ　今のまゝの私が一番お好き？

リングストランド　えゝ、それが非常に好きです。

ヒルダ　ふむ――ではね――美術家として――あなたは、私がいつも薄い夏服を着てゐるのをいゝと思つて？

リングストランド　はあ、申分なくいゝと思ひますね。

ヒルダ　ぢや強い色が私には似合ふのですか？

リングストランド　はあ、私の趣味では、美しいと思ひます。

ヒルダ　けどねえ、あなた――美術家として――どうお考へなすつて、私が眞黑の着物を着たら？

リングストランド　眞黑の着物ですか、ヒルダさん？

ヒルダ　えゝ、全體を眞黑にするの。綺麗に見えるでせうか？

リングストランド　眞黑の着物は夏には向きませんね。併しさうでさへなければ、黑もきつとあなたに似合ひます。さうです、あなたの柄が

黑に適してゐます。

ヒルダ（前を見つめて）頸まですつかり黑にして、黑い襞に――黑い手袋で、長い黑いヴェールを後へ垂れて。

リングストランド　あなたがそんな風をなさると、私は畫家になりたくなりませう。そして憂ひに沈んでゐる若い美しい未亡人を畫いて見たくなりませう。

ヒルダ　でなければ、若い娘が結婚約束をした人に死なれて悲んでる所をね。

リングストランド　えゝ、さうだと、尙よくあなたに似合ひますね。けれども、まさかそんな風がしたいとは思はないでせう？

ヒルダ　どうですかねえ、けど痛快ですわ。

リングストランド　痛快？

ヒルダ　考へて見ると痛快よ、ねえ（急に左の方を指して）あら、あそこを御覽なさいよ！

リングストランド　（示された方を見て）あの大きなイギリス船ですね！丁度波止場へ着いたのです！

（ヴングルとエリーダ池の傍に現はる。）

ヴングル　いや、それはたしかだよ、エリーダ、お前が思ひ違ひをしてゐる！（他の人々を見て）おや、二人で此處にゐたのかい？船はまだ見えないやうですね、リングストランドさん？

リングストランド　あの大きなイギリス船ですか？

ヴングル　さうです。

リングストランド　（指し乍ら）彼處にもう着いてゐますよ。

エリーダ　あゝ――！さうだらうと思つた。

ヴングル　もう來てゐる！

リングストランド　さうですね、夜盗賊でも忍び込むやうに這入つて來たのですね――こつそりと音もたてないで――

ヴングル　君は埠頭へヒルダを連れて行つて下さい。急いでね！音樂を聞きたがつてゐるでせうから。

リングストランド　はあ、これから行かうと思つてゐたのです。

ヴングル　私達も後から行くかも知れません。すぐ行きますよ。

ヒルダ　（リングストランドに呼いて）又一組出來たわね。

（二人庭を通つて左手に行く。次の臺詞の間、遠く峽灣の方から音樂の吹奏が聞こえる。）

エリーダ　彼の人が來ました！もうこゝにゐる！さうです、さうです――私、感じで分ります。

ヴングル　お前は家へ這入つた方がいゝ。私獨りで逢はう。

エリーダ　おゝ――そんな事が出來るものですか！出來るものですか！（叫んで）あゝ――あなた、あの人が見えますか！

（他國人左手から入り來り垣の外の路に留まる。）

他國人　（禮をして）今晩は。さあ、歸つて來たよ、エリーダ。

エリーダ　さう、さう、さう――時刻が來たのねえ。

他國人　出發する用意が出來たか？それともまだかい？

ヴングル　君自身で見たら分かるだらう、あれが仕度をしてゐない事は！

他國人　旅行服だの鞄だの、そんなものは、心配するに及ばない。入用なものはすつかり船に用意して置いたからね。船室も一つ取つてある。（エリーダに）では、お前に聞くが、私と一緒に來る覺悟がついたか

お前自身の自由意志で私と一緒に？

エリーダ　（嘆願するやうに）おゝ、聞かないでゐて下さい！私をそんなに誘惑しないで下さい！

（船の鈴が遠くで聞える。）

他國人　さあ、乘り込みの第一鐘が鳴つてゐる。來るか來ないか、すぐ決めなくてはいけない。

エリーダ　（自分の兩手を握りしめて）決めなくちやならない！生涯の決定をつけなくちやならない！決めたらそれが最後になる！

他國人　それが最後だ。半時間たつともう間にあはないよ。

エリーダ　（おづ〳〵と疑はしげに彼を眺めて）一體どうしてさう執こく私に附きまとふのでせう？

他國人　私たち二人はお互に離れられないものだといふことを、お前は

私ほどに感じないのかい？

エリーダ　あの約束があるからと言ふのですか？

他國人　約束なんぞで、人が縛られるものぢやない、男でも女でも。若し私が執こくお前に附きまとふとしたら、それは――それはさうしか出來ないからだ。

エリーダ　（顔へ乍ら柔かに）何故もつと早く來て下さらなかつたのでせう？

ヴングル　エリーダ！

エリーダ　（感情が激して）おゝ――どうしてまあ、斯んなにまで私を誘惑して、むりやり引き入れやうとするのだらう――あの不思議なものの中へ！海の力が殘らず一つに集まつて、私の上に押し寄せて來る。

（他國人垣根を乘り越えて來る。）

エリーダ　（ヴングルの後にすさり）何うしたのでせう？私をどうしやうといふのですか？

他國人　お前の樣子で分かつてゐる――お前の聲で分かつてゐる――お前が最後に選ぶ人は私に違ひない。

ヴングル　（彼の方に進み出て）妻はそんな事を選ぶ自由を持つてゐない。私がこゝではあれに代つて選びます、そしてあれを保護してやります。さうだ、保護するのだ！若し君がこゝから――此の國から――二度と歸らないつもりで立ち去らないなら、――どんな目に逢ふと思ふか？

エリーダ　いえ、いえ、あなた！それはいけない！

他國人　私を何うしやうといふのです？

ヴングル　君を捕縛させる――重罪犯人として！即座に！君が船に乘

り込む前に！私はショルドウィックでの殺人罪の事を殘らず知つてゐる。

エリーダ　まあ、あなた、――どうしてそんな事を――？

他國人　私もその手段に訴へられた時の用意をして來た。だから――（胸のかくしから拳銃を取り出す）――これで身を固めてゐる。

エリーダ（ヴングルの前に立ち塞がり）いけない、いけない――殺しちやいけない！殺すなら私を殺して下さい！

他國人　お前も其の人も殺しはしない。安心しておいで。これは私自身に用があるのだ。私は自由の人として生きもする死にもする！

エリーダ（次第に激して來て）あなた！私はあなたに言つて置きます――此の人の聞く前で言つて置きます！あなたがこゝへ私を引き留めて置くことの出來るのは、私よく知つてゐます。あなたには其の權

力があります、そして無論それをお用ひなさるでせう！けれど私の心や――考へや――抑へることの出來ない欲望は――あなたに繫ぎとめられるものぢやありません！それがみんな、向ふを慕つて、其の方へ行かうともがいてゐるのですもの――あの向ふにある、不思議なものの方へ――そしてそれが私の家なのです――それをあなたが私の意志に背いてせきとめてお了ひなすつたのです！

ヴングル（靜かに心苦しげに）それはよく分かつてゐるよ、エリーダ！一歩一歩お前は私といふものからすりぬけてゐる。その廣大な、無限な手の屆かないものに對するお前のあこがれが、――結局お前の心を闇の中へ追ひ込んで了ふだらう。

エリーダ　さうですよ、さうですよ――私もそれを感じるの――そうつと私の上に掩ひかぶさつて飛んでゐる、眞黑な翼のやうに。

ヴングル　では、それをそこまで行かせちやならない。それかと言つて他にはもうお前を救ふ道はない少なくとも私にはさうだ。だから——だから——私は——私は此の場で私たちの取引を破つて了ふ。さあ、それでお前は、今こそお前自身の道を選ぶことが出來る——完全な——完全な自由で。

エリーダ　（口も利き得ないやうに少時見つめてゐて）それは本當ですか——本當ですか——其の言葉は？それをあなたは——本當の心の底からおつしやるの？

ヴングル　さうだこの苦しい胸の、本當の奥底から、私はさう言ふよ。

エリーダ　そして、あなたにそれが出來ますか？其の目的が實行されるでせうか？

ヴングル　あゝ、出來るよ。私はやるよ——それもつまり、お前を深く深く愛してゐるからさ。

エリーダ　（顔へながら柔かに）そんなに深く——そんなに優しく、私を愛するやうになつて下すつたのね、あなたは——。

ヴングル　一緒になつてからの年月がそれを私に敎へて呉れた。

エリーダ　（自分の兩手を握つて）それで私は——私はちつともそれを知らなかつた！

ヴングル　お前の考へは他へ向いてゐたのだ。けれども今——今お前は私からも、私の家からも全く自由になつた。こゝでお前自身の本當の生活が——今一度正しい道に戻るだらう。今こそお前は自由に選ぶことが出來る、お前自身の責任でな、エリーダや。

エリーダ　（兩手で頭を握み、ヴングルの方をぢつと見つめて）自由に——そして私自身の責任で？責任もですか？——それで、何もかもみんな變つ

て了ふ！

（汽船の鈴がまた鳴る）

他國人　聞こえるかいエリーダ？最後の鐘が鳴つてゐるよ。行かうか。

エリーダ（彼の方に向き、ぢつと見て、決心の聲で言ふ）もう決して行かない、斯うなつた以上、もう決してあなたと一緒には行かない。

他國人　行かないか？

エリーダ（ヴングルに取りついて）おゝ――此の上は、私、決してあなたを棄てません！

ヴングル　エリーダ――エリーダ！

他國人　ではそれが最後かい？

エリーダ　さうです！これが永久の最後！

他國人　さうのやうだ。何か私の意志よりも一層強いものが出て來たのだ。

エリーダ　あなたの意志はもう私に取つて羽ほどの重みもない。私に取つちや、あなたは死んだ人です。それが海から歸つて來て――そしてまた海へ歸つて行く。けれど、もう〳〵私は、あなたを物凄いとは思はない。もう私を誘惑する力はなくなつたのです。

他國人　左樣なら、ヴングルの奥さん！（垣を乘り越える）此の後あなたはもう、私に取つちや何でもない――たゞ私の生涯で通りかゝつた一つの難船に過ぎない。

（左方に去る）

ヴングル（少時妻の顏を見つめて）エリーダ――お前の心は海のやうだ、その中には潮の滿干がある。一體何がお前を一變させたのだらう？

エリーダ　あゝ、あなたに分かりませんか？私の心が變つたのは――變

らなくちやならなかつたのは――私が自由に選ぶことが出來たからですよ。

ヴングル　それからあの不思議なもの――あれはもうお前を誘惑しなくなつたか？

エリーダ　もう誘惑もしなければ、恐ろしくもなくなりました。望みなら其の中まで見通して――這入つて行くことも出來るやうになりました。自由に選ぶことが出來るから、それで自由に斷ることも出來たのです。

ヴングル　お前が分かりかけて來たよ――段々と。お前はそれを幻にして考へてゐるのだ――目に見えるやうに描いてゐるのだ。お前の海に對するあこがれや――あの他國人からの誘惑は――つまり段々とお前の心の中に目ざめて來る自由の要求が姿をかへて現はれたのだ――たゞそれだけの事だよ。

エリーダ　あゝ、私、何と言つていゝか知らないけれど、あなたは私のためにいゝお醫者さまでした。いい藥を見つけて、それを思ひ切つてお用ひなすつたのです――私のためにはたつた一つの良藥でした。

ヴングル　さうだ、愈危篤といふ間際になると、我々醫者は隨分大膽なこともするが、兎に角これでお前はまた私の手に歸るのだね、さうぢやないか、エリーダや？

エリーダ　えゝ、あなた、ありがたう――これでまたあなたの手に歸るのですわ、本當に歸ることが出來るのですわ、自由に――私自身の意志と――私自身の責任とで歸るのですから。

ヴングル（優しくエリーダを見て）エリーダ！エリーダ！あゝ――これで私達二人は全く一心同體になることが出來るのだと思ふと――

エリーダ　――そして、どんな思ひ出も二人一緒にするやうになつて、あなたのも――私のも同じやうになるでせう。

ヴングル　あゝ、みんな共にするやうにならなくちや、エリーダ！

エリーダ　それから、私達の子供二人も、ねえ――

ヴングル　私たちの？　お前あれらの事をさう言つて呉れるか！

エリーダ　まだ私のぢやありませんけれど――今にさうして見せます。

ヴングル　私達の！（喜ばしさうに急にエリーダの兩手に接吻する）あゝ、その言葉が私に何よりもうれしいよ。

（ヒルダ、バレステッド、リングストランド、アルンホルム及ボレッタ左方から庭に入り來る。）

（同時に町の若い人々及避暑客等路を通り過ぎる。）

ヒルダ（リングストランドに、半ば聲高に）御覽なさいよ、――あれとお父さん

と一對になつて、何だか結婚約束でもした人のやうよ！

バレステッド（それを立聞いて）夏ですからね、お孃さん。

アルンホルム（ヴングルとエリーダの方を見て）イギリス船が出て行きますよ。

ボレッタ（垣根の所に行き）此處からが一番よく見えます。

リングストランド　これが此の夏の最後の航海ですね。

バレステッド「やがて海峽は見渡す限り氷にとざゝれん」さ、詩人が言つてる通りだ。寂しい感じですね、奥さん！その上、あなたもしばらくこちらにいらつしやらなくなるといふぢやありませんか。明日ショルドヴックへお立ちなさいますか、さうですか？

ヴングル　いや――その計畫は破れましたよ。今夜私たち二人は考へを變へました。

アルンホルム（二人を次々に見廻して）あゝ――さうですか！

ボレッタ（進み出て）お父さん――それは本當ですか？

ヒルダ（エリーダの方に行き）では、やつぱり私たちと一緒にゐて下さるの？

エリーダ　然、ヒルダや――お前さへよければね。

ヒルダ（涙と悦びの間にもだへて）あゝ――私さへよければだつて――！

アルンホルム（エリーダに）これは實に意外ですね。

エリーダ（重々しく微笑して）はあ、それはね、アルンホルムさん――。あなた、昨日話した事をおぼえてゐらつしやいますか？一度陸の動物になつたら最後――また海へ歸るといふことは容易ぢやありません海の生活に歸るといふことも容易ぢやありません。

パレステッド　おや、それは、すつかり私が畫いてる人魚と同じことですね？

エリーダ　えゝ、同じです、よ。

パレステッド　唯これだけの違ひでせう、人魚は――そのために死んで了ふが、人間は其の反對に、アックラム――アックリマタイズして行きます。さうです、奥さん、人間は、同化して行くことが出來るのですよ。

エリーダ　はあ、自由があればそれが出來るのですね、パレステッドさん。

ヴングル　それから自分自身の責任でねえ、エリーダ。

エリーダ（手を差し出して早口に）さうです〳〵それが一番大事ですわねえ。

（大きな汽船が音もなく峽灣を辷り下る。音樂の海岸に近づくのが聞こえる）

幕

20641

大正三年二月二十五日印刷
大正三年二月二十八日發行

（正價金九拾錢）

譯者　島村瀧太郎
發行者　荒川信賢　東京市小石川區音羽町四丁目十一番地
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地

早稲田大學出版部
不許複製

發行所　東京牛込早稲田
早稲田大學出版部
振替東京一一二三番　電話番町二四二二三七四番

日清印刷株式會社印刷

賣捌所

東京神田　東京堂
東京日本橋　至誠堂
東京京橋　北隆館
大坂北區　盛文館

（其他全國各地書肆）